

# 唐古・鍵遺跡 考古資料目録Ⅰ

—土器編 1（絵画・記号・文様）—



田原本町教育委員会

2015.3

## 例 言

1. 本書は、唐古・鍵遺跡の出土品のうち、特に重要と思われる遺物について種別ごとに報告するものである。今回は、第1冊目として「土器編1(絵画・記号・文様)」とした。
2. 本書に収録した遺物は、唐古・鍵遺跡第3次から第115次までの調査で出土した遺物の中から選定したものであるが、一部は遺跡において表面採集した遺物も含んでいる。発掘調査は、第3次から第12次までが奈良県立橿原考古学研究所、第13次以降は田原本町教育委員会が実施したもので、いずれの調査の出土品も田原本町教育委員会所蔵の遺物である。
3. 遺物写真の撮影は、亀村俊二・佐藤右文・田原本町教育委員会事務局文化財保存課職員による。
4. 遺物観察表の作成は清水琢哉・柴田将幹・西岡成晃・江浦至希子がおこなった。
5. 本書は、藤田三郎が執筆し、中尾澄子・清水・柴田・江浦・小松博子・榊原初美・中谷利枝・服部文子の協力を得た。編集は、藤田・西岡がおこなった。

# 目 次

## 第Ⅰ部 唐古・鍵遺跡の調査概要

1. 遺跡の位置と立地…………… 1
2. 遺跡調査の経過…………… 1
3. 弥生集落の構造と変遷…………… 1
4. 墓域と衛星集落…………… 6

## 第Ⅱ部 出土資料の全容と個別資料の概要

1. 出土資料の全容…………… 7
2. 絵画土器の概要…………… 8
3. 記号土器の概要…………… 14
4. 土器文様の概要…………… 16

## 第Ⅲ部 考古資料目録

### 凡例

1. 絵画土器…………… 20
2. 記号土器…………… 58
3. 土器文様…………… 82

### 附

1. 遺物図版…………… 96
2. 遺物一覧表…………… 100
3. 文献(発掘調査関係)…………… 110

## 第 I 部 唐古・鍵遺跡の調査概要

### 1. 遺跡の位置と立地

唐古・鍵遺跡は、弥生時代の代表的な環濠集落跡である。奈良県北西部にあたる東西15km、南北20kmほどの奈良盆地の中央部に位置し、寺川と初瀬川に挟まれた標高47～49mの沖積地に立地する。古くは「唐古遺跡」として知られていたが、1977年の第3次調査の成果により、奈良県磯城郡田原本町大字鍵地区まで集落が広がることが明らかになった。このことから、両地名をとり遺跡の名称が「唐古・鍵遺跡」へと変更されている。

遺跡の大半は、一辺約109mの方形区画の水田によって削平されている。これら水田は、古代以降から中世にかけて整備された条里制と呼ばれる土地区画であり、現状では弥生時代の地形を判別できない状況になっている。しかしながら、微地形復元から、東南から西北方向に緩傾斜した微高地上に集落が経営されていたことが判明している。現在の水田下、約0.5mに弥生時代の遺物包含層があり、弥生時代前期から古墳時代前期に至る集落関係の遺構・遺物が良好な状態で保存されている。その範囲はおよそ東西700m、南北750mの不整形を呈し、約42万㎡を占めている。

### 2. 遺跡調査の経過

この遺跡は、1901年の高橋健自の採集資料の報告に始まり、その後の資料紹介と小規模な発掘調査を経て、1936・7年の末永雅雄博士らによる唐古池発掘調査を第1次とし、第2次調査（第2次1967・第3次1977～）から奈良県立橿原考古学研究所、第13次調査（1982～）以降は田原本町教育委員会によって継続的な調査がおこなわれている。2015年3月現在、第115次を数えるが、これまでの調査面積は約36,200㎡で、遺跡全体の8.6%に過ぎない。

第3次調査は町立北幼稚園建設に伴う調査で、集落を囲む南側の環濠を検出するとともに銅鐸の鋳型などの出土によってその後の範囲確認調査を継続的に実施する契機になった。それから第33次調査までの間、緊急調査と並行して範囲確認調査をおこない、集落を囲む多条環濠、竪穴住居や井戸などの生活遺構の検出により、遺跡の全体像がほぼおさえられるようになった。第61次調査（1996）から第98次調査（2004）までの11調査では、集落の構造解明のための遺跡内容確認調査を実施した。それら調査のなかで青銅器工房跡や大型建物跡などを検出し、唐古・鍵遺跡は近畿地方の盟主的な集落として位置づけられるようになった。また、1999年には国史跡の指定を受け、公有化を図るとともに史跡公園として整備を進めているところである。

### 3. 弥生集落の構造と変遷

唐古・鍵遺跡は、弥生時代前期から古墳時代前期まで営まれた集落であり、検出された遺構には竪穴住居、大型建物、井戸、木器貯蔵穴、環濠、区画溝などの居住関係、集落の周辺に形成された方形周溝墓、土器棺などの墓関係、また、集落内部を縦断する突発的な流路（河川）などがある。

これまでの調査成果から、集落は弥生時代前期初頭に成立し、古墳時代前期まで営々と断絶することなく営まれたことがわかっている。長期にわたる集落形成の中で、集落構造は大きく4つの画期が認められ変遷する。

## 第 I 部 唐古・鍵遺跡の調査概要

第 1 の段階は弥生時代前期で、集落の成立・分立期である。遺跡中央部には微低地が存在し、集落縁辺には河川（南方砂層）が存在するようである。集落遺構は微高地に立地し、それぞれの微高地（北地区、南地区、西地区）の 3ヶ所に集落は分立していた。北・南地区は約 130×250m、西地区は規模が大きく約 170×450m の居住範囲を有している。その内部では、多数の木器貯蔵穴が検出され、鍬や鋤の農耕具、斧の柄などの工具、高杯や鉢などの容器など、各種木製未成品が多量に出土している。特に西地区と北地区では、密集度が高い。また、前期段階の石庖丁の石材は遺跡の南方 6 km にある耳成山産の流紋岩を利用しており、西地区の第 16 次調査で、多量の流紋岩石材が出土している。原石から石庖丁の製品までの各製作工程がわかるものが出土しており、唐古・鍵遺跡では弥生前期の集落成立段階から単に稲を作るだけでなく、木器や石器の製作などさまざまな手工業製品を手がけ、唐古・鍵ムラで自給し、周辺のムラに製品を供給していたと推定される。このようなことから、前期段階から地域の中核的な存在であったと推定される。

前期の新しい段階には、各地区の微高地縁辺に幅 2～3 m の溝（環濠か）が掘削されるが、この溝は短期間で埋没し、次への発展段階を迎えることになる。この時期の西地区において、弥生時代としては、最も古い総柱の大型建物跡が検出されている。梁行き 7 m、桁行き 13.4m 以上の南北棟建物で、独立棟持柱をもつ。残存する柱は直径 0.6m のケヤキ材 3 本とヤマグワ（棟持柱）1 本である。附属施設は未調査であるが、この建物は西地区の中核建物と考えられる。

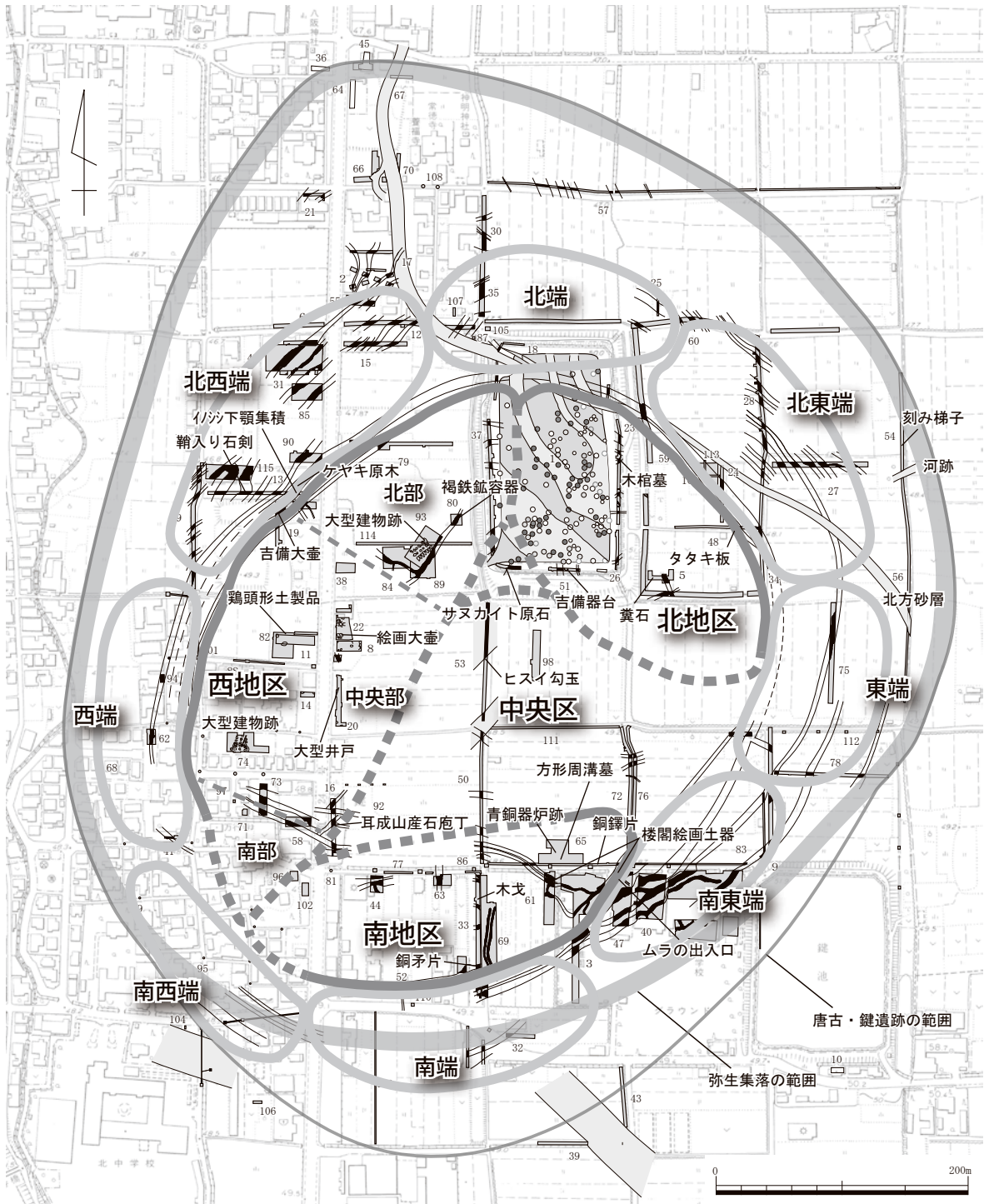
第 2 の段階は弥生時代中期で、大環濠集落の成立・発展期である。この時期が環濠集落として最も繁栄し、集落の内容も充実している。3ヶ所に分立していた弥生時代前期集落を取り囲むように大環濠が掘削された。1つとなった巨大な集落内部は、地形や環境が改変され、居住環境が整えられることになった。ムラを囲む大環濠は、幅 7～10m 前後の規模を有し、直径 400m の居住区を規定している。さらに環濠は外側へ 3～5 条と多条化を図られる。これら環濠群は、居住区の外縁を幅 150～200m で囲み、「環濠帯」を形づくることになり、集落景観が一変したと考えられるのである。

居住区の内部は、多数の溝で区画された様々な地区で構成されていたと考えられるが、各地区の特殊性は、未調査部分が多く現段階では不明である。西地区の北部では、大和第Ⅲ-2 様式の大型建物跡が検出されているが、その周辺にも大柱が存在しており、複数棟の大型建物の存在がうかがえる。南地区の中央部では、中枢部を区画すると考えられる 2 条の小溝が検出されている。この区画溝は弥生時代中期後半から後期末まで維持され、その内部は高床建物群、外側は竪穴住居群で構成されていた可能性が高い。このような傾向は、区画された他の地区でも同様にみられる。また、出土遺物においても南地区では木器の未成品や青銅器鑄造関連遺物や炉跡、北地区ではサヌカイトの原石や剥片がまとまって出土するところなどがあり、今後、集落構造や構成員などを想定することも可能になってくるであろう。このように、大環濠によって統合されたムラ内部では、居住区内の性格が定まっていたと考えられる。

第 3 の段階は弥生時代後期で、環濠集落の再建・発展期である。唐古・鍵遺跡では、中期後半から末にかけての洪水堆積層を各所で検出している。これは、ムラを囲む環濠や凹地に厚い砂層堆積があり、ムラ全体を襲った災害であったと考えられる。中期末の災害は、ムラを放棄させるには至

### 3. 弥生集落の構造と変遷

らなかった。中期の大部分の環濠は埋没したが、規模を縮小しすぐに再掘削された。その後、後期の期間を通じて、中期と同様、あるいはそれ以上の環濠群でムラが囲まれることになる。ここで重要なのは、低地における中期の拠点的な大集落の大半が、断絶・解体あるいは、位置を変え縮小するのに対し、唐古・鍵ムラでは解体せずにさらに規模を拡大することにある。非常に定住性の強い遺跡であるといえ、ここに唐古・鍵遺跡の弥生時代を通しての特質が見られる。後期の遺構は多数の井戸が検出され、完形土器が多量に出土しているが、それ以外の遺構は不明なところが多い。



第1図 唐古・鍵遺跡の調査成果と地区区分図 (S=1/5,000)

第 I 部 唐古・鍵遺跡の調査概要

第 1 表 唐古・鍵遺跡の地区別遺構・遺物変遷表

時 期			集落全体		北地区		西地区	
			遺跡・遺構	遺物	遺構	遺物	遺構	遺物
弥生時代 前期	大和 第 I 様式	I-1	集落の形成	凸帯文土器 彩文土器	南方砂層・中央砂層	集水施設（大壺・17 次）		
					木器貯蔵穴群		木器貯蔵穴群	投弾（20 次） 木製差牙のあるイノシシ下顎（37 次）
	大和 第 II 様式	II-1	大環濠の掘削	伊勢湾岸地域産の土器	木棺墓（23 次）	糞石（5 次）	西地区の環濠？（41 次）	流紋岩原石・石庖丁製作（16 次）
						麻布切れ（23 次）	大型建物跡（74 次）	
					大木剥貫井戸（1 次）			
	大和 第 III 様式	III-1	大環濠の掘削		大型井戸（59 次）		大型井戸（20・37 次）	ケヤキ原木・イノシシ下顎集積（13 次）・サヌカイト原石（37 次）
							大型建物跡（93 次）	
	大和 第 IV 様式	IV-1	環濠の多条化 洪水層	絵画土器	大木剥貫井戸（23 次）	須玖式土器（34 次） 結晶片岩製石庖丁埋納（59 次）		石製銅鐸型（93 次）
								翡翠製勾玉を入れた鳴石容器（80 次）
	大和 第 V 様式	V-1	洪水層・環濠の埋没		北方砂層		結晶片岩製石庖丁集積（13 次）	吉備産大壺（19 次）
								鞘入り石剣・異形高坏・火鎖口（13 次）
	弥生時代 後期	大和 第 VI 様式	VI-1	環濠の放棄		吉備産器台（51 次）		
大和 第 VI 様式		VI-2	盆地東南部産の土器	記号土器		巴形銅器（23 次）		
								鶏頭形土製品（11 次）
古墳時代 初頭	庄内 式	0 式	環濠再掘削					
						方形周溝墓（74 次）	ヤリガンナ（74 次）	
古墳時代 前期	布留 式	0 式			丹塗り壺・槽（5 次）			
					大形土坑（24 次）・井戸・溝（26 次）	刻み鹿角（24 次）	井戸（8 次）	山陰系壺（8・38 次）
古墳時代中期		集落の形成		大形井戸（59 次）	馬骨・田下駄・腰掛・手網・子持勾玉（59 次）		子持勾玉（38 次）	
古墳時代後期		古墳群の形成		土坑（1・59 次）		方墳（11・19・20・84 次）	形象埴輪（84 次）	

3. 弥生集落の構造と変遷

時 期			南地区		中央区		周辺集落・墓
			遺構	遺物	遺構	遺物	
弥生時代 前期	大和 第Ⅰ 様式	I-1				前期大壺 (53 次)	
		I-2			木器貯蔵穴 (53 次)		
	大和 第Ⅱ 様式	II-1					
		II-2	方形周溝墓 (91 次)	鑿に転用された細形銅矛片 (33 次)			玉作り関係遺物 (98 次)
		II-3					清水風遺跡 1 次 (方形周溝墓)
	大和 第Ⅲ 様式	III-1			集水施設 (大壺・50 次)		
		III-2			集水施設 (大壺・50 次)		法貴寺齋宮前遺跡 7 次・阪手東遺跡 2 次 (方形周溝墓)
		III-3		大臼大壺井戸枠 (69 次)			
		III-4		木戈 (33 次)・銅鐔片 (77 次)			
	大和 第Ⅳ 様式	IV-1		榎間絵画土器 (47 次)・流紋岩原石 (52 次)			銅戈絵画土器 (53 次)
		IV-2	青銅器鑄造工房 (65 次)	青銅器鑄造関連遺物 (3 次ほか)	洪水層 (53 次)		清水風遺跡 1・2 次・法貴寺齋宮前遺跡 7 次・羽子田遺跡 5 次・八尾九原遺跡 1 次 (掘立柱建物・井戸・土坑・溝)
	弥生時代 後期	大和 第Ⅴ 様式	V-1		榎間絵画土器 (61 次)		翡翠製大形勾玉 (53 次)
V-2							
大和 第Ⅵ 様式		VI-1					
		VI-2					
古墳時代 初頭	庄内 式	VI-3	方形周溝墓 (61・65・77 次)	板状鉄斧 (40 次)			清水風遺跡 2 次・羽子田遺跡 5 次ほか・八尾九原遺跡 1 次ほか (掘立柱建物・井戸) / 法貴寺北遺跡 1 次 (方形周溝墓)
		VI-4					
		0 式					
		1 式	井戸 (40 次)	木錘 (40 次)			
古墳時代 前期	布留 式	2 式					
		0 式					
		1 式	土坑 (3・69・76 次)				
		2 式					
古墳時代中期							
古墳時代後期				形象埴輪 (40 次)	前方後円墳 (72・76 次)	馬・人物・蓋形等埴輪・笠形木製品等	

※ゴシックは時期確定遺構・遺物、明朝は時期不確定遺構・遺物を示す



## 第I部 唐古・鍵遺跡の調査概要

第4の段階は、弥生時代終末から古墳時代前期の時期で、それまで維持されてきた「環濠帯」機能の消失期である。後期初頭に再掘削された中期の環濠群は、溝さらえ、あるいは再掘削されながら維持されたが、後期末には多量の土器の投棄をもって完全に埋没することになる。この現象は環濠の各所でみられ、それも完全な土器を多く投棄していることから、環濠集落の解体（放棄）にともなう儀礼的行為と考えることもできる。ただし、ムラが完全に廃絶したわけではなく、集住度は低いながらも井戸などの居住遺構を検出している。また、南地区においては、集落内部に方形周溝墓が造られるようになっており、集落構造が変質しているようである。次の古墳時代前期（庄内期）には、弥生時代前期と同様3ヶ所の地区を中心に居住遺構が展開する。続く布留期には遺構数も増加する傾向がある。ここで重要なことは、弥生時代の環濠を利用（再掘削）してムラを囲むことである。弥生時代中期以来、環濠集落という形態が長期間営まれてきたが、周辺地域では環濠を放棄することで新たな時代へと展開していった。しかし、唐古・鍵遺跡の布留期の環濠は、その点において重要な問題をもっている。

### 4. 墓域と衛星集落

墓域については不明な点が多い。北地区の縁辺で弥生時代前期の木棺墓2基、また、南地区の東南部側や西地区の北西側の集落の縁辺では、大環濠掘削に前後する時期に方形周溝墓が造られている。環濠内部の居住区内では、南地区で弥生時代後期後半の方形周溝墓3基、西地区で庄内期のもの1基が検出されているが、大規模なものでない。また、弥生時代中期の土器棺や土壇墓は散発的に環濠帯付近とムラの中央部で検出されているが、いずれも居住区からは離れており、墓域を形成するというようなものでない。このような状況から、墓は、中期中葉以降は集落からかなり離れた場所で築造されたと推定され、唐古・鍵遺跡から北500mの清水風遺跡（弥生時代中期初頭・後期末）や東北東400mの法貴寺北遺跡（弥生時代後期末）、南600mの法貴寺斎宮前遺跡（弥生時代中期初頭・中葉）、同じく南1kmの阪手東遺跡（弥生時代中期中葉）などが墓域としてあげられる。

これら唐古・鍵遺跡の墓域に想定される衛星的なムラでは、それぞれの遺跡間で時期を違えた生活遺構を検出している。このほかに衛星集落とみなせる南300mの小阪里中遺跡、西800mの八尾九原遺跡なども弥生時代中期後半と後期の小集落であり、いずれも唐古・鍵遺跡から谷1つ隔てた所に立地している。これら小集落は単独では維持されず、おそらく唐古・鍵遺跡と運命共同体的存在であり、「唐古・鍵遺跡群」として把握できるものである。このような立場からみれば、唐古・鍵遺跡から半径1kmほどをその領域とすることができるであろう。

生産域についても全く不明である。しかしながら、唐古・鍵ムラを維持するにはかなりの領域を必要としており、前述した唐古・鍵ムラの分村を含めた「唐古・鍵遺跡群」の領域に存在していたと推定しておく必要がある。

## 第Ⅱ部 出土資料の全容と個別資料の概要

### 1. 出土資料の全容

唐古・鍵遺跡の様々な遺構は2つ乃至3つの遺構面から掘削されており、各遺構面を覆うように遺物包含層が形成されている。このような遺物包含層は、長期にわたる集落形成により黒色土が土壌化したもので厚さ20～40cmほどで遺跡全体を覆っている。最上部の遺物包含層は酸化が進むとともに鉄分の凝縮で堅緻になり、遺物の状態は劣悪であるが、これ以外の部分での保存状態は概ね良好で当時の状態を示すものが多い。遺物は多種多様な遺構および遺物包含層から出土しているが、唐古・鍵遺跡の構造が居住区とそれを取り囲む環濠帯であるため、遺物の包含量は居住区から環濠1～2条目までが多く、その外側に掘削された環濠の遺物量は激減するという状況がみられる。また、径400mの居住区内においても時代によっては粗密がみられる地区もある。弥生時代前期から古墳時代前期までの遺物が濃密に分布するのは、西地区の中央部と北地区の北西部である。南地区は中期から後期にかけて、特に後期の遺物量は膨大になる。最も多いところでは、調査面積1㎡に対して遺物箱（W34cm×D54cm×H15cm）2箱の出土をみる。第3～115次の遺物量は約13,000箱であり、大半が弥生土器で、次いで木製品、石器である。

本遺跡から出土する弥生時代の遺物としては、弥生土器・土製品・石器・木製品・金属器・ガラス製品・骨角器などの人為物と獣骨・種子類などの自然遺物があり、なかでも弥生土器は膨大な量を占める。これら遺物は、土坑や溝などから良好な一括資料として出土するとともに、水分を含んだ粘土質の土壌から出土するため保存状態が良好なものが多い。このほか、複合遺跡のため、弥生時代以外の遺物も出土している。弥生に比べれば少量で、縄文土器、土師器・須恵器・埴輪などの古墳時代遺物、黒色土器・瓦器・瓦質土器・瓦・銭貨などの中近世遺物などがある。

ここでは、本目録にかかる弥生時代遺物について、その様相を概略することにする。多種多様な弥生時代遺物であるが、一般的には廃棄された破損品がこれらの大半を占めている。一方、このような状況と異なり、完形品として出土する特殊なものもあり、特に多いのが井戸からの出土遺物である。大環濠が掘削された中期初頭以降、集落内部では多数の井戸が掘削され、その井戸にさまざまな遺物が供献された。完形土器は中期段階では数点であったが、後期以降では多量に供献される。今回、第Ⅲ部で目録として掲載した記号土器もこのような出土状況のものが多い。また、後期以降は完形品の割合が高くなり、環濠にも多量の土器が完形で投棄されている状況がみられる。これ以外では、鍬や鋤などの農具や容器などの完存する木器未成品が出土するが、これらは木器貯蔵穴内で製作途中品として貯木されていたものがそのまま残されたものである。いずれにしても井戸や土坑、環濠などの深く掘削された大規模な遺構からの出土であり、水分を含んだ粘土質の土中に埋没しており、保存状態が良好で時期的にも一括性が高い資料群として取り扱えるものである。発掘調査時には、このような状態のものを選択し、遺構内堆積土を1mmメッシュの篩で水洗し遺物の抽出をおこなうようにしている。

## 第Ⅱ部 出土資料の全容と個別資料の概要

### 2. 絵画土器の概要

唐古・鍵遺跡における絵画土器は、弥生土器にヘラ状工具などを用いて描いたもので大半が線刻画であるが、一部タタキによる陽出のもの（絵画067）もある。唐古・鍵遺跡では、1900年代前半に採集された絵画土器が報告され、その後の第1次調査から現在までの発掘調査で出土したものを合わせると、おおよそ370点を数える。また、唐古・鍵遺跡の分村と推定される清水風遺跡では約50点、法貴寺斎宮前遺跡で1点、八尾九原遺跡で3点の出土があり、唐古・鍵遺跡の衛星集落と目される遺跡も、絵画土器の出土頻度が高い傾向が見受けられ、唐古・鍵遺跡を中心とした地域が絵画土器分布の一中心地になっている。

**（絵画土器の所属時期）** 絵画土器は小破片のため、詳細な時期を決定できるものは少ないが、出土遺構の時期から大半は弥生時代中期後半（大和第Ⅳ様式）～後期初頭（大和第Ⅴ様式）に所属すると考えられ、特に大和第Ⅳ様式のものが多い。その他のものは、それに前後する時期のもので少数である。土器型式上、時期の判別できるものとして古く位置づけられるものに、絵画047・100などがあり、大和第Ⅲ-2・3様式頃が初出の資料となる。時期が新しい絵画土器としては、絵画096や124の大和第Ⅵ-3・4様式で、絵画の描き方も稚拙なもので退化傾向がみられる。

**（絵画土器の状態と出土遺構）** 唐古・鍵遺跡では、完形で出土した絵画土器はなく、すべて破片となって出土している。ただし、全体の2/3程度まで復元できたものが絵画024や089などごく僅かに存在する。これら絵画土器の出土遺構は、井戸や土坑、柱穴、環濠、区画溝、遺物包含層などさまざまに偏ることはなく、他の一般的な土器と混在して出土していることから、日常生活の中の土器廃棄に伴って一緒に廃棄されたと想定される。このことから最終的な取り扱い方は、一般土器と同様に日常生活の中で使用されていたと考えられ、出土遺構からは絵画土器の性格は類推できない。ただし、唐古・鍵集落内での地区別の出土傾向をみると、全ての地区で出土しているが、居住遺構が多く検出されている南地区が最も多く、次いで北地区になる。西地区は比較的少ない。

**（絵画土器の器種）** 前述したとおり、絵画土器の大半は破片で器種を特定できるものは少ないが、破片の傾きや調整手法から壺が大半とみられる。さらに壺のなかでは、大和第Ⅳ様式の短頸壺（絵画002・024など）や有段口縁壺（絵画003・089など）のような無紋の飾らない壺に描かれる場合が多い。それらの壺の中には、口縁部に片口を有するものがあることから、液体貯蔵用（水壺・酒壺）と考えられる。反対に櫛描文様で飾られる壺に描かれるものは大和第Ⅲ様式の壺（絵画047・100）である。これら壺以外では、壺蓋（絵画007）、甕（絵画066）、器台（絵画016・078など）、鉢（絵画124）などがあるが、数点程度である。また、搬入土器と推定されるものもある。絵画010・047は摂津地域、絵画048は生駒西麓産の可能性はある。

**（土器製作と絵画線刻の関係・描法）** 土器製作と絵画の線刻の関係については、いつ描かれたのかという点において絵画の性格を考えるうえで重要である。一般的には、絵画は土器が製作された後に描かれている。しかし、少数であるが土器製作途中に絵画を描いているものがあり、絵画が消えても新たに加筆せず、絵画が消えているもの（絵画015）がある。また、一度描いたものを消して新たな別の意匠を描くもの（絵画004・014）、描き直すもの（絵画077）もある。絵画を描くため

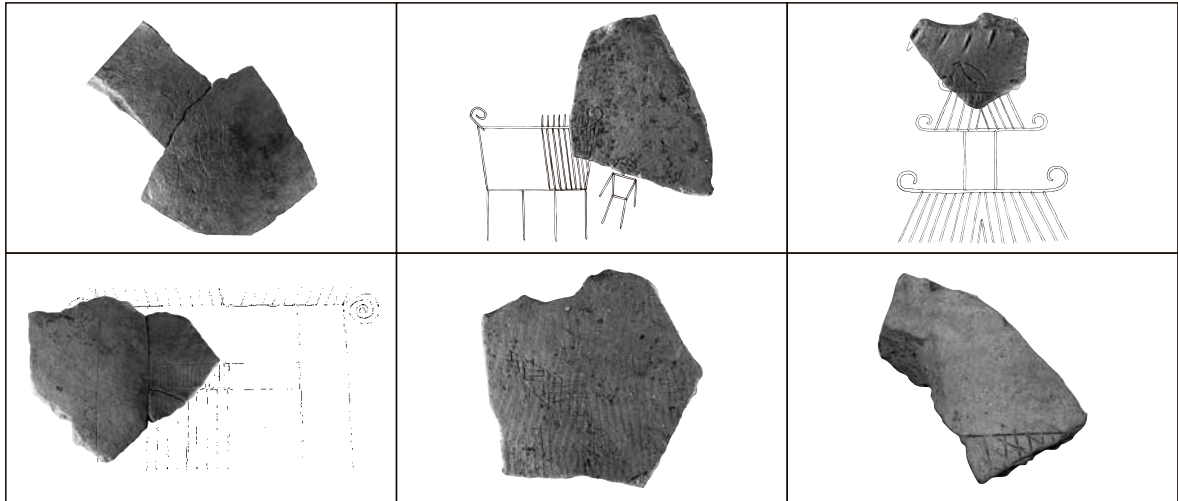


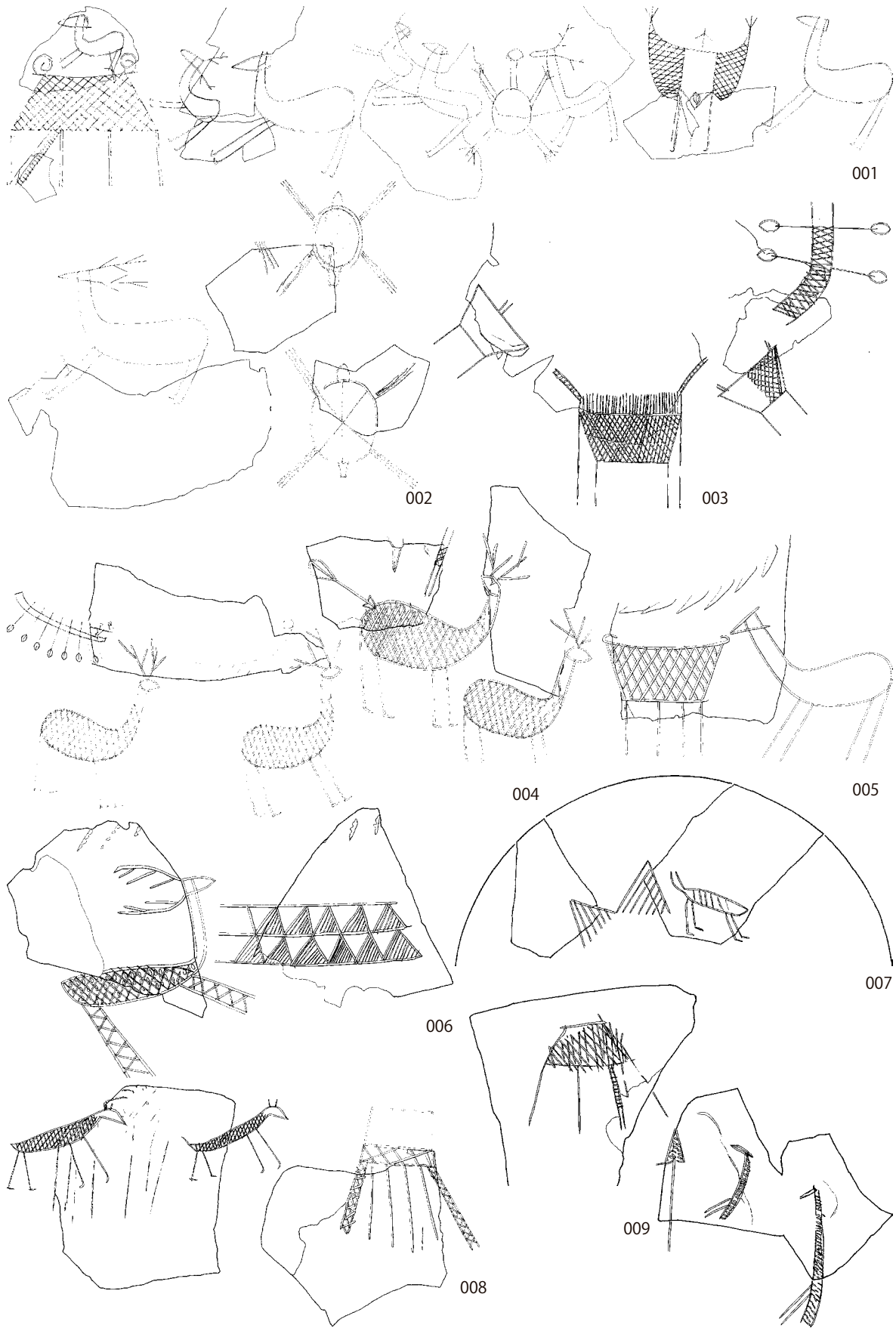
写真1 清水風遺跡（上段）・八尾九原遺跡（下段左・中）・羽子田遺跡（下段右）の絵画土器

に土器表面を取えて整えることはせず、タタキ痕跡やハケ調整痕のままでその上に描いているものが多い。また、極細の針描きのような細線の絵画（絵画111）もあり、普通では見過ごしてしまうようなものも存在する。壺蓋の絵画007は内面に描かれており、使用時には見えない。

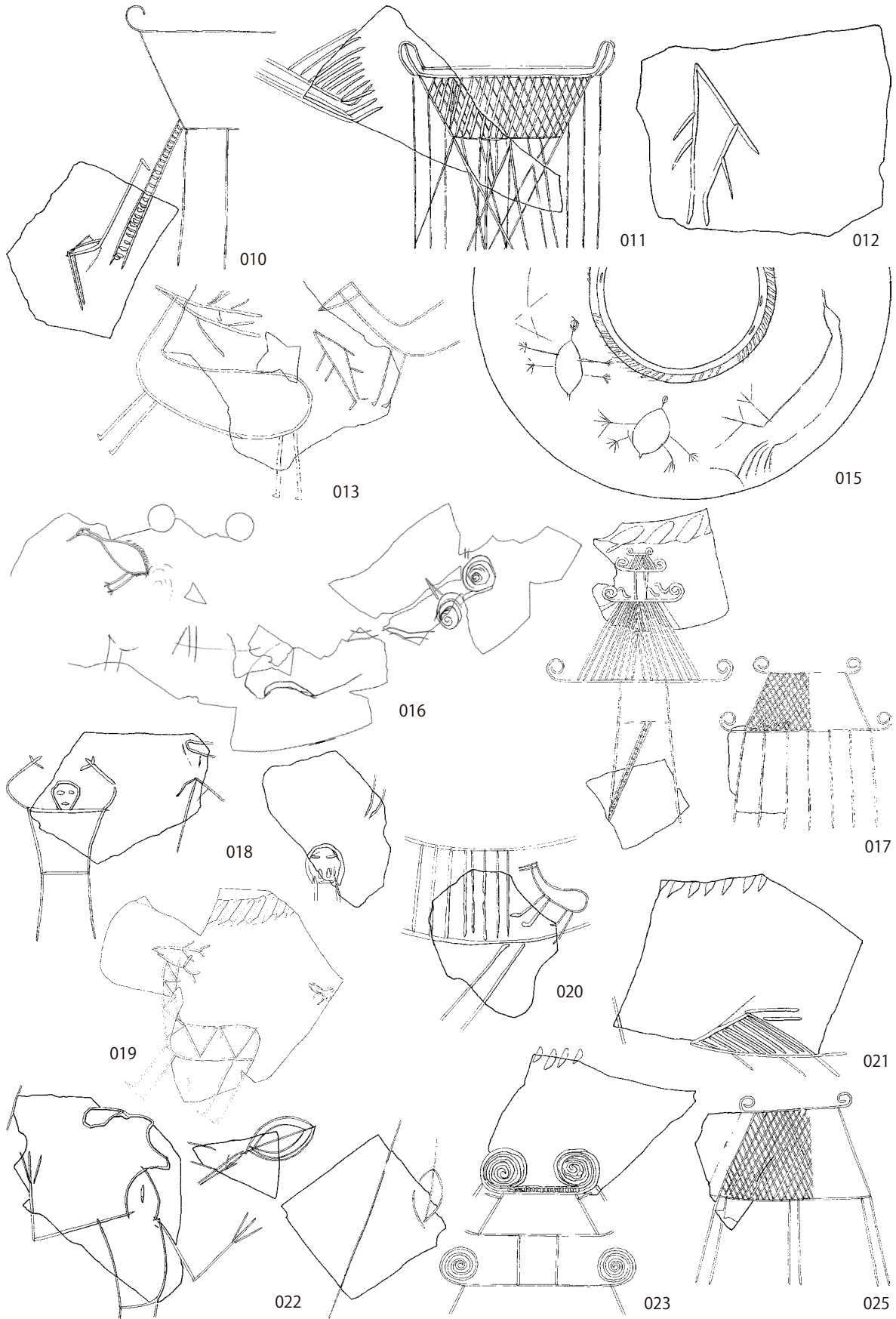
以上のように、出土状況や絵画の描き方や見え方からすれば、第三者に絵画を見せるのではなく、土器に絵画を描く行為が重要なのであって、土器に絵画のもっている意味を封じ込める行為とみなすことができよう。つまり、土器製作者自身が、その後に執行されるであろう祭祀の内容を想定して土器を製作し、絵画を線刻しているということである。マツリの際に供えられた後は、日常の土器として利用されたと考えられる。ただ、結果的に絵画が消えなければ、第三者も見ることが可能であり、絵画の意味は理解されるのである。

**（絵画の意匠）** 絵画土器の意匠としては、建物・船・武器・人物・鹿・魚・スッポン・龍が見られ、龍を除き、集落やその周辺に存在するものである。これらは弥生風景の中でみれば、特定の主題に限られており、その意匠は選択されていたと考えられる。鹿が圧倒的に多く、次いで建物、人物である。鹿は複数の群れで描くことが多いことから、実質的には鹿、建物、人物の3つの画題が絵画土器の重要な構成要素になっていると考えられる。建物では、寄棟や切妻造りの高床建物、大型建物、楼閣などの種類がある。人物では、手を挙げる人物、盾と戈を持つ人物、船を漕ぐ人物がある。鹿は、角の有無で牡鹿と牝鹿が区別できるが、表現上、判断の困難なものもある。唐古・鍵遺跡では、鹿の描き方に特徴がみられる。大和第IV様式の鹿が最も表現力があり、頭部は杏仁形、角は主幹と角枝、頸部は長く、胴部が膨らみ、臀部を丸く、脚は突っ張るような左向き鹿（絵画001・019）が描かれる。大和第V様式の鹿は、表現力が稚拙になる。角の表現から辛うじて鹿と判別できる絵画（絵画080～085）へと変遷する。相対的に弥生時代後期以降の絵画は、描き方が稚拙になり難解不明なものが多くなっている。また、並列的構図で、鹿と建物が対になるもの（絵画005）があるが、その絵画が文様へと置換されたと考えられるもの（絵画006・007）や、戈を表現した絵画（絵画045）は盾と戈を持つシャーマンを戈のみで省略・象徴化したもの、絵画の一部が象徴化され記号となったと考えられるもの（絵画096・記号073）など、絵画の多様な変化がみられる。

第Ⅱ部 出土資料の全容と個別資料の概要

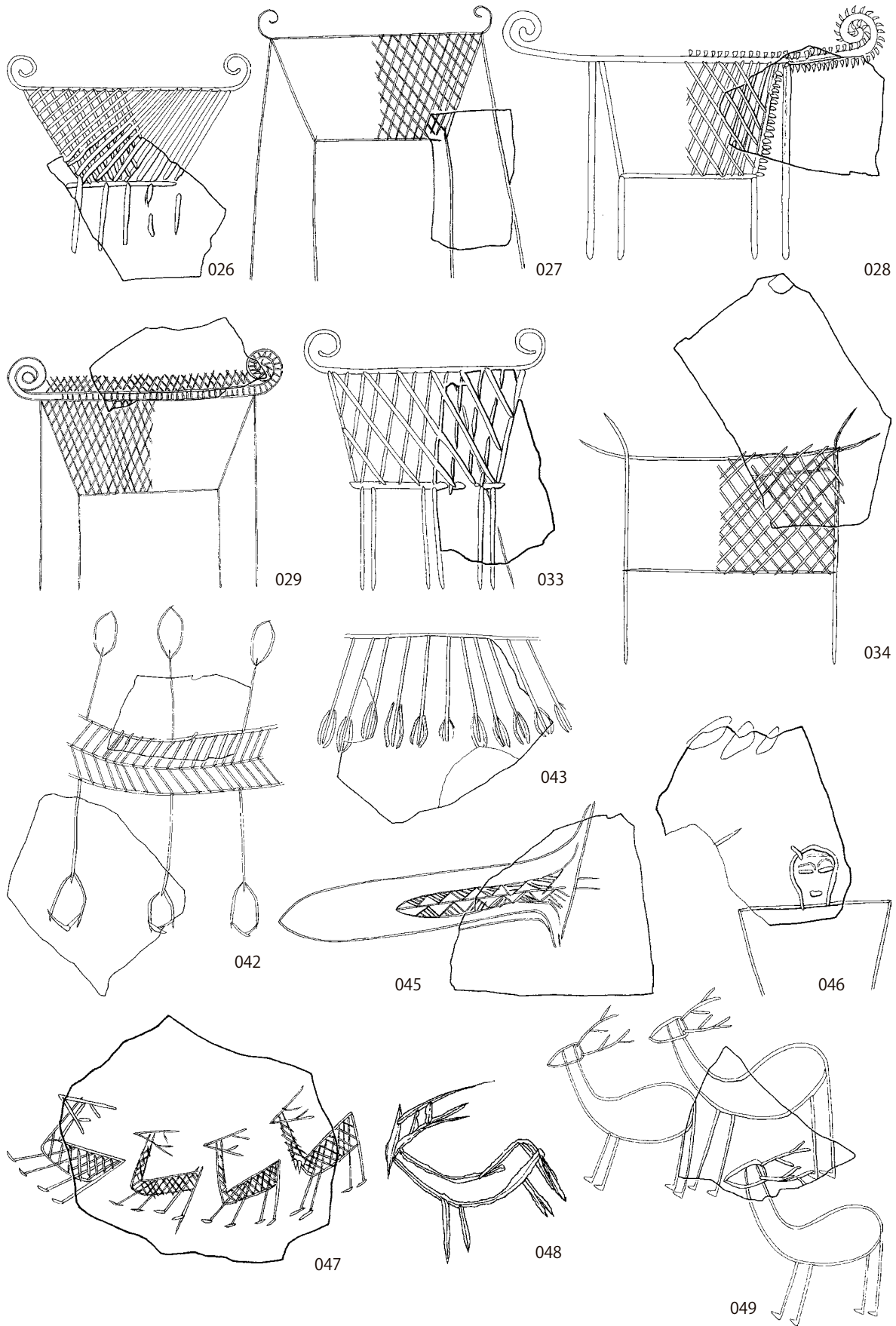


第2図 唐古・鍵遺跡の土器絵画1

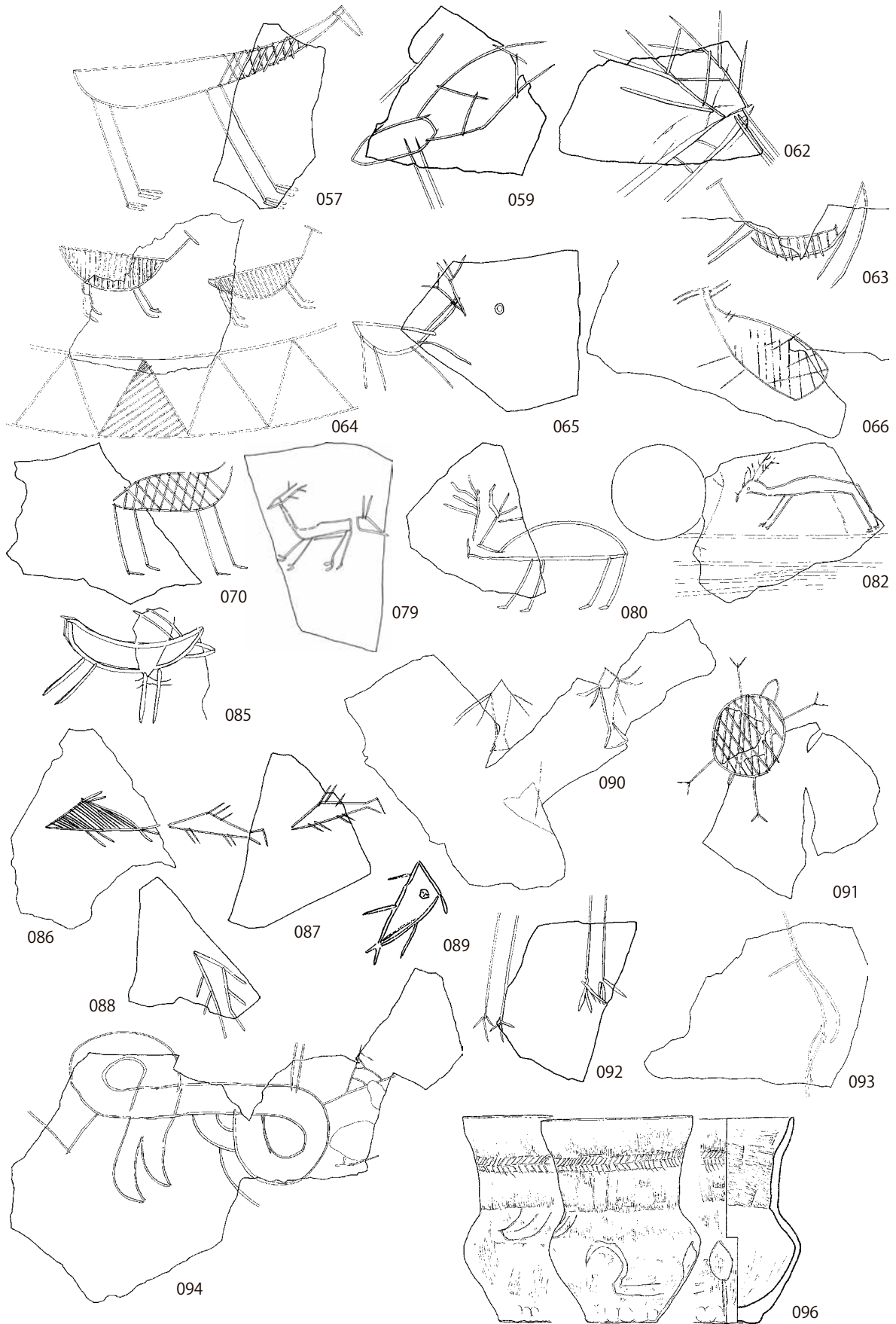


第3図 唐古・鍵遺跡の土器絵画 2

第Ⅱ部 出土資料の全容と個別資料の概要



第4図 唐古・鍵遺跡の土器絵画3



第5図 唐古・鍵遺跡の土器絵画 4



## 第Ⅱ部 出土資料の全容と個別資料の概要

### 3. 記号土器の概要

記号土器の記号は、土器焼成以前の柔らかい段階に、ヘラや櫛状工具で描いたものや直径1cmほどの竹管状の工具を押し付けたもの、赤色顔料で描いたもの、粘土紐・粘土粒の貼付（浮文）で表現したものがある。記号は、印として付けられたもので簡素な形態のため、文様や省略（象徴化）された絵画とは区別できないものも多くある。ここでは、その分別が困難なものもあるが、一応、連続して器面全体に表されたものを文様、器面の一部のみに表したものを記号・絵画とした。記号と絵画の違いは、意匠が明らかな絵画や絵画の退化表現が追えるものを絵画として認識し、記号体系のなかで位置づけられるものや完全に絵画が象徴化され記号となっているものは記号として、分類しておく。

唐古・鍵遺跡の記号土器は、全てを抽出していないため、点数の把握が困難である。しかし、絵画土器より多く、かなり雑破であるが、数百点後半以上で1,000点前半までの範囲であろう。

**(弥生時代前期・中期の記号土器)** 記号として最も古いものは、弥生時代前期前半の土器につけられたものである。広口壺の底部近くに2種の記号（↓・U）が描かれている。本目録においては、大和第1-2様式の広口壺に逆「U」字形の浮文による記号001がある。このような記号は、その後の弥生時代を通じて記号の基本形となっており、重要な記号として位置づけられるものである。ただし、前期の記号は散発的で、中期に至っても低調であり、微増傾向がみられるのは中期後半からである。

中期の記号の特徴としては、記号003～007のように土器焼成後に石器などで記号を刻んでいる（後刻）ものが多いことである。壺に記号を刻むことが多く、その位置は口縁部内面・外面、頸部、胴部上半・中央などさまざまところに付けられている。記号の種類は、上向き・下向きの三叉形（↑・↓）、×、▽などがある。大半は破片で出土している。注目される記号土器としては壺棺（記号007）に刻まれたものがあり、胴部中央に上向きの三叉形を焼成後に刻んでいる。大和第IV様式になると、焼成前につけられた記号（記号008・009）も散見するようになる。

**(弥生時代後期の記号土器)** 後期になると、絵画土器が衰退するのに対し、爆発的に記号土器が増加するとともに記号の種類もバラエティーに富むようになる。これらの記号土器は、特に大和川水系の大阪府中部や大和南部地域に多く分布し、前段階の中期に絵画土器が盛行した地域と重なることから、絵画を描くという行為が記号の発達を促した可能性が高いと考えられる。

記号が付けられた土器の多くは壺で、特に長頸壺という「水壺」的な役割を果たす土器に記されている。これは、記号が盛行する直前の弥生時代中期後半の絵画が短頸壺に描かれた現象と類似している。このことから記号土器も「ハレ」の場に使われたと推定でき、井戸や環濠を中心に完形土器群として出土することから、「水のまつり」の時の供献土器として使われた可能性がある。

後期後半から終末になると、記号も退行現象がみられるようになり、バリエーションが少なくなる。このような衰退傾向の中、龍を表す絵画・記号だけは文様へと別方向に展開する。これは、これまで展開してきた絵画・記号の役割の終焉であり、記号のもつ意味、記号体系も古墳時代へ引き継がれる必要がなくなったことを表しているのであろう。

### 3. 記号土器の概要

記号を描く行為は、土器製作の完成直前（ミガキ調整前）か、直後の焼成前におこなうのが一般的である。このため、絵画土器と異なり記号が消されることはなく、多くの記号は土器の胴部上半に記され、判別できる。ただし、稀に目に触れない頸部内面や底部裏面に刻まれるものもある。これら記号は弥生時代後期のもので、底部裏面の場合、「×」・「+」・「V」字形などの限られた記号が使われている。バリエーションがなく、見えないところに記されていることから、他の記号とは性格が異なるかもしれない。

**（記号体系）** 記号は、大きく直線・曲線・点に分類でき、それらはヘラ描き(H)・櫛描き(K)・赤彩(R)・浮文(F)の手法を用いて記されている。直線の記号には、縦や横の直線を重ねて数の表記のように描いたものが多数あり、本数としては1～4本までが多くみられ、このほか、横線の下方に縦線を数本組合せるものがある。また、縦・横の直線を重ねる以外に「V」字形や三叉形「↓」の記号も多くみられる。特に三叉形の記号は、前期以降、継続的に記されており重要な記号のひとつになっている。

曲線の記号には、「U」字形・「し」字形・「ノ」字形・「○」などの形をした記号がある。これらの中で「U」字形の記号は、「↓」形と同様に前・中期から継続してみられる記号であり、基本的な記号とみなして良いものである。「ノ」字形や「○」の形をした記号は、直線の記号と同様に1つの線や点を重ねる形をとっており、数の表記のように使われている。

直線や曲線の記号以外に、ヘラやハケ原体の先端で刺突することで点として表現するもの(S)や、口縁部に刻目をつけるものがある。これらはランダムに付けるものが多い。また、ジグザグ状・波状に表現するものもあり、これらの記号は直線や曲線の記号に比べ、規則性が明確ではない。

基本的には、直線や曲線の記号が単独で描かれているが、それらの記号が組み合わせられ新たな記号になっているものもある。また、単独の記号が並列的に配置され、複数の記号で構成されるものも後期に出現する。これらは、記号の新たな展開を示しており、記号体系として確立したことを示している。このような複数の記号で展開する構図は、弥生時代中期にみられた並列的構図を有する絵画土器と類似する点がある。

直線	A	A <sub>1</sub>		A <sub>2</sub>		A <sub>3</sub>		A <sub>4</sub>		A <sub>5</sub>		A <sub>N</sub>	
		A' <sub>1</sub>	—	A' <sub>2</sub>	=	A' <sub>3</sub>	≡	A' <sub>4</sub>	≡≡	A' <sub>5</sub>	≡≡≡	A' <sub>N</sub>	≡≡≡≡
		A'' <sub>1</sub>	⊥	A'' <sub>2</sub>	⊥⊥	A'' <sub>3</sub>	⊥⊥⊥	A'' <sub>4</sub>	⊥⊥⊥⊥			A'' <sub>N</sub>	⊥⊥⊥⊥⊥
		A''' <sub>1</sub>	+									A''' <sub>N</sub>	++++
B	B <sub>1</sub>	/	B <sub>2</sub>	//	B <sub>3</sub>	///	B <sub>4</sub>	////					
	B' <sub>1</sub>	X	B' <sub>2</sub>	XX	B' <sub>3</sub>	XXX					B' <sub>N</sub>	XXXX	
	B'' <sub>1</sub>	Λ	B'' <sub>2</sub>	ΛΛ	B'' <sub>3</sub>	ΛΛΛ	B'' <sub>4</sub>	ΛΛΛΛ			B'' <sub>N</sub>	ΛΛΛΛ	
曲線	C	C <sub>1</sub>	∩	C <sub>2</sub>	∩∩	∩∩∩				C <sub>N</sub>	∩∩∩∩	∩∩∩∩∩	
		C' <sub>1</sub>	∪								C' <sub>N</sub>	∪∪∪∪	
	D	D <sub>1</sub>	∪	D <sub>2</sub>	∪∪	D <sub>3</sub>	∪∪∪	D <sub>4</sub>	∪∪∪∪	D <sub>5</sub>	∪∪∪∪∪	D <sub>N</sub>	∪∪∪∪∪∪
		D' <sub>1</sub>	∩										
	E	E <sub>1</sub>	∪	E <sub>2</sub>	∪∪								
		E' <sub>1</sub>	∩										
点	F	F <sub>1</sub>	∩	F <sub>2</sub>	∪∪	F <sub>3</sub>	∪∪∪						
		G <sub>1</sub>	○	G <sub>2</sub>	○○	G <sub>3</sub>	○○○	G <sub>4</sub>	○○○○	G <sub>5</sub>	○○○○○	G <sub>6</sub>	○○○○○○
		G' <sub>1</sub>	○	G' <sub>2</sub>	○	G' <sub>3</sub>	○	G' <sub>4</sub>	○	G' <sub>5</sub>	○	G' <sub>6</sub>	○
		G'' <sub>1</sub>	△			G'' <sub>3</sub>	○	G'' <sub>4</sub>	○	G'' <sub>5</sub>	○	G'' <sub>6</sub>	○
	H	H <sub>1</sub>	∩	H <sub>2</sub>	∩∩						H <sub>N</sub>	∩∩∩∩	
		I <sub>1</sub>											
	点	J <sub>3</sub>	...	J <sub>4</sub>	...	J <sub>5</sub>	...	J <sub>6</sub>	...			J <sub>N</sub>	...

第6図 記号分類一覧

## 第Ⅱ部 出土資料の全容と個別資料の概要

### 4. 土器文様の概要

弥生土器には、時代や器種によってさまざまな文様が施されている。土器焼成以前の柔らかい段階にヘラや櫛状工具で描いたものが主となるが、ヘラ先（三角刺突・円形刺突）や竹管状の工具を押し付けたもの、タタキによる陽出、赤色顔料で描いたもの、粘土紐・粘土粒の貼付（浮文）で表現したもの、それらを組み合わせて施文したものがある。文様は時代を通して土器表面を飾ることを目的としているため、壺や鉢、高坏など貯蔵・供献機能を有するものに施文されている。したがって、一般的にこれら器種に施文されているため、ここでは各時代を代表するような特徴ある文様、特殊文様を優先的に選択し扱う。

**（弥生時代前期の文様）** 前期の器種としては壺・壺蓋・甕・鉢が主要な構成で、いずれの器種においてもヘラ描直線文が主たる文様となっている。直線文以外では、壺あるいは壺蓋に施文される代表的な文様として、木葉文・重弧文と工字文・流水文があるが、大半は断片で全容のわかるものは少ない。木葉文には彩文とヘラ描きがあるが、総数はそれほど多くはなく、確認できているものは数十点であろう。前期前葉を中心に描かれているようで、最も古いものはX字形の無軸木葉文で交点に珠文を押捺するもの（文様007）である。彩文手法は保存状態の影響もあり、文様を判別できるものは少ない。ヘラ描きの工字文や流水文も資料的には少ないが、大和第Ⅰ-2-a様式の鉢（文様016）や大和第Ⅱ-2様式の広口長頸壺（文様017）はほぼ全容のわかるものである。大和第Ⅱ様式にはヘラによる三角刺突文・円形刺突文が散見するようになるが、これらは主要な文様でなく、直線文に付加される文様の1つといえよう。ただし、三角刺突文は大和地域の主要文様ではなく、播磨地域などの影響下の文様であろう。

**（弥生時代中期の文様）** 中期には櫛描きによる文様が主となり、壺や鉢を中心に施文される。文様の大まかな変遷としては、直線文・波状文が主要文様として時代を通してみられ、前半では扇形文、中葉以降では簾状文や斜格文が付加文様として構成されるようになる。このような櫛描文様の構成とは別に流水文は器面全体を飾る文様として中期前葉から中葉にかけて施文される。大きくは横型流水文から縦型流水文へと変遷するが、横型流水文の一部は中葉まで残存する（文様023）。横型流水文は、大和第Ⅱ様式では、直線文間に扇形文を挿入する疑似流水文が多い。大和第Ⅲ様式では細頸壺や水差形土器に縦型流水文を流麗に描くものが多くなる。

中期文様として多くを占める櫛描文様に対し、ヘラ描きの鋸歯文が大和第Ⅳ様式以降に台付鉢（文様027）や高坏（文様028）などの供献形態の器種を中心に増加する。このような非櫛描文傾向はタタキ文様においてもみられ、板目に沿った平行タタキとは異なり、双頭渦文・渦文などをタタキ板に刻み短頸壺に陽出させるもの（文様030）がみられるようになる。この鋸歯文や双頭渦文・渦文は、絵画土器の意匠と対に表現されることもあり、絵画と連動する特殊な文様といえよう。

**（弥生時代後期の文様）** 後期になると、多くは文様による装飾をしなくなる。その反対に文様をもつ土器は特殊な傾向が見いだせる。後期初頭である大和第Ⅴ様式は、大和第Ⅳ様式からの影響下であり、絵画土器同様に特殊タタキ文様（文様034）が残存する。また、異形高坏（文様040）など特殊土器には精緻な櫛描きの簾状文・山形文などが施文され、特化された櫛描文様として成立する

4. 土器文様の概要

ことになるが、後期前半以降は消失する。これらに代わるように弧帯文様（文様043）が成立し、後期後半以降は壺を中心に散見するようになる。

名称	工具・手法	模式図	名称	工具・手法	模式図
直線文	ヘラ 貝 赤彩		(無軸・有軸) 木葉文	彩文 ヘラ	
波状文	ヘラ 櫛		(無軸・有軸) 半裁木葉文	ヘラ	
簾状文	櫛		重弧文	ヘラ	
(削出・貼付・指つくね貼付) 凸帯文 指つくね貼付凸帯	粘土紐帯 指頭		双頭文	ヘラ 浮文	
凹線文	指頭 ヘラ		渦文	ヘラ タタキ	
疑凹線文	ヘラ		双頭渦文	ヘラ タタキ	
(木目) 列点文	ヘラ ハケ		四頭渦文	ヘラ 浮文	
刻目	ヘラ ハケ		連続渦文	ヘラ 竹管	
綾杉文 (矢羽状)	ヘラ タタキ		鉤状文		
羽状文	ヘラ 貝		円形刺突文 円形文・竹管文 (同心円文)	ヘラ 竹管	
有軸横線文	彩文 ヘラ タタキ		半円文 (半裁竹管文)	ヘラ 竹管	
三角刺突文	ヘラ		爪形文	爪	
鋸歯文 複合鋸歯文	ヘラ		コ字状文	ヘラ	
山形文	ヘラ		横型流水文	ヘラ 櫛	
方画文	彩文 ヘラ		縦型流水文	ヘラ 櫛	
雷文	彩文		工字文	ヘラ	
斜格文	ヘラ 櫛		ヒレ形文	ヘラ	
格子文	ヘラ		弧帯文	ヘラ	
菱形文	ヘラ タタキ		直弧文	ヘラ	
扇形文	櫛		区画文 (縦線)	ヘラ 浮文	
放射状文	ヘラ		尖形・刺突文	ヘラ	

第7図 文様分類一覧



## 第Ⅲ部 考古資料目録

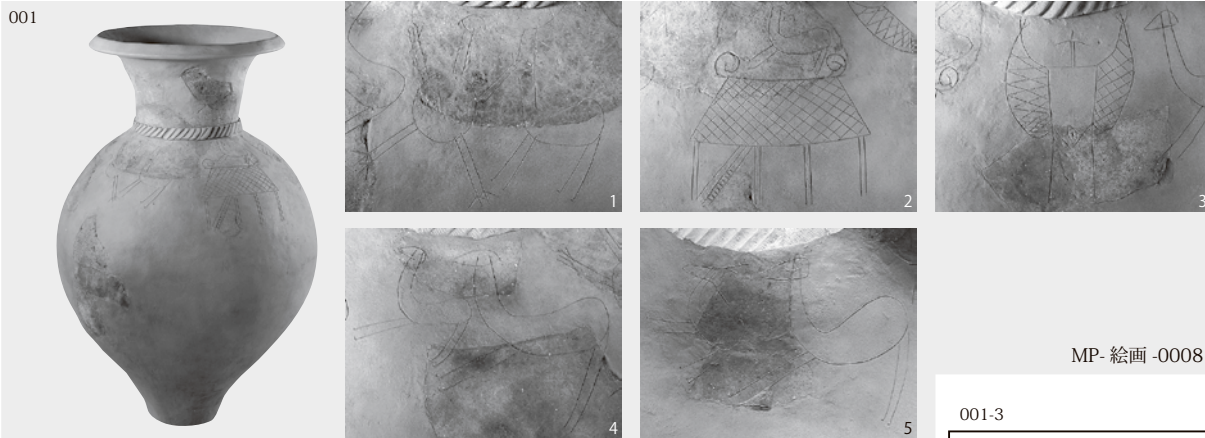
### 凡例

1. 遺物は、絵画土器、記号土器、土器文様の順に掲載した。また、遺物の所属時期は大和土器編年に従い、「大和第○-□様式」と記載した。詳細な時期を判別できない遺物は「弥生時代○期」と記載した。
2. 遺物の掲載に際し、「MP」から始まる管理番号を付記した。遺物が複数の破片等にわたるものは、それぞれの写真に管理番号の枝番を付した。
3. 遺物の大きさの単位はcmとし、小数点第2位以下を四捨五入し、第1位までを記載した。
4. 掲載した写真・図面の縮尺は任意である。
5. 記号・文様の種別については、それぞれP.15第6図・P.17第7図の分類に従う。
6. 絵画・記号・文様の各土器の未接合破片は、巻末に附. 遺物図版として掲載した。
7. 第Ⅲ部に掲載した土器において、複数の出土状況がある場合、代表する破片の情報を第Ⅲ部に掲載し、その他の残片を含む土器の出土情報等は、巻末の附. 遺物一覧表に掲載した。

### 附 凡例

1. 写真中の数字は、遺物管理番号（Mコード）の枝番で、出土情報が異なるものに付した。
2. 枝番を付していない残片は、主体遺物の未接合破片（細片等）である。
3. 枝番は同じ出土情報のものであるが、法量等を記載するため枝番の次にアルファベットを付し、aの情報を代表させた。

001 絵画土器 (建物・人物・鹿)



MP- 絵画 -0008

本絵画土器は、大形の広口壺の胴部上半に描かれたもので、胴部から頸部にかけて残存していた。これら破片は西地区中央部の第8・22・38次調査の中世大溝や包含層から出土したもので原位置は特定できないが、そのうちの1片が第22次調査の大和第IV-1様式の井戸(SK-101)から出土しており、本来はこの遺構周辺に存在したものであろう。

絵画は複数から成り、手摺りのある梯子が架けられた渦巻飾りの寄棟建物とその上に牝鹿、その右に手を挙げる女性シャーマン、左側に牡鹿の首を掴む人物、残りの空間に左向き牡鹿と牝鹿5頭を並列的に描いている。



上面から見た絵画配置図

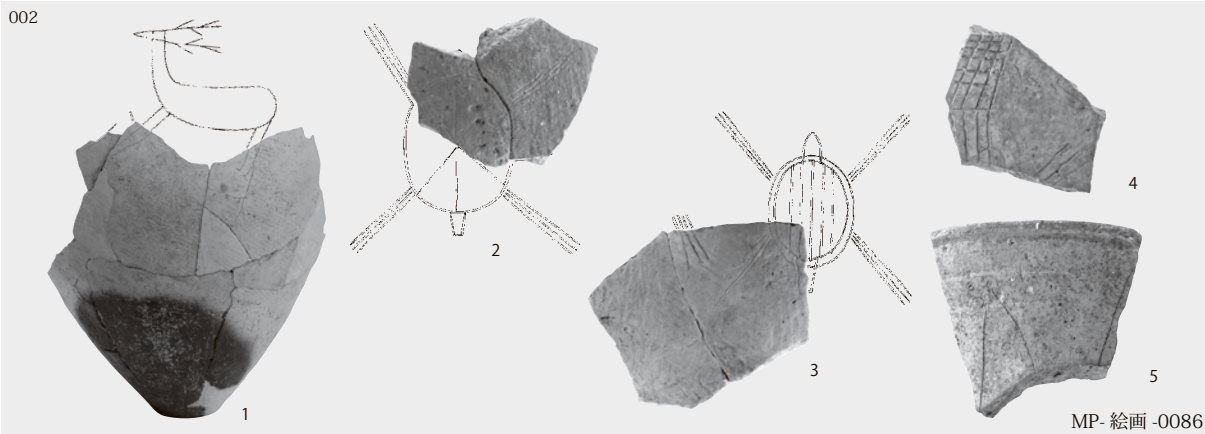
001-3

第22次調査
遺構：SK-101
層位：第1(下)層
土色：黒色粘質土
取上：土-124
No.：180
様式：大和第IV-1様式

復元品全体

復元高：80.6
復元胴径：54.0

002 絵画土器 (建物?・鹿・スッポン・不明・山形文)



MP- 絵画 -0086

本絵画土器は、大和第IV-1様式の短頸壺に描かれたものである。西地区北部の第80次調査の区画溝から出土した。頸部に山形文、胴部上半に左向きの鹿、上向きのスッポン2匹とスッポンの足らしき線刻、建物?と不明意匠が描かれている。スッポンの胴部は2重囲み線内を縦線で充填する表現と1重囲み線内を6分割する表現方法がとられている。

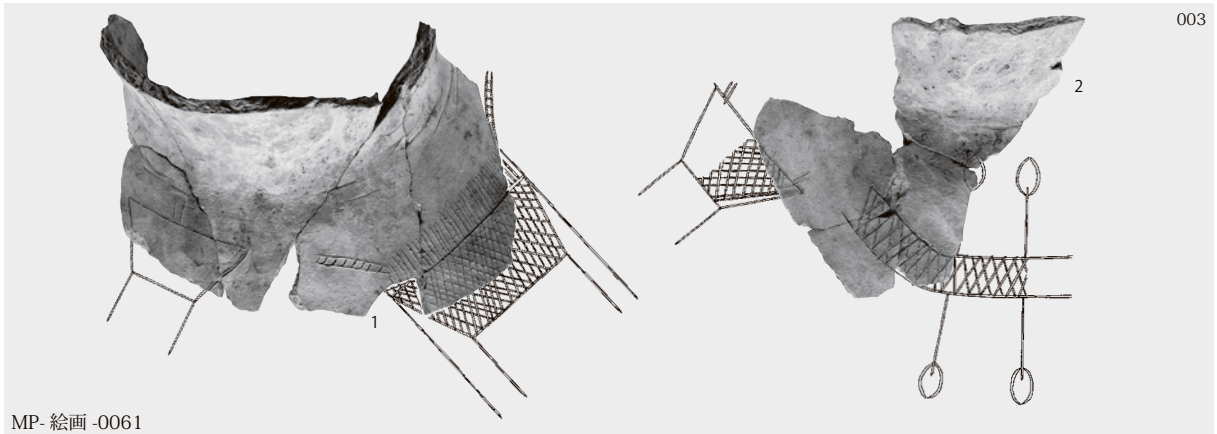


実測図面

002-1

第80次調査
遺構：SD-101
層位：第6層
土色：黒灰色粘砂
取上：—
No.：185
様式：大和第IV-1様式
残存長：29.5
残存幅：27.0

## 003 絵画土器 (建物・船)



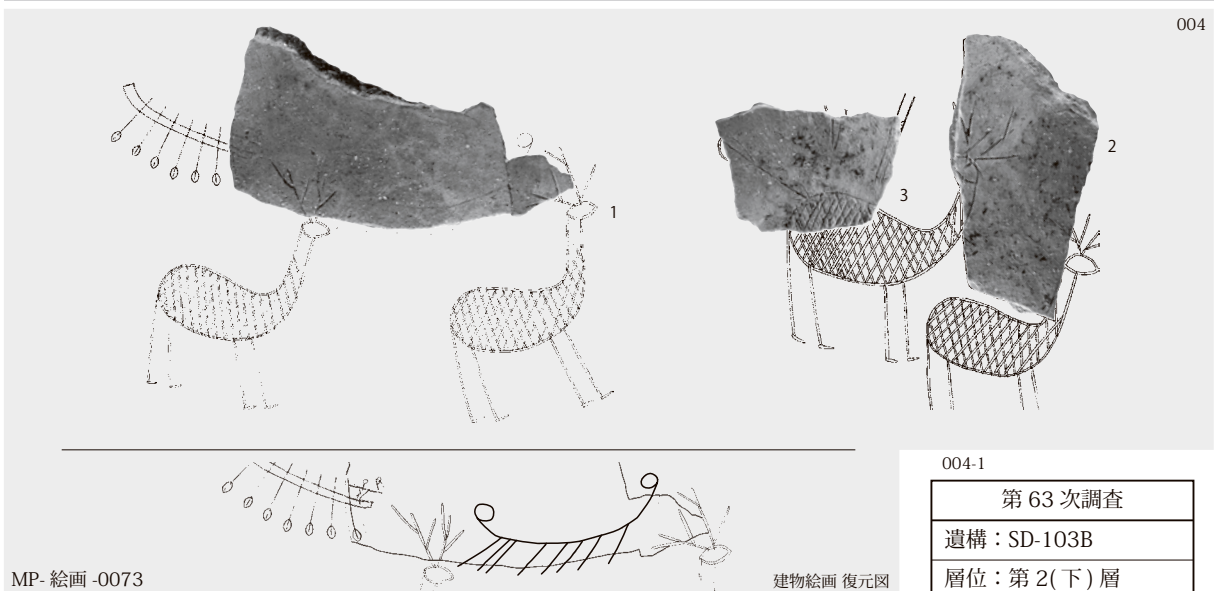
MP- 絵画 -0061

003-1

本絵画土器は、大和第三-4様式の有段口縁壺胴部上半に描かれたものである。北地区の第59次調査の区画溝から出土した。大きく2つの部分から成り、1つは2棟の建物、他方には建物と船が描かれている。前者の右側の建物は切妻建物と推測されるもので、棟上はやや長めの縦線、棟端には斜め上方へ長く伸びる2本線(内部を横線で充填)で屋根が飾られている。

第59次調査
遺構：SD-1102
層位：第2層
土色：—
取上：土-2298
No.：391
様式：大和第三-4様式
残存高：11.5
残存幅：17.9

## 004 絵画土器 (建物・船・人物・鹿)



MP- 絵画 -0073

建物絵画 復元図

004-1

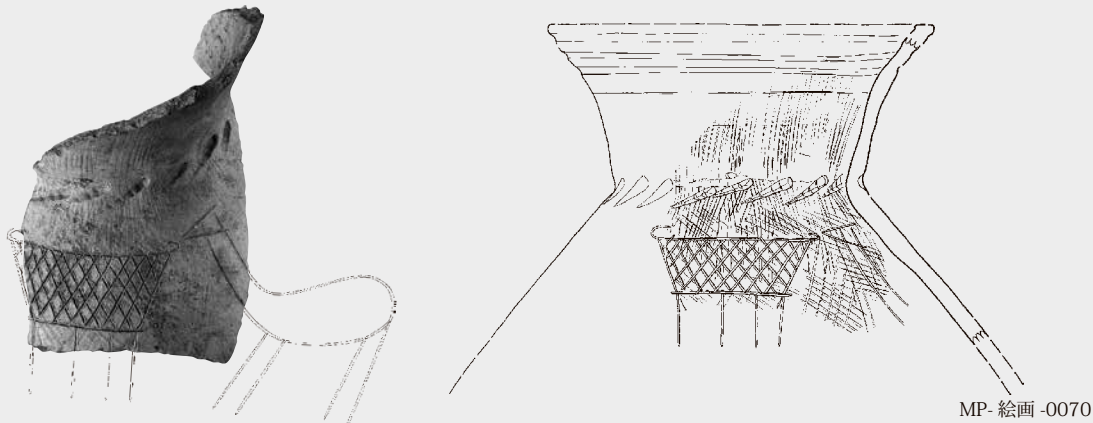
本絵画土器は、大和第五-1様式の広口壺胴部上半に描かれたものである。南地区の第63次調査の区画溝から出土した。絵画は当初の絵画と描き直しの絵画がある。当初の絵画は、左側に船と船首で両手を広げて櫂を持つ人物、右側に建物の屋根部分が残るものであるが、ナデで消されている。消された後、右向きの鹿が描かれているが、角のみ残存する。残り2片にも鹿が描かれているが、左側の鹿の臀部には矢が刺さっている。また、鹿の上部にも不明意匠がある。

第63次調査
遺構：SD-103B
層位：第2(下)層
土色：灰黒粘
取上：—
No.：249
様式：大和第五-1様式
残存長：7.5
残存幅：12.9



005 絵画土器 (建物・鹿)

005

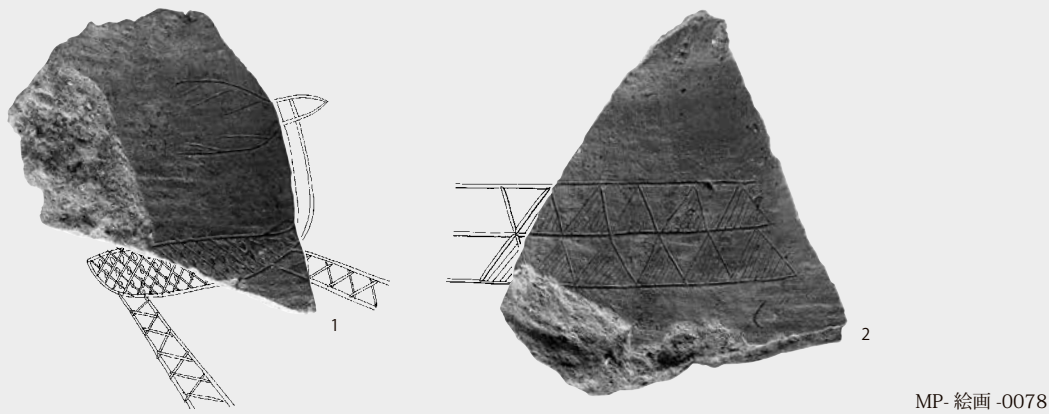


本絵画土器は、大和第Ⅳ-1 様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。西地区中央部の第73次調査の区画溝から出土した。左側に柱間3間の切妻建物、右側に左向きの牝鹿を明瞭な線刻で描く。建物の屋根は斜格文を充填し、棟先には半円弧の飾りを描く。梯子の表現はない。鹿は建物より大きく描く。頭部は横方向の「V」字形で表現する。

第73次調査
遺構：SD-103
層位：第3層
土色：黒灰粘
取上：—
No.：135
様式：大和第Ⅳ-1 様式
残存高：13.8
残存幅：11.0

006 絵画土器 (鹿・鋸齒文)

006



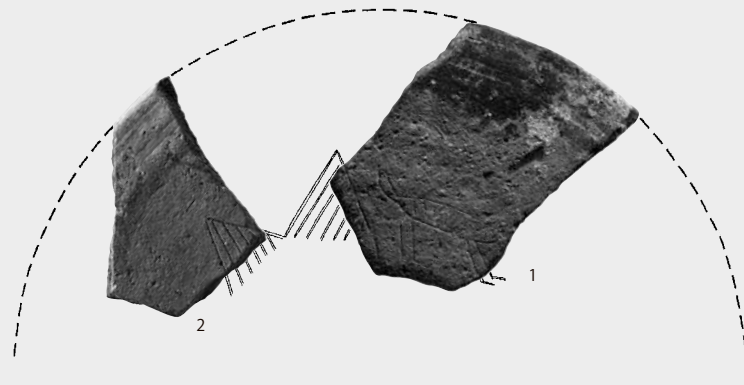
本絵画土器は、大和第Ⅳ-1 様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。西端の第62次調査の環濠から出土した。2片があり、第1の破片には右向きの牡鹿を描く。胴部に斜格文と刺突文を充填する。脚部は2本線で表現し、内部を斜格文で充填する。第2の破片は、上下2段に上向きの鋸齒文を部分的に描く。鹿と鋸齒文は対になる可能性があり、鋸齒文は建物を置換したものと考えられる。

006-1

第62次調査
遺構：SD-101
層位：第4-b層
土色：暗黄灰色土
取上：—
No.：128
様式：大和第Ⅳ-1 様式
残存長：9.2
残存幅：8.2

## 007 絵画土器（鹿・鋸歯文）

007



MP- 絵画 -0079

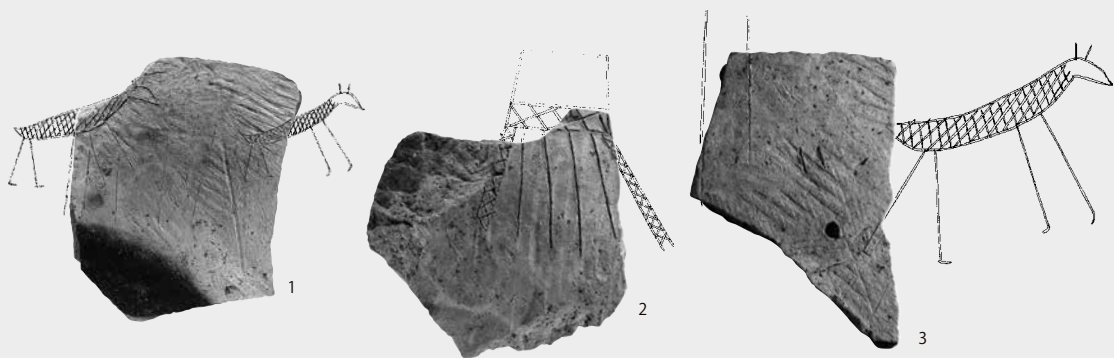
007-1

本絵画土器は、大和第IVあるいはV様式頃と推定される壺蓋の内面に描かれたものである。南地区の第63次調査の区画溝から出土した。2片があり、第1の破片には鋸歯文と左向きの鹿と思われる動物を描く。頭部は摩滅のため不明である。脚部の足先は後方に折れる。第2の破片には内部を右上がりの斜線で表現した鋸歯文を描く。胴部は斜線を充填する。本絵画土器も006と同じく、鹿と鋸歯文が対になる可能性があり、鋸歯文は建物を置換したものと考えられる。

第63次調査
遺構：SD-103B
層位：第1(下)層
土色：黒褐色粘質土
取上：—
No.：136
様式：大和第IV・V様式
残存長：5.7
残存幅：5.3

## 008 絵画土器（建物・鹿）

008



MP- 絵画 -0069

008-1

本絵画土器は、大和第V-1様式のタタキを施した壺に描かれたものである。南東端の第72次調査および東隣接地の第76次調査の環濠から出土した。11片のうち、胴部上半の3片に稚拙な表現の絵画が残る。第1の破片には右向きの鹿2頭を描く。左側の鹿には角が描かれ、胴部は斜格文を充填する。第2の破片は建物絵画とすると4本の柱、両妻側に斜格文を充填した梯子、屋根にも斜格文を充填する。第3の破片は、鹿の後脚と臀部、意匠不明の線刻(直線)があるが、ミガキ調整によって消されるものと調整後に線刻されたものがある。また、第1・2破片にも絵画の下に不明線刻が描かれているが、ナデによって消されている。

第72次調査
遺構：SD-107
層位：第3層
土色：灰黒粘
取上：—
No.：241
様式：大和第V-1様式
残存長：10.8
残存幅：9.3

009 絵画土器 (建物・鳥・不明)

009



MP- 絵画 -0076

009-1 絵画部

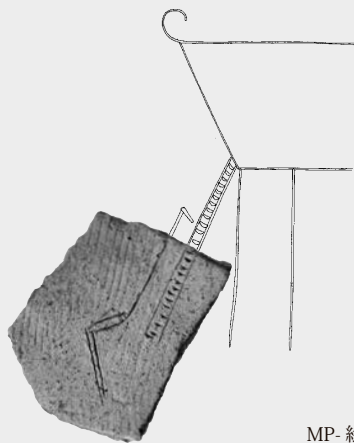
第 72 次調査
遺構：SD-107
層位：第 3 層
土色：灰黒粘
取上：—
No. : 225
様式：大和第 V-1 様式

009-1 全体

残存長：15.2
残存幅：11.0

本絵画土器は、大和第 V-1 様式の壺胴部上半に細描きで描かれたものである。南東端の第 72 次調査の環濠から出土した。6 片のうち、3 片と 2 片が接合した。第 1 の破片には柱間 3 間の寄棟建物を描く。両妻側の柱は屋根の側辺から一体的に描く。床下に梯子を架ける。屋根部分は斜格文を充填するが、右端の線刻は一部ナデで消されている。第 2 の破片では、意匠不明の線刻(縦線・刺突文を充填した台形?)とその右に稚拙な鳥 2 羽を描く。鳥の胴部は刺突文を充填する。この絵画の下にもナデ調整で消された線刻がわずかに残る。

010



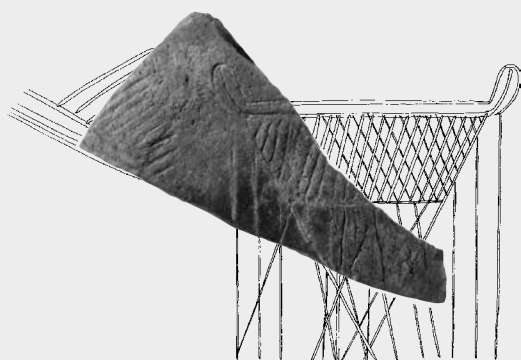
MP- 絵画 -0074

010 絵画土器 (建物・鳥)

本絵画土器は、大和第 IV 様式の壺胴部に描かれたものである。南地区の第 69 次調査の区画溝から出土した。色調は灰白色を呈す。右向きの鳥で、長い頸部から一体的に胴部を描き、尾部から 2 本線で脚部を表現する。頭部を欠くが、頸と脚が長いことから水鳥であろう。鳥の右には 2 本線の内部を刺突で充填した刻み梯子が描かれる。

第 69 次調査
遺構：SD-1104
層位：第 3 層
土色：暗灰粘
取上：—
No. : 1727
様式：大和第 IV 様式
残存長：6.8
残存幅：5.3

011



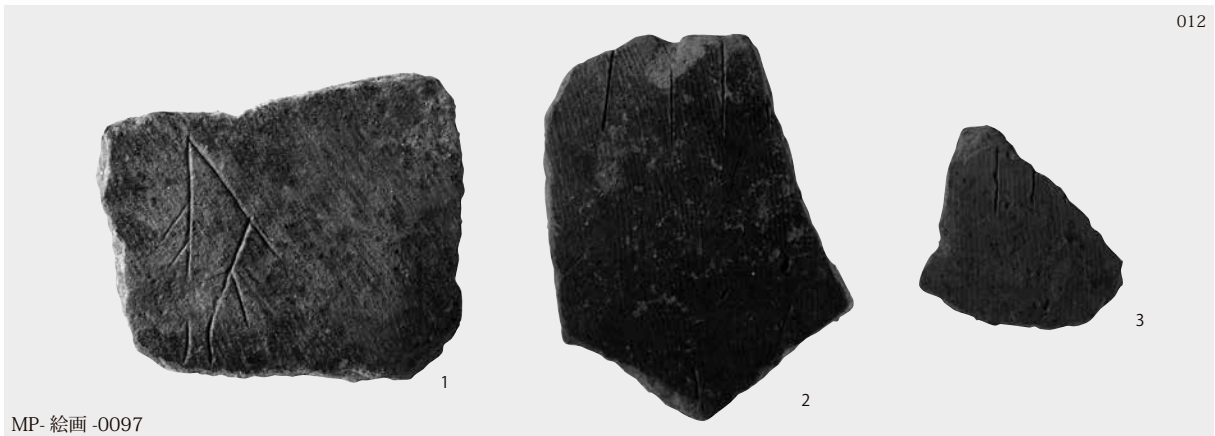
MP- 絵画 -0098

011 絵画土器 (建物・不明)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。南東端の第 3 次調査の環濠から出土した。切妻の高床建物である。屋根は斜格文を充填、棟端には斜め上方に丸く突き出た飾りを描いている。縦線で棟持柱や柱も描いているが、斜線もみられ描き直し線を消していない可能性がある。建物の左側には斜線を重ねた不明意匠がある。

第 3 次調査
遺構：SD-02
層位：—
土色：—
取上：—
No. : —
時代：弥生時代中期
残存長：7.4
残存幅：8.8

## 012 絵画土器 (建物・魚)



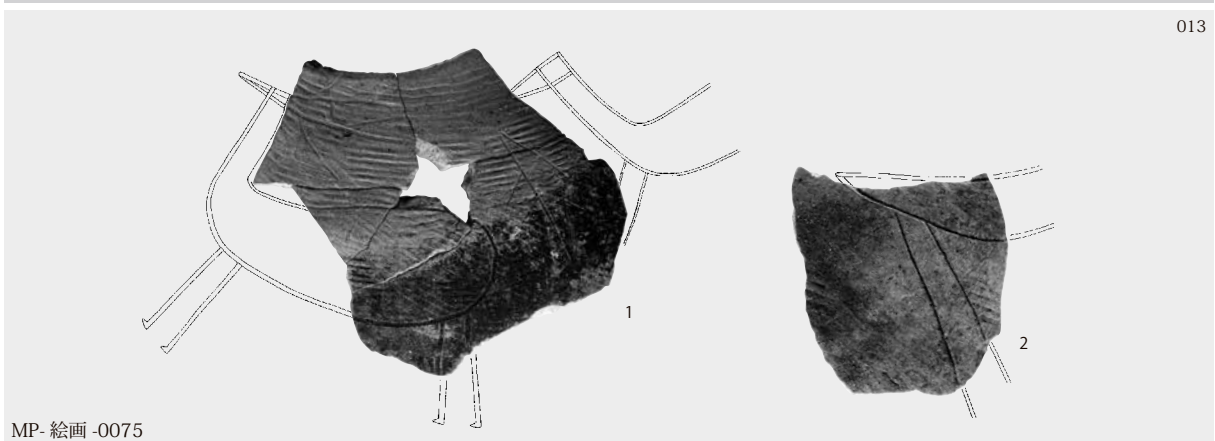
MP- 絵画 -0097

本絵画土器は、大和第IV様式の壺胴部上半に描かれたものである。南地区の第3次調査および西側隣接地第61次調査の土坑などから出土した。3片があり、第1の破片には上向きの魚が描かれている。背鰭・胸鰭・尾鰭の表現がみられる。第2・3の破片には、建物の柱と思われる縦線5本と4本が描かれているが、全体は不明である。

012-3

第3次調査	
遺構：	—
層位：	砂層（灰褐色）
土色：	—
取上：	—
No.：	—
様式：	大和第IV様式
残存長：	5.5
残存幅：	6.4

## 013 絵画土器 (鹿・魚)



MP- 絵画 -0075

本絵画土器は、大和第IV-2様式と思われる短頸壺胴部上半に描かれたものである。胴部中央には煤が付着する。南地区の第69次調査の区画溝や包含層から出土した。絵画はタタキ成形後に太描きのへらで大きく描かれており、大きく2つの破片が残る。第1の破片には左向きの鹿2頭とその間に上向きの魚が、第2の破片には右向きの鹿の後脚と思われるものが描かれている。鹿・魚ともに本遺跡の絵画パターンである。

013-1

第69次調査	
遺構：	SD-1125
層位：	第3(下)層
土色：	暗灰粘
取上：	—
No.：	1805
様式：	大和第IV-2様式
残存長：	17.1
残存幅：	12.0

014 絵画土器 (人物・不明／鹿・鳥)

014



MP- 絵画 -0087

014-1の1片

第 93 次調査
遺構：SD-1114
層位：第 1 層
土色：暗褐色粘質土
取上：－
No.：318
様式：大和第Ⅳ-2 様式？

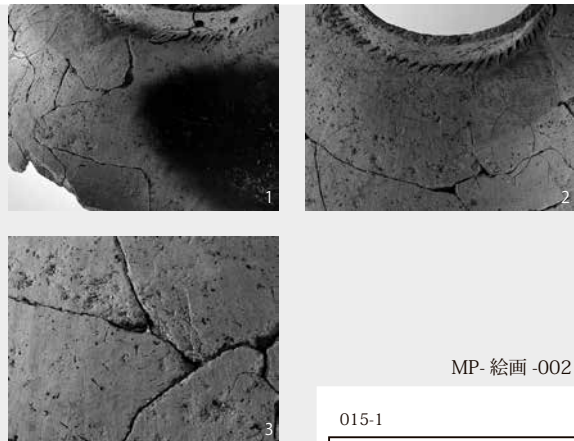
本絵画土器は、大和第Ⅳ-2様式と思われる壺胴部上半に描かれたものである。西地区北部の第84・89・93次調査の区画溝や包含層などから出土した。絵画が残存する8片のうち7片は接合し、大きく2つの破片になる。第1の破片には左向きの牡鹿、その背中から臀部に重なるように左向きの鳥を大きく、さらにその右側に小さめの鳥を描く(③)。この鹿絵画の頭部から左側には左手に盾と右手に戈を持つ人物が描かれているが、ミガキによって消されている(②)。ただし、この人物画が細描きであるのに対して、太描きの浅い線刻も見られ、人物画以前の絵画が存在したようである(①)。第2の破片には斜線が残るが、この線刻は③の絵画と一連のものと考えられる。

014-1

残存長：18.9
残存幅：20.1

015 絵画土器 (鳥・スッポン・渦巻き)

015



MP- 絵画 -0021

015-1

第 49 次調査
遺構：SD-103
層位：第 2 層
土色：－
取上：土-236
No.：162
様式：大和第Ⅴ-1 様式

本絵画土器は、大和第Ⅴ-1様式の無頸壺胴部上半に描かれたものである。南地区の第49次調査の区画溝から出土した。胴部上半はほぼ残存する。絵画は鳥・スッポンなどが並列的に描かれている。鳥は長い嘴と跳ね上がった尾が描かれている。逆さに描かれていることから、口縁部側から描かれたものであろう。スッポンは上向きに2匹描かれ、前足・後足とも大きく広げている。また、尻尾は小さく突出させている。これら鳥・スッポン以外はミガキ調整が丁寧で絵画はほとんど消されている。スッポンの左にわずかに線刻、また、スッポンの対置にあたる部分に渦巻き表現が残存している。



上面から見た絵画配置図

全体

残存高：14.1
胴 径：30.1

## 016 絵画土器（鳥・不明・渦巻き）



MP- 絵画 -0088

016-1

本絵画土器は、大和第Ⅴ様式の器台の胴部から裾部に描かれたものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。器台の胴部下半にはヘラ描きによる直線文を7条巡らせており、その直線文上に左向きの鳥を描く。鳥は嘴・目・羽毛を写實的に表現したものでおそらく水鳥を描いたものであろう。鳥のすぐ右側には、消された渦巻きが微かに残っている。このほか、直線文の下側には同様に消された線刻が並列的に残存している。その中で判読できるものとして渦巻きが2つ連続して描かれている。鳥と渦巻きは015の絵画土器同様に組み合う構図の1つと推定される。

第91次調査

遺構：SD-101B

層位：第6(下)層

土色：黒灰色粘砂

取上：その1

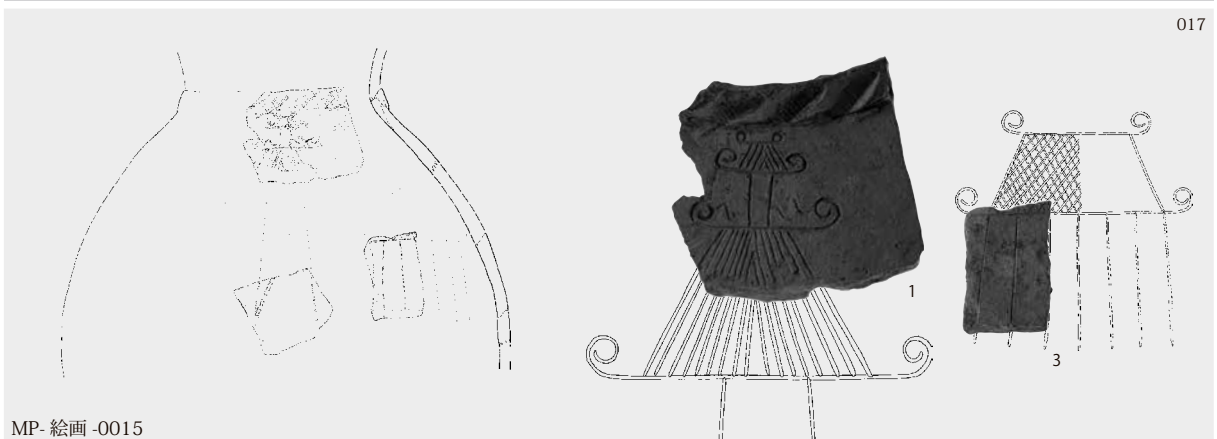
No. : 327

様式：大和第Ⅴ様式

残存高：19.8

残存幅：14.9

## 017 絵画土器（建物）



MP- 絵画 -0015

017-1

本絵画土器は、大和第Ⅳ-1様式の有段口縁壺胴部上半に描かれたもので3片がある。第1・2破片は南東端の第47次調査の環濠最上層とその環濠の埋没直後の小溝、第3破片は第77次調査の溝から出土した。第1・2破片が上下関係にあると推定し柱間1間の2層建ての楼閣状建物と推定するものである。第3破片は、寄棟の大型建物で柱3本と斜格文を充填した屋根、軒先飾りが描かれている。

第47次調査

遺構：SD-2105

層位：第0層

土色：暗灰褐色砂質土

取上：その1

No. : 273

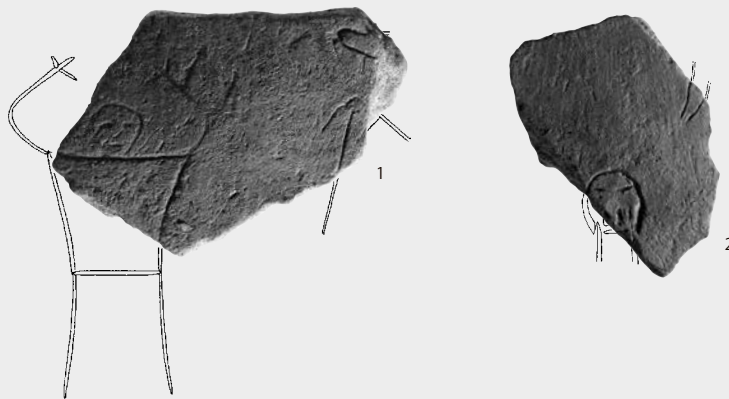
様式：大和第Ⅳ-1様式

残存長：8.0

残存幅：10.1

018 絵画土器 (人物・不明)

018



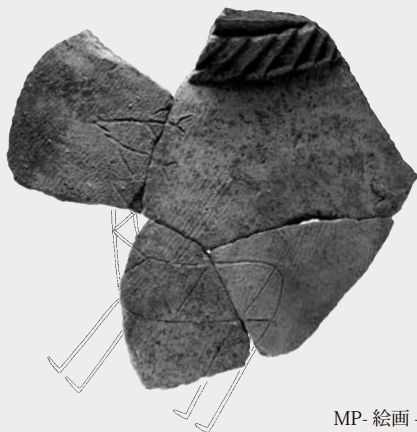
MP- 絵画 -0077

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の壺胴部上半に描かれたものである。南東端の第83・91次調査の環濠から出土。2片があり、第1・2破片とも人物と不明意匠が描かれている。第1破片は台形の胴部に目・口を刺突表現した丸い頭部がつく。手は三叉状で両手を挙げている姿態である。第2破片はやや縦長頭部のみが残存するもので、目と鼻、口を刺突で表現する。右上にも斜線が残存する。

018-1

第91次調査
遺構：SD-101B
層位：第5層
土色：明褐色砂質土
取上：—
No.：213
時代：大和第Ⅳ様式
残存長：5.2
残存幅：7.7

019



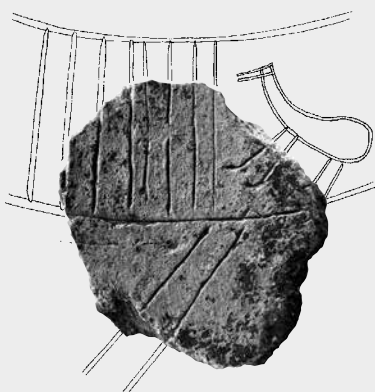
MP- 絵画 -0065

019 絵画土器 (鹿・不明)

本絵画土器は、大和第Ⅳ-1様式と思われる短頸壺あるいは有段口縁壺の胴部上半に描かれたものである。南地区の第61次調査の区画溝などから出土した。絵画は左向きの牡鹿が描かれ、頸部から胴部は斜線を鋸歯状に充填している。鹿の右側には粘土紐の貼付による絵画が存在するが、欠損のためわからない。

第61次調査
遺構：—
層位：—
土色：灰黄色粗砂
取上：—
No.：104
様式：大和第Ⅳ-1様式
残存長：15.7
残存幅：18.6

020



MP- 絵画 -0091

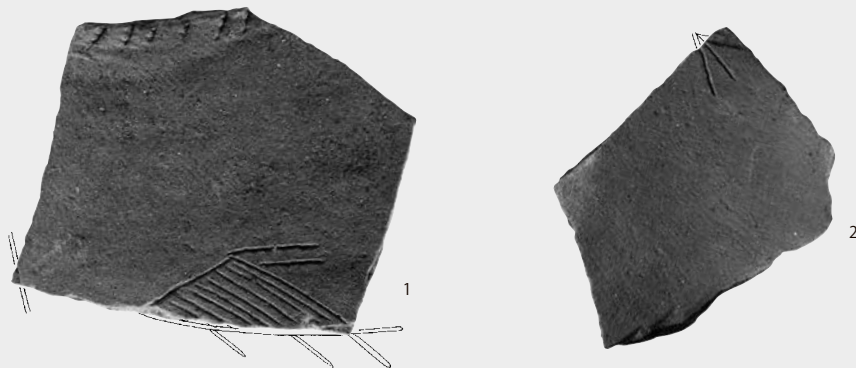
020 絵画土器 (鹿・不明)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。北地区の第59次調査の柱穴から出土した。小片のため、全体像は不明であるが、右端には鹿と思われる脚部が残り、その左側には縦線を重ねる。この縦線の下側は横線で囲んでおり、その下に2本の斜線が描かれ、大きく描いた鹿の胴部に小さな鹿を描いているようにも見える。

第59次調査
遺構：Pit-1109
層位：—
土色：—
取上：—
No.：1211
時代：弥生時代中期
残存長：5.6
残存幅：5.2

## 021 絵画土器（魚・不明）

021



MP-絵画-0032

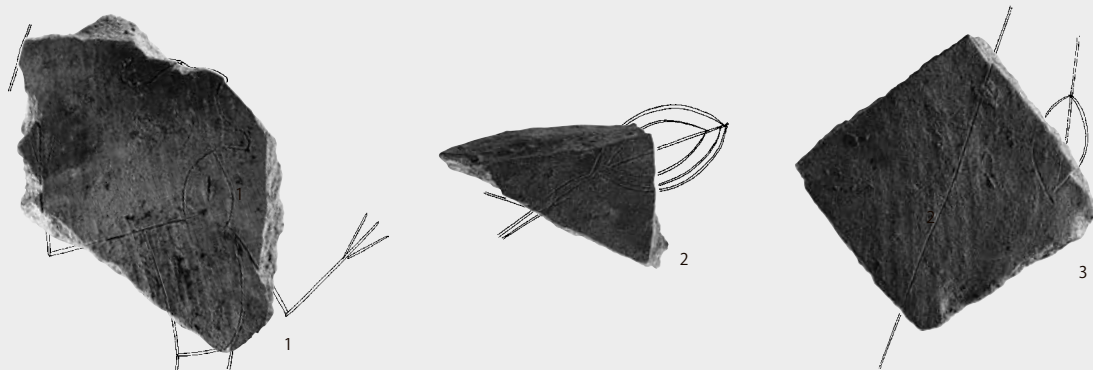
本絵画土器は、大和第IV様式の短頸壺と思われる胴部に描かれたものである。西地区南部の第58次調査の中世溝から出土したもので、原位置は不明である。2片があり、第1の破片には左端に不明絵画、その右に左向きの魚が描かれている。魚の胴部は斜線を充填、背鱗は2本線で表現する。魚の線刻全体部分のハケ調整はナデ消しされる。第2の破片は壺胴部中央付近の破片で、左斜め上方向を示す三叉形が絵画の一部として残っている。

021-1

第58次調査
遺構：SD-51
層位：第3(下)層
土色：暗灰色粗砂
取上：—
No.：74
様式：大和第IV様式
残存長：9.0
残存幅：11.3

## 022 絵画土器（スッポン・不明）

022



MP-絵画-0026

本絵画土器は、大和第V-1様式の大形壺の胴部に描かれたものである。北地区の第51・53次調査の井戸などから出土した。また、京都大学所蔵資料<sup>(1)</sup>にも同一個体の可能性のある絵画がある。絵画が残っている破片は3片で、第1は頭部の表現からスッポンと思われるものであるが、胴部は台形を呈している。前脚は「く」字状を呈し、足先は三叉状に描いている。また、口先からは波線が描かれており、獲物を捕らえているようにも見える。第2・3の破片には、木の葉状のような表現があるがスッポンの頭部かも知れない。第3の破片の木の葉状表現の線刻は浅い。この他の破片には、櫛描山形文が描かれている。

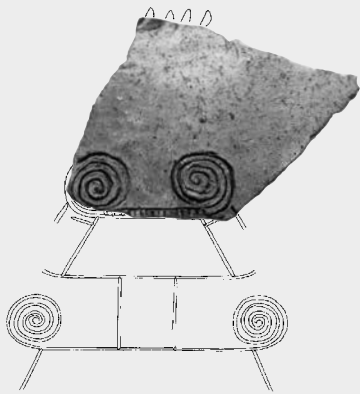
022-1

第51次調査
遺構：SK-104
層位：第1層
土色：黒褐色土
取上：—
No.：22
様式：大和第V-1様式
残存長：9.3
残存幅：6.6

(1) 飯田恒男 1929「第16図-7」『大和唐古石器時代遺物図集』



023



MP- 絵画 -0033

### 023 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第V-1様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。南地区の第61次調査の区画溝から出土した。建物の棟飾り部分で、棟は2重の横線の間を短線で充填し、棟両端に渦巻文を描く。右側の渦巻文の下方には斜線が残り、寄棟と考えられ渦巻き飾りの大きさから、楼閣状建物であろうか。

第61次調査
遺構：SD-102B
層位：第5(下)層
土色：灰黒粘
取上：－
No.：678
様式：大和第V-1様式
残存長：7.0
残存幅：11.0

024



MP- 絵画 -0012

### 024 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第IV-1様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。南地区の第33次調査の井戸などから出土した。ほぼ完形であるが、埋没環境が悪く器面は鉄分が付着している。建物絵画は柱間3間の寄棟建物で、床下に右上がり2本線で表現した梯子が取り付く。屋根は斜格文を充填し、棟端には半円弧の飾り表現がみられる。

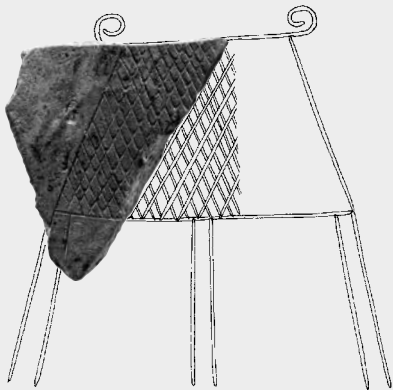
024-1の絵画部片

第33次調査
遺構：SK-120・SD-115
層位：第0(上)層
土色：黒褐色粘質土
取上：－
No.：400
様式：大和第IV-1様式

全体

高さ：41.0
幅：26.6

025



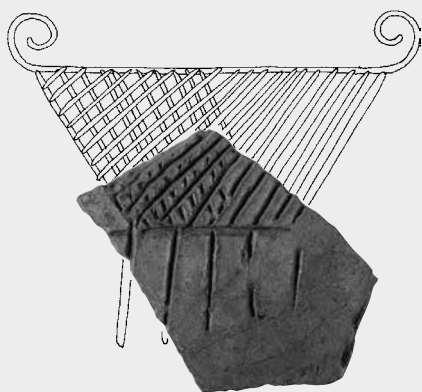
MP- 絵画 -0043

### 025 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、弥生時代中期と思われる壺胴部の上半に描かれたものである。南地区の第69次調査の黒色粘質土層から出土した。棟飾りを有する寄棟の高床建物である。斜格文を充填した屋根と「転び」のある柱の一部を残す。屋根左辺の外側にも線刻が残ることから一回り小さく描き直したものと考えられる。

第69次調査
遺構：－
層位：－
土色：黒色粘質土
取上：－
No.：181
時代：弥生時代中期？
残存長：4.7
残存幅：4.3

026



MP- 絵画 -0099

### 026 絵画土器 (建物)

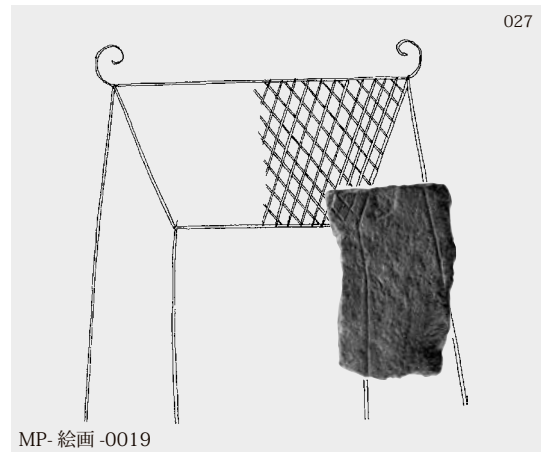
本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。南東端の第3次調査の環濠から出土した。切妻の高床建物の下半分である。屋根を充填する斜格文は左半分である。柱は1本線で表現し5本である。柱はケズリによってその一部が消されている。梯子の表現はない。

第3次調査
遺構：SD-02
層位：－
土色：黒粘I
取上：－
No.：－
時代：弥生時代中期
残存長：5.1
残存幅：5.7

## 027 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。北地区の第48次調査の黒色粘質土層から出土した。絵画は小片のため、全体は不明であるが、切妻の高床建物の右半分が残存している。棟持柱と右端の柱を1本線で表現、屋根部分は斜格文を充填している。

第48次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒色粘質土
取上：—
No. : 135
時代：弥生時代中期
残存長：3.9
残存幅：2.5

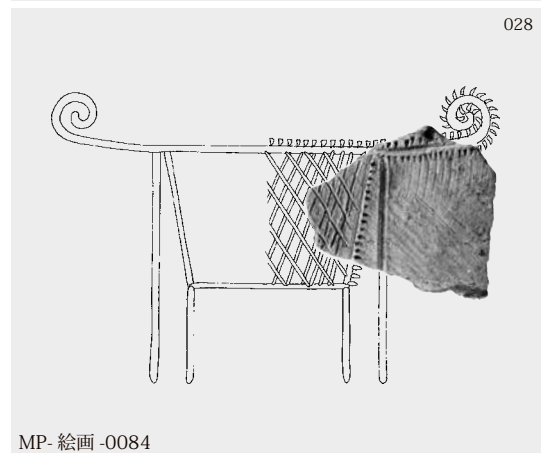


MP- 絵画-0019

## 028 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第IV様式の壺に描かれたものである。西端の第62次調査の環濠から出土した。切妻の高床建物の右上半分である。屋根部分は斜格文を充填、棟持柱は縦1本線で描いている。また、棟端の飾りは横方向に長く伸びており、ヘラの刺突による装飾表現が付加され、その一連で妻部も同様な表現で飾られている。

第62次調査
遺構：SD-101
層位：第5(下)層
土色：黒灰色(植物)
取上：—
No. : 166
様式：大和第IV様式
残存長：4.3
残存幅：5.3

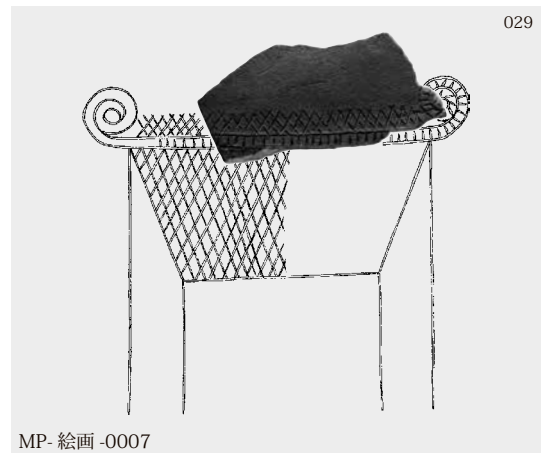


MP- 絵画-0084

## 029 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部上半に描かれたものである。西地区中央部の第22次調査の中世土坑から出土したもので、原位置は不明である。絵画は小片のため、全体は不明であるが、建物の棟部分が精緻に描かれている。棟は2本の横線の内部に刺突文を充填し、棟上を斜格文で飾る。また、棟端は渦巻き状の表現をとる。

第22次調査
遺構：SK-52
層位：第3層
土色：灰色粗砂
取上：—
No. : 88
時代：弥生時代中期
残存長：3.0
残存幅：5.8



MP- 絵画-0007

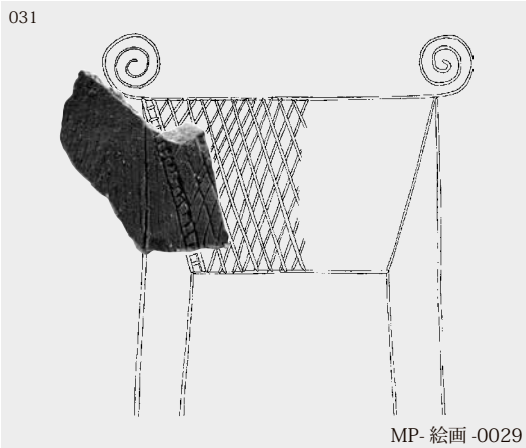
## 030 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第IV様式と思われる壺に描かれたものである。中央区の第98次調査の溝から出土した。建物は斜格文を充填した切妻式で、床から右側に長く突き出て「縁」あるいは「露台」風のものを表現し、その先端上には上向きの綾杉状の「飾りもの」がつく。また、床との接点には梯子が架けられている。

第98次調査
遺構：SD-101
層位：第1(下)層
土色：黒褐色粘質土
取上：—
No. : 185
様式：大和第IV様式?
残存長：5.3
残存幅：5.0



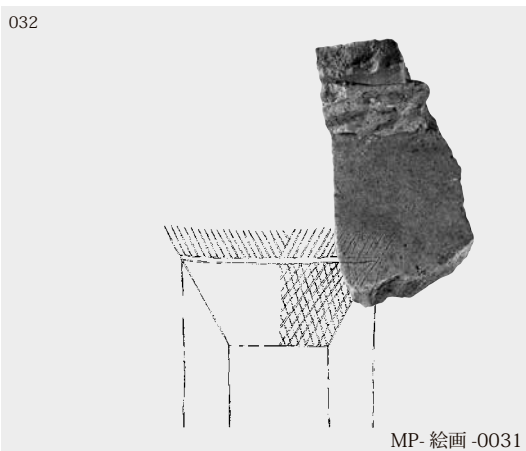
MP- 絵画-0103



### 031 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。中央区の第53次調査の落ち込み状遺構から出土した。絵画は小片のため、全体は不明であるが、切妻の高床建物の左半分が残存している。棟持柱は1本線、妻部分は2重線に短線を充填した描き方で、屋根内部は斜格文を充填している。

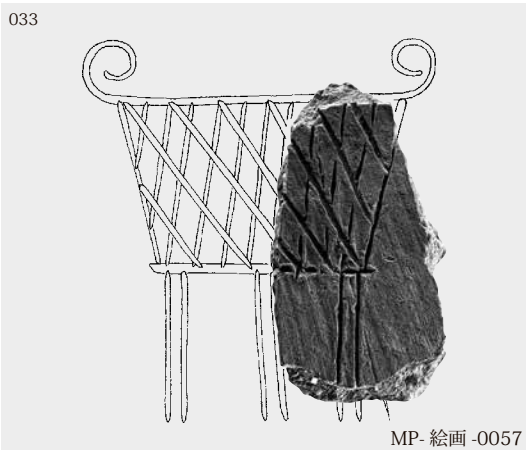
第53次調査
遺構：SR-101A
層位：第1層
土色：黒褐色砂質土
取上：—
No.：55
時代：弥生時代中期
残存長：4.7
残存幅：4.2



### 032 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第IV-1様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。西地区南部の第58次調査の中世溝から出土したもので、原位置は不明である。残存する絵画部分は少なく、切妻の高床建物の右上半分である。棟上は斜線による飾り、棟持柱は1本線、屋根部分は斜格文の充填で表現している。

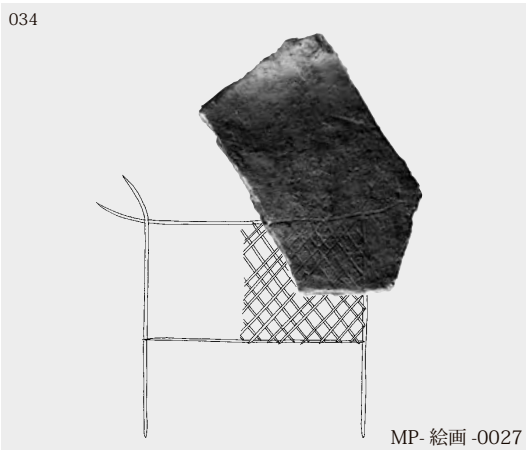
第58次調査
遺構：SD-51
層位：第4(下)層
土色：茶灰色粗砂
取上：—
No.：79
様式：大和第IV-1様式
残存長：9.5
残存幅：5.0



### 033 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。北地区の第59次調査の黒褐色土層から出土した。小片であるが、切妻の高床建物の右半分である。屋根部分は斜格文を充填、柱は2本線で表現している。棟持柱は描出していないようである。

第59次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒褐色土
取上：その1
No.：52
時代：弥生時代中期
残存長：5.2
残存幅：2.8



### 034 絵画土器 (建物)

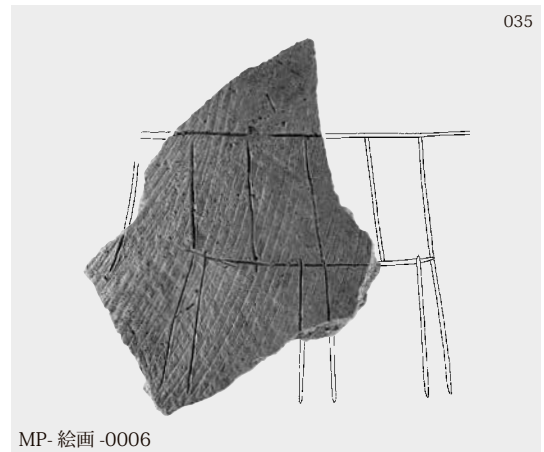
本絵画土器は、大和第IV-2様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。南端の第52次調査の環濠から出土した。切妻建物の右上半分が残存している。屋根部分は斜格文を充填している。棟先は「V」字状の表現の飾りとなっている。

第52次調査
遺構：SX-101
層位：第3-b層
土色：暗灰青粘
取上：—
No.：24
様式：大和第IV-2様式
残存長：9.4
残存幅：8.2

## 035 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第IV様式の壺胴部上半に描かれたものである。北西端の第19次調査の環濠から出土した。絵画は切妻の高床建物の左半分が残存しており、柱は2本線で表現、建物内部は縦線2本を充填している。建物の左側にも線刻の一部が残存する。

第19次調査
遺構：SD-204
層位：第5層
土色：灰黒色粗砂
取上：—
No：695
様式：大和第IV様式
残存長：10.8
残存幅：8.1



MP-絵画-0006

## 036 絵画土器 (建物・不明)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。北地区の第59次調査の黒色土層から出土した。高床建物を描いたもので、2重線に短線を充填した右上がりの梯子、並列する縦の1本線は柱であろう。また、地面を表したとみられる横線が柱の下端にある。建物の明瞭な線刻に対し、その左下にやや浅めの不明線刻がある。

第59次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒色土
取上：—
No：387
時代：弥生時代中期
残存長：7.0
残存幅：7.2



MP-絵画-0066

## 037 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第IV様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。西地区南部の第58次調査の中世溝から出土したため、原位置は不明である。切妻建物の左端のみが残存する。屋根部分は斜格文を充填、棟端飾りは斜め上方に太描きの短い直線がとりつく。

第58次調査
遺構：SD-51
層位：第8層
土色：灰黒粘
取上：—
No：92
様式：大和第IV様式
残存長：8.2
残存幅：8.3



MP-絵画-0030

## 038 絵画土器 (建物・鋸歯文)

本絵画土器は、大和第IV-2様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。南地区の第52次調査の環濠から出土した。2つの破片があり、第1破片は胴部中央の小片で、高床建物の梯子と思われる線刻がある。第2破片では頸部に部分的な鋸歯文3つと胴部上半に斜格文を充填した上向きの鋸歯文を描くが、先の建物絵画との関係はわからない。

038-1
第52次調査
遺構：SX-101
層位：第1(下)層
土色：茶灰色粘質土
取上：—
No：22
様式：大和第IV-2様式
残存長：6.3
残存幅：3.6



MP-絵画-0083

039



MP- 絵画 -0107

### 039 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式と思われる壺に描かれたものである。南地区の第61次調査の区画溝から出土した。絵画は、2本線で表現した柱と梯子のみ残す。梯子は柱に比べて細く、2本の斜線の間に刺突文を充填する。

第61次調査
遺構：SD-101B
層位：第5層
土色：灰黒粘
取上：その2
No.：422
様式：大和第Ⅳ様式？
残存長：2.5
残存幅：2.4

040



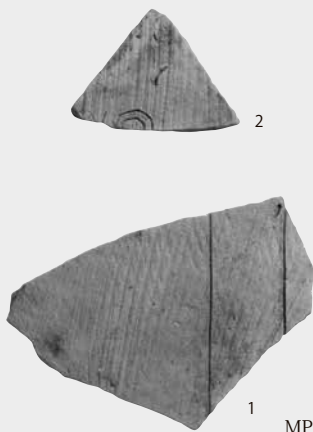
MP- 絵画 -0106

### 040 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式と思われる壺に描かれたものである。中央区の第98次調査の黒色砂質土層から出土した。高床建物を描いたもので、屋根部分は斜格文を充填、柱は2本線でその間を刺突文で表現している。柱は3本分確認できる。

第98次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒色砂質土
取上：—
No.：92
様式：大和第Ⅳ様式？
残存長：2.3
残存幅：3.2

041



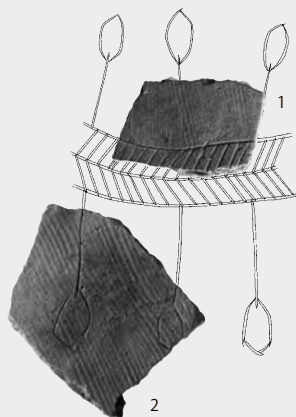
MP- 絵画 -0155

### 041 絵画土器 (建物)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の壺胴部に描かれたものである。西地区中央部の第16次調査の区画溝から出土した。2片があり、高床建物が描かれていると考えられるもので、第1破片には2本の柱、第2破片は棟上に斜格文の飾りを描き、棟端飾りは渦巻状に描く。

041-1
第16次調査
遺構：SD-101？
層位：—
土色：—
取上：—
No.：61
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：5.6
残存幅：7.5

042



MP- 絵画 -0005

### 042 絵画土器 (船)

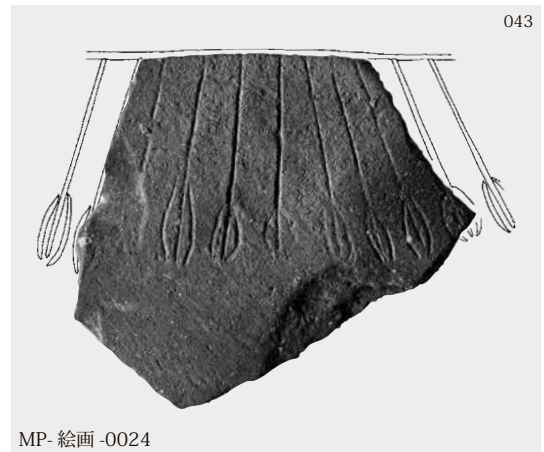
本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部上半に描かれたものである。西地区の第19次調査の中世大溝から出土したもので、原位置は不明である。2つの破片があり、第1破片は綾杉文と思われる斜線を充填した船本体とそこから伸びる櫂と推定される直線2本、第2破片は木の葉状に描かれた櫂2本が残存している。

042-2
第19次調査
遺構：中世大溝
層位：第6層
土色：暗灰色粗砂
取上：—
No.：40
時代：弥生時代中期
残存長：8.5
残存幅：7.8

## 043 絵画土器（船）

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部上半に描かれたものである。中央区の第50次調査の区画大溝から出土したものである。船本体の側辺を表した横線から下方に櫂が9本描かれている。櫂は木の葉状に描かれている。櫂の本数からかなり大きく船が描かれていたと推定できる。

第50次調査
遺構：SD-108
層位：第1層
土色：黒褐色砂質土
取上：—
No.：47
時代：弥生時代中期
残存長：7.5
残存幅：8.4

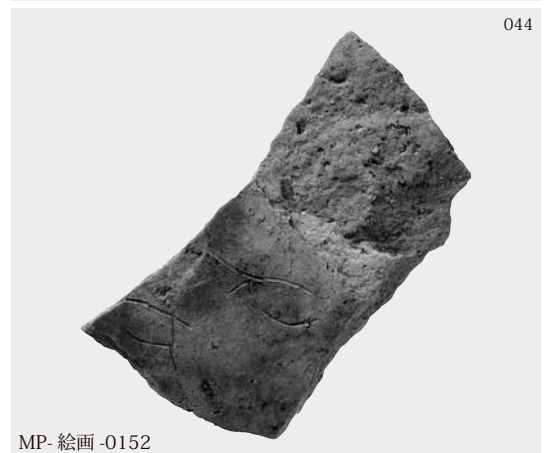


MP-絵画-0024

## 044 絵画土器（船）

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部に描かれたものである。西地区北部の第37次調査の黒褐色土層から出土した。小片のため全体は不明であるが、木の葉状に描かれた櫂が右下がりに2本分残存している。

第37次調査
遺構：—
層位：第I層
土色：黒褐色土
取上：—
No.：81
時代：弥生時代中期
残存長：7.9
残存幅：8.1

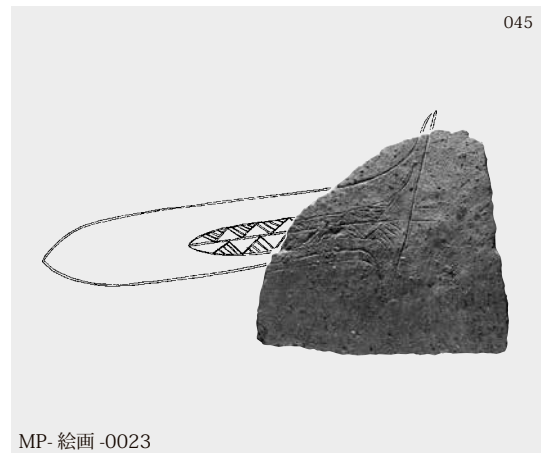


MP-絵画-0152

## 045 絵画土器（銅戈）

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部に描かれたものである。中央区の第50次調査の区画大溝から出土した。左向きに大阪湾型銅戈のみが描かれている。内表現や鋸歯文を樋に表現するなど写実的な絵画である。

第50次調査
遺構：SD-106
層位：第3(上)層
土色：灰黒色砂質土
取上：—
No.：164
時代：弥生時代中期
残存長：6.1
残存幅：7.0



MP-絵画-0023

## 046 絵画土器（人物）

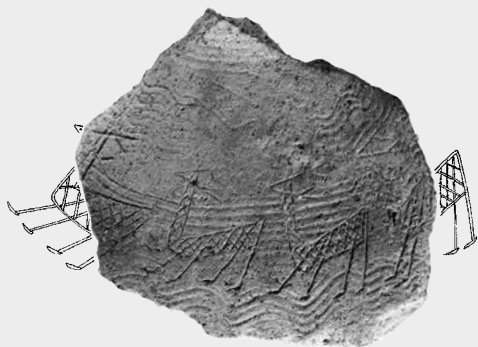
本絵画土器は、大和第IV様式の短頸壺の胴部上半に描かれたものである。南地区の第61次調査の区画溝から出土した。人物の顔は眉と目、口を刺突で表現、頭から短い線があり、羽状飾りを表現している可能性がある。また、左上方に残る線刻は、右手の先端の可能性があり、両手を挙げる人物とみなすことができる。

第61次調査
遺構：SD-105
層位：第2層
土色：黒褐色粘質土
取上：—
No.：280
様式：大和第IV様式
残存長：5.3
残存幅：4.6



MP-絵画-0071

047



MP- 絵画 -0025

### 047 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第Ⅲ様式の細頸壺の胴部に描かれたものである。中央区の第50次調査の区画大溝から出土した。櫛描直線文と波状文に重なるように左向きの鹿を並列的に描いている。頭部は「V」字形で角と一体的に表現する。胴部には斜格文を充填する。土器の胎土・色調から摂津地域からの搬入品の可能性がある。

第50次調査
遺構：SD-108
層位：第2層
土色：黒灰色粘質土
取上：－
No.：257
様式：大和第Ⅲ様式
残存長：5.9
残存幅：6.8

048



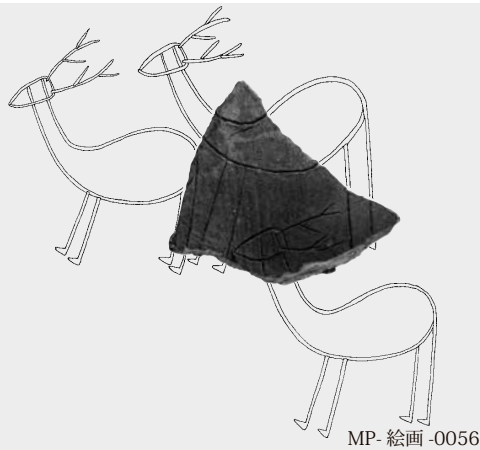
MP- 絵画 -0010

### 048 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第Ⅲ-4様式の広口壺の頸部に描かれたものである。北地区の第23次調査の井戸中層から出土した。絵画は左向きの鹿を描いているが、後刻によるものである。頸部から胴部は一体的で2本線、脚は1本線、角は内側に角枝を刻んでいる。土器の胎土・色調から生駒西麓産の可能性がある。

第23次調査
遺構：SK-113
層位：第4層
土色：灰黒色粘質土
取上：－
No.：402
様式：大和第Ⅲ-4様式
残存高：13.7
残存幅：19.9

049



MP- 絵画 -0056

### 049 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺の胴部に描かれたものである。中央区の第53次調査の落ち込み状遺構から出土した。左向きの鹿が3頭並列・上下に描かれている。いずれの鹿も全体は不明であるが、3頭の各部位(頭部・頸胴部・脚部)からほぼ鹿の全体像が推定される。

第53次調査
遺構：SR-101A
層位：第2層
土色：黒褐色砂質土
取上：－
No.：182
時代：弥生時代中期
残存長：5.8
残存幅：6.3

050



MP- 絵画 -0003

### 050 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の甕胴部に描かれたものである。北西端の第13次調査の環濠から出土した。タタキ成形後、ハケ調整で仕上げる。6片が残存し、4片に左向きの鹿2頭を描く。左側の鹿は臀部と後脚、右側の鹿は頸部と後脚が残存する。左側の鹿の尻尾は方形に表現する。2頭の鹿の脚先は前方へ短く描いている。

050-1

第13次調査
遺構：SD-06C
層位：第7層
土色：砂質土Ⅱ
取上：土-1972
No.：382
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：16.4
残存幅：11.5

## 051 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、大和第IV様式の壺に描かれたものである。南東端の第47次調査の環濠から出土した。左向きの鹿2頭が残存するが、頸部と胴部、脚部のみである。丸みをもった臀部を突き上げた姿態表現は、本遺跡に特徴的な表現である。

第47次調査
遺構：SD-2107
層位：第2層
土色：茶灰色砂質土
取上：－
No：416
様式：大和第IV様式
残存長：7.2
残存幅：6.1



MP- 絵画-0018

051

## 052 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、大和第IV様式の短頸壺と考えられる大形壺の肩部に描かれたものである。中央区の第98次調査の溝から出土した。絵画は、左向きの鹿が2頭描かれているが、左側の鹿は角枝のみ、右側の鹿は頭部と角枝を内側に描いた主幹のみが残存する。唐古・鍵遺跡で典型的な鹿頭部である。

第98次調査
遺構：SD-101
層位：第1層
土色：－
取上：土-113
No：146
様式：大和第IV様式
残存長：7.3
残存幅：10.3



MP- 絵画-0102

052

## 053 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、大和第IV様式の広口壺胴部上半に描かれたものである。南東端の第3次調査の環濠から出土した。絵画は左向きの鹿で、頭部の一部と角のみが残存する。角は主幹から内外にのびた角枝がみられる。

第3次調査
遺構：SD-06
層位：溝上層
土色：黒粘I
取上：－
No：－
様式：大和第IV様式
残存高：12.8
残存幅：19.8



MP- 絵画-0156

053

## 054 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部に描かれたものである。南地区の第3次調査の黒色砂質土層から出土した。左向きの鹿が描かれており、胴部と前脚部分で斜格文を充填する。脚部分に斜格文を充填する例は少ない。

第3次調査
遺構：SD-02
層位：－
土色：黒色砂質土
取上：－
No：－
時代：弥生時代中期
残存長：5.5
残存幅：4.7



MP- 絵画-0158

054



055



MP- 絵画 -0157

### 055 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部に描かれたものである。南地区の第3次調査の包含層から出土した。左向きの鹿が描かれており、胴部と前脚部分、わずかに角が残る。胴部は斜格文を充填する。

第3次調査
遺構：SD-07
層位：包含層
土色：—
取上：—
No.：—
時代：弥生時代中期
残存長：5.8
残存幅：4.4

056



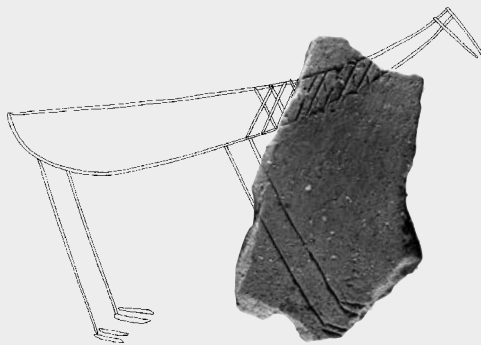
MP- 絵画 -0037

### 056 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部に描かれたものである。昭和30年代に唐古の人が採集した資料を戸田秀典氏が譲り受け、その後、本町に寄贈されたものである。右向きの鹿で、角と胴部、前脚が残っている。胴部は斜格文を充填し、前脚は脚先を二股に表現している。

第0次調査
遺構：—
層位：—
土色：—
取上：—
No.：6
時代：弥生時代中期
残存長：12.9
残存幅：11.8

057



MP- 絵画 -0093

### 057 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。南地区の第69次調査の黒灰色粘質土層から出土した。右向きの鹿で、頸部と前脚が残っている。頸部は2本線の間斜格文を充填する。前脚は、脚先を二股に表現している。

第69次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒灰色粘質土
取上：—
No.：271
時代：弥生時代中期
残存長：8.1
残存幅：6.0

058



MP- 絵画 -0151

### 058 絵画土器 (鹿)

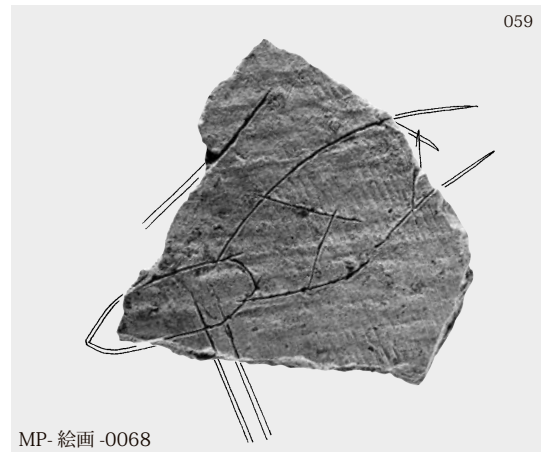
本絵画土器は、大和第IV様式の短頸壺と思われる胴部上半に描かれたものである。西地区北部の第37次調査の黒褐色土層から出土した。絵画は大きく描かれており、鹿の角部分のみが残存する。角は主幹から内側に角枝を描いている。

第37次調査
遺構：—
層位：第1層
土色：黒褐色土
取上：—
No.：49
様式：大和第IV様式
残存長：5.5
残存幅：4.6

## 059 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、弥生時代中期のタタキ痕のある土器に描かれたものである。北地区の第59次調査の黒褐色土層から出土した。絵画は左向きの鹿を大きく描いているが、頭部と頸部のみ残存する。角は2本の主幹から内側に角枝を描いている。頭部の上にも不明線刻の一部が残存する。

第59次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒褐色土
取上：—
No. : 54
時代：弥生時代中期
残存長：5.8
残存幅：5.7



MP-絵画-0068

## 060 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、大和第IV-2様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。南地区の第69次調査の区画溝から出土した。絵画は左向きの鹿で、角のみが残存する。主幹から内外にのびた角枝がみられる。

第69次調査
遺構：SD-1123
層位：第2層
土色：黒灰色粘質土
取上：—
No. : 1455
様式：大和第IV-2様式
残存長：6.2
残存幅：5.1



MP-絵画-0108

## 061 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、大和第IV-2様式あるいは第V-1様式と推定される短頸壺に描かれたものである。南地区の第69次調査の区画溝から出土した。右向きの鹿で、角部分が残っており、主幹とその内側に角枝を描く。線刻は細く鋭い。

第69次調査
遺構：SD-1103B
層位：第1層
土色：黒褐色土
取上：—
No. : 691
様式：大和第IV-2・V-1様式
残存長：6.0
残存幅：4.8

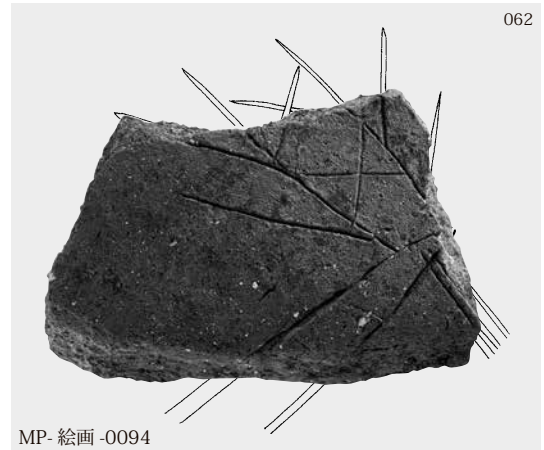


MP-絵画-0113

## 062 絵画土器（鹿）

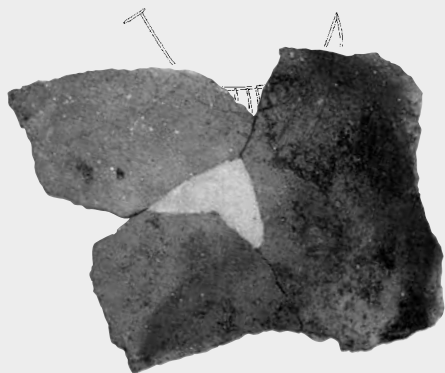
本絵画土器は、弥生時代中期の大壺に描かれたものである。南地区の第77次調査の黒褐色粘質土層から出土した。右向きの鹿で、頭部・角・頸部を残す。角は2本の主幹から両側に角枝を描いている。

第77次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒褐色粘質土
取上：—
No. : 200
時代：弥生時代中期
残存長：5.1
残存幅：7.6



MP-絵画-0094

063



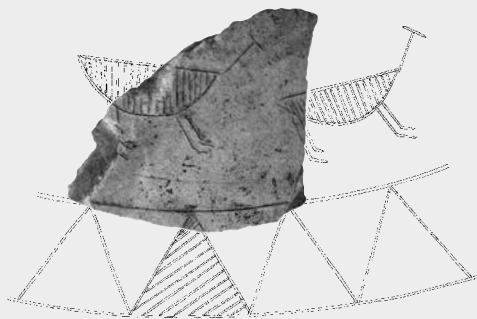
MP- 絵画 -0095

### 063 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。南東端の第76次調査の環濠から出土した。左向きの鹿と推定される絵画で、斜線を充填した「三日月」形の胴部と脚部を残す。後脚の間隔が広く鹿としてはバランスが悪い。

第76次調査
遺構：SD-1117
層位：第2層
土色：暗灰褐色粘質土
取上：－
No.：319
時代：弥生時代中期
残存長：13.0
残存幅：17.3

064



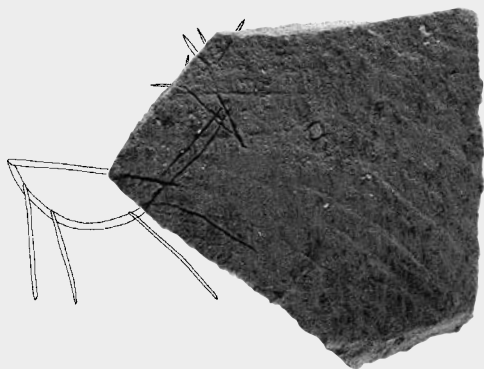
MP- 絵画 -0009

### 064 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第四様式と思われる器台の裾部に描かれたものである。北地区の第23次調査の黒色粘質土層から出土した。器台裾部に鋸歯文を巡らせ、その上に右向きの鹿を並列的に描いている。鹿の描き方は、下向きの円弧を胴部とし、頸部は1本線、頭部は横線で「T」字状に表現する。胴部は縦線を充填する。

第23次調査
遺構：－
層位：－
土色：黒色粘質土
取上：－
No.：10
様式：大和第四様式？
残存長：10.6
残存幅：11.7

065



MP- 絵画 -0064

### 065 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第四様式のタタキ痕のある壺に描かれたものである。南地区の第61次調査の区画溝から出土した。鹿は頭部から胴部、前脚にあたる部分が残っている。角は角枝を有する。胴部は、背中側が直線となる「半月」形である。鹿の右側には竹管状のものがあるが、意識的なものかどうか判断できない。

第61次調査
遺構：SD-101B
層位：第3層
土色：黒褐色粘砂
取上：－
No.：28
様式：大和第四様式
残存長：6.9
残存幅：7.0

066



MP- 絵画 -0082

### 066 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第四様式の大甕に描かれたものである。西地区中央部の第16次調査の区画大溝から出土した。器表面が剥落しているため、線刻が不明瞭になっているが、左向きの鹿が描かれている。胴部が大きく、頭部・頸部が小さくバランスが悪い。頭部には角が描かれている。胴部は斜格文を充填する。後脚の表現は不明である。

第16次調査
遺構：包含層
層位：－
土色：－
取上：－
No.：287
様式：大和第四様式
残存高：12.2
残存幅：20.0

## 067 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、大和第IV様式と思われる甕胴部上半にタタキによって付けられたものである。北地区の第59次調査の廃土から採集した。左向きの鹿を上下2段にスタンプするが、ハケによって消されている。鹿の輪郭は幅0.3～0.4cmの線として陽出されている。下向きの円弧状の胴部で前脚は突っ張る。頭部の表現は不明である。

第59次調査
遺構：廃土
層位：—
土色：—
取上：—
No.：1153
様式：大和第IV様式？
残存長：11.8
残存幅：12.6



MP-絵画-0121

067

## 068 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、弥生時代中期の甕と思われる胴部に描かれたものである。南地区の第76次調査の黒褐色粘質土層から出土した。小片のため、絵画の位置について断定できないが、上向きの鹿（土器を横にして描いた）が描かれている可能性がある。鹿は前脚と斜線を充填した胴部のみが残存する。

第76次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒褐色粘質土
取上：—
No.：149
時代：弥生時代中期
残存長：4.3
残存幅：5.3



MP-絵画-0127

068

## 069 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、大和第IV様式の壺胴部に描かれたものである。南端の第33次調査の環濠から出土した。左向きの鹿が描かれており、後脚と斜格文を充填した胴部のみが残存する。

第33次調査
遺構：SD-109
層位：第7層
土色：黒灰色砂質土
取上：—
No.：362
様式：大和第IV様式
残存長：9.2
残存幅：5.4



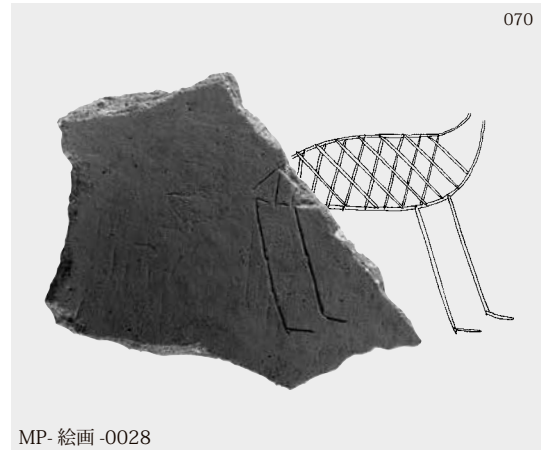
MP-絵画-0125

069

## 070 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。中央区の第53次調査の落ち込み状遺構から出土した。右向きの鹿が描かれているが、残存部分は少なく、臀部から後脚2本が残るのみである。胴部は斜格文を充填する。

第53次調査
遺構：SR-101A
層位：第4層
土色：灰黒粘
取上：—
No.：252
時代：弥生時代中期
残存長：7.0
残存幅：8.3



MP-絵画-0028

070

071



MP- 絵画 -0133

### 071 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、大和第Ⅳ-1様式の壺に描かれたものである。北端の第23次調査の河跡から出土した。小片のため、全体は不明であるが、右向きの鹿の胴部の一部と前脚部分が残存する。脚先は、二股に分かれている。

第23次調査
遺構：SR-1101
層位：第1層
土色：灰白色粗砂
取上：－
No.：416
様式：大和第Ⅳ-1様式
残存長：5.0
残存幅：4.5

072



MP- 絵画 -0123

### 072 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部に描かれたものである。西地区の第19次調査の黒色土層から出土した。左向きの鹿が描かれているが、2本の前脚と胴部の一部が残存するのみである。脚先は二股に分かれている。胴部は斜格文を充填する。

第19次調査
遺構：－
層位：－
土色：黒色土Ⅱ
取上：－
No.：90
時代：弥生時代中期
残存長：8.4
残存幅：6.1

073



MP- 絵画 -0128

### 073 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部に描かれたものである。南地区の第86次調査の土坑から出土した。左向きの鹿が描かれており、前脚と斜格文を充填した胴部のみが残存する。脚先は二股に分かれている。

第86次調査
遺構：SK-7101
層位：第3-b層
土色：黒色砂
取上：－
No.：187
時代：弥生時代中期
残存長：7.1
残存幅：6.3

074



MP- 絵画 -0122

### 074 絵画土器（鹿）

本絵画土器は、大和第Ⅳ-1様式の短頸壺の頸部と胴部上半に描かれたものである。北端の第23次調査の河跡から出土した。頸部の絵画は、左向きの鹿を描いたと思われ、4本の脚部と胴部の一部が残存する。脚部は前方に跳ね上げる。胴部は不明線刻が残る。

第23次調査
遺構：SR-1101
層位：第1層
土色：灰白色粗砂
取上：－
No.：416
様式：大和第Ⅳ-1様式
残存長：9.5
残存幅：12.0

## 075 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第IV様式の壺と思われる胴部に描かれたものである。西地区中央部の第16次調査の区画溝から出土した。タタキ整形後に絵画を描く。2本の縦線の下部が短く屈曲することから、鹿の前脚である可能性が高い。

第16次調査
遺構：SD-101？
層位：—
土色：—
取上：—
No：61
様式：大和第IV様式
残存長：10.8
残存幅：7.8

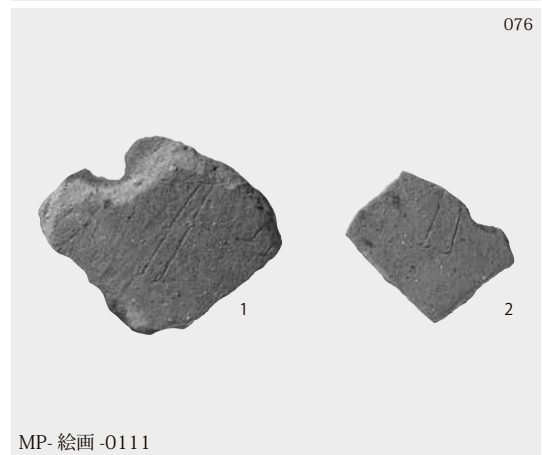


MP-絵画-0160

## 076 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。南地区の第69次調査の暗灰色粘質土層から出土した。土器の状態が悪く、絵画は不明瞭である。2頭の鹿を描く。第1破片には鹿の胴部と脚が残る。脚先はわずかに屈曲させる。その右側の鹿の脚先は短い横線できつちりと描き、第2破片の鹿の脚先と一連のものと考えられる。

076-1
第69次調査
遺構：—
層位：—
土色：暗灰色粘質土
取上：—
No：1672
時代：弥生時代中期
残存長：7.2
残存幅：8.7



MP-絵画-0111

## 077 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第IV-2様式の壺胴部に描かれたものである。南地区の第61次調査の区画溝から出土した。小片であるが、胴部と脚部分のみが残存し、鹿を描いたものと推定される。線刻は細く弱い。胴部の下腹線に並行するように微かな線刻が確認できる。消された絵画と思われ、鹿の下絵あるいは描き直しの可能性がある。

第61次調査
遺構：SD-102B
層位：第5(下)層
土色：灰黒粘
取上：—
No：649
様式：大和第IV-2様式
残存長：4.2
残存幅：4.5



MP-絵画-0114

## 078 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第V-1様式の器台胴部下半に描かれたものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。絵画は左向きの鹿を描いたと考えられ、前脚のみが残存する。脚先は二股に分かれている。2本目の脚の胴部側には器台の透孔があり、鹿絵画の胴部は透孔によって無くなっている可能性がある。

第91次調査
遺構：SD-103C
層位：第6層
土色：灰黒粘
取上：—
No：404
様式：大和第V-1様式
残存長：7.3
残存幅：12.4



MP-絵画-0118

079



MP- 絵画-0100

### 079 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第Ⅴ様式の壺に描かれたものである。南地区の第63次調査の区画溝から出土した。器表面が剥落しているため、線刻が不明瞭になっているが、2頭の左向きの鹿が描かれている。脚先は二股に分かれている。右側の鹿は頭部のみ残存する。

第63次調査
遺構：SD-103B
層位：第2層
土色：灰黒粘
取上：—
No.：232
様式：大和第Ⅴ様式
残存長：10.3
残存幅：7.6

080



MP- 絵画-0085

### 080 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第Ⅴ様式の壺に描かれたものである。南地区の第65次調査の黒褐色土層から出土した。左向きの鹿で、頭部から胴部と前脚の一部を残す。頸は短く頭の輪郭も不明瞭であるのに対し、角を大きく描いており鹿としてはバランスが悪い。角は主幹に対し、角枝が外側と両側に描いており表現として揃っていない。

第65次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒褐色土Ⅱ
取上：—
No.：268
様式：大和第Ⅴ様式
残存長：6.1
残存幅：4.6

081



MP- 絵画-0126

### 081 絵画土器 (鹿・不明)

本絵画土器は、大和第Ⅴ様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。南地区の第72次調査の環濠から出土した。絵画は複数あるが、欠損が多く、全体は不明である。第1破片は左向きの鹿頭部と思われる、2本の角と目の表現がある。第47次調査の鹿(082)に酷似する。第2・3破片はわずかな線刻と一部消された部分が残存する。

081-1
第72次調査
遺構：SD-107
層位：第1(下)層
土色：—
取上：土-128
No.：151
様式：大和第Ⅴ様式
残存長：10.7
残存幅：9.5

082



MP- 絵画-0016

### 082 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第Ⅴ-1様式の器台に描かれたものである。南東端の第47次調査の環濠から出土した。絵画は頭部から胴部まで横長の一体的な表現で、頸部が短い、角表現から鹿であろう。前脚と後脚は同じ向きでなく広がり、脚先は短線を足す。刺突による目の表現がみられる。絵画の一部はミガキ調整によって消されている。

第47次調査
遺構：SD-2101
層位：第7層
土色：灰黒色砂質土
取上：その3
No.：143
様式：大和第Ⅴ-1様式
残存長：8.7
残存幅：10.3

## 083 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第V-1様式の短頸壺の頸部に描かれたものである。南地区の第61次調査の区画溝から出土した。絵画の向きが逆さで、口縁部を下にして描いたと考えられる。絵画は、角のない頭部・頸部・胴部・4本の脚が描かれ、かなり退化した鹿表現である。この鹿の反対側には、櫛描波状文が部分的に描かれている。

第61次調査
遺構：SD-101B
層位：第5層
土色：灰黒粘
取上：土-511
No.：521
様式：大和第V-1様式
残存高：8.1
残存幅：12.4



MP-絵画-0072

## 084 絵画土器 (鹿)

本絵画土器は、大和第V様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。南地区の第3次調査の区画溝から出土した。絵画は左向きの鹿で、頭部と角のみが残存する。頭部は頸部から一体的に描かれている。角は短く主幹のみを表現する。

第3次調査
遺構：SD-04・05
層位：—
土色：—
取上：—
No.：—
様式：大和第V様式
残存長：8.1
残存幅：6.3



MP-絵画-0159

## 085 絵画土器 (鹿)



MP-絵画-0101

本絵画土器は、大和第VI-1様式の長頸壺の胴部上半に描かれたものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。絵画はミガキ調整の後に描き、線刻は浅い。右向きの鹿で、三日月形の胴部に頭部・角・脚部を1本線で簡単に表現する。頭部はやや右下に描く。角は主幹のみを表す。抽象化が進み、記号風になっている。



085-1

第91次調査
遺構：SD-101B
層位：第6(下)層
土色：黒灰色粘砂
取上：土-2658
No.：327
様式：大和第VI-1様式

全体

残存高：21.7

残存幅：22.9



086



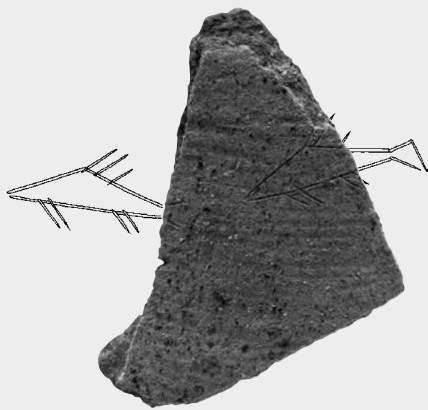
MP- 絵画 -0096

### 086 絵画土器 (魚)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の壺の胴部に描かれたものである。南東端の第3次調査の環濠から出土した。左向きの魚で、斜線を充填した三角形の胴部に背鰭・胸鰭・尾鰭を表現する。

第3次調査
遺構：SD-06
層位：－
土色：黒粘Ⅰ
取上：－
No.：－
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：11.7
残存幅：8.8

087



MP- 絵画 -0034

### 087 絵画土器 (魚)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式のタタキ痕のある壺に描かれたものである。南地区の第61次調査の区画溝から出土した。2匹の左向きの魚が並列的に描かれている三角形の胴部に背鰭・胸鰭・尾鰭の表現がある。

第61次調査
遺構：SD-102B
層位：西壁Sec.第10層
土色：－
取上：－
No.：1623
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：8.2
残存幅：5.1

088



MP- 絵画 -0063

### 088 絵画土器 (魚)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の壺に描かれたものである。南地区の第61次調査の区画溝から出土した。やや左に傾いた上向きの魚が描かれている。三角形の胴部に背鰭・胸鰭・尾鰭の表現がある。背鰭・胸鰭は2本線、尾鰭はひらきぎみの表現となっている。

第61次調査
遺構：SD-101
層位：第1層
土色：黒褐色土
取上：－
No.：129
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：4.8
残存幅：4.6

089



MP- 絵画 -0020

### 089 絵画土器 (魚)

本絵画土器は、大和第Ⅳ-1様式の有段口縁壺胴部中央に後刻の絵画として描かれたものである。北地区の第48次調査の土器集積遺構から出土した。上向きの魚で、三角形の胴部に目・背鰭・胸鰭を刻む。

089-1
第48次調査
遺構：SX-1102
層位：－
土色：－
取上：－
No.：156
様式：大和第Ⅳ-1様式

全体
復元高：43.6
復元胴径：29.2

## 090 絵画土器（魚）

本絵画土器は、タタキ痕のある大和第IV-1様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。中央区の第50次調査の区画大溝から出土した。絵画は細描きで、タタキ整形後に描く。俯瞰の魚を描いたと考えられる。2匹の魚は上向きで、胸鰭・尾鰭の表現がみられる。

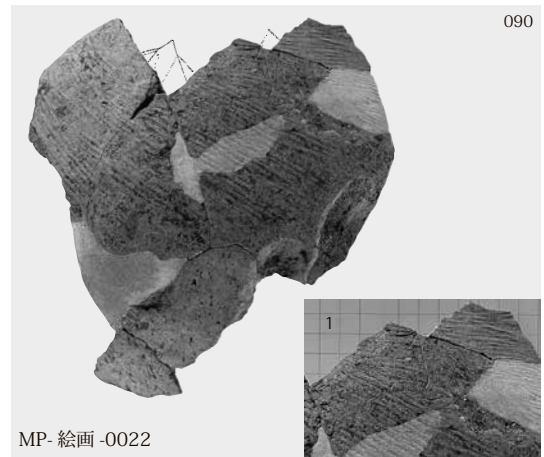
090-1

第50次調査
遺構：SD-108・109
層位：第1(上)層
土色：黒褐色砂質土
取上：—
No.：222
様式：大和第IV-1様式

全体

残存長：23.8

残存幅：20.5

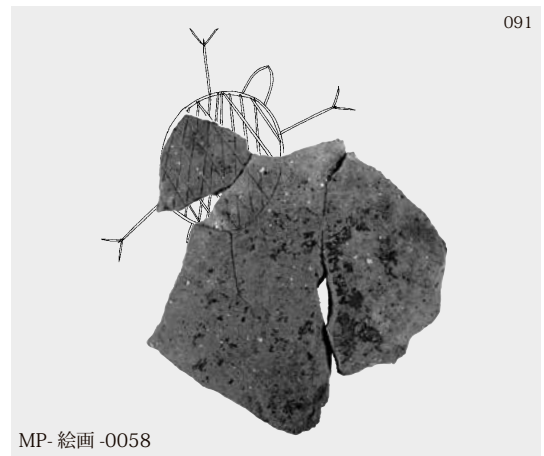


MP-絵画-0022

## 091 絵画土器（スッポン）

本絵画土器は、大和第V様式の壺胴部に描かれたものである。南地区の第65次調査の黒褐色土層から出土した。上向きのスッポンで、斜格文を充填した円形の胴部と右後脚、尻尾の部分が残っている。足先は、二股に分かれている。

第65次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒褐色土
取上：—
No.：174
様式：大和第V様式
残存長：9.0
残存幅：9.7

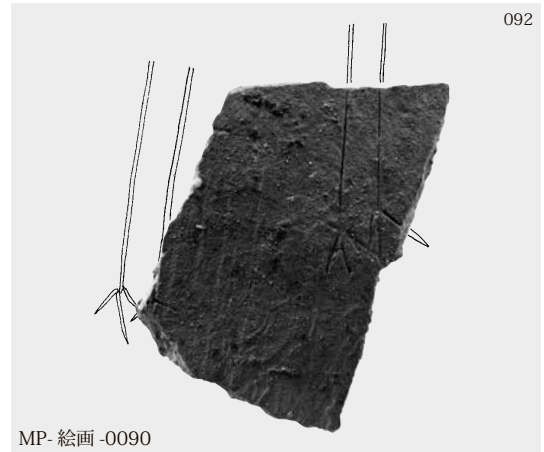


MP-絵画-0058

## 092 絵画土器（鳥）

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。中央区の第50次調査の落ち込み状遺構から出土した。小片のため絵画残存部分が少ないが、脚先を三叉状に表現した鳥の脚と見られる絵画が残る。脚は3本あるため、2羽以上の鳥が描かれた可能性がある。

第50次調査
遺構：落ち込み
層位：第2層
土色：灰黒色粘砂
取上：—
No.：162
時代：弥生時代中期
残存長：5.8
残存幅：5.0

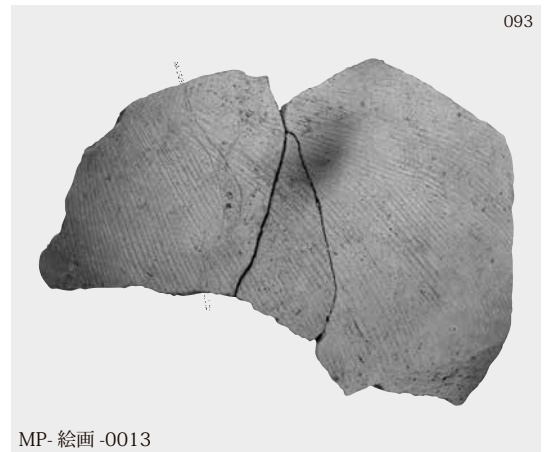


MP-絵画-0090

## 093 絵画土器（鳥）

本絵画土器は、大和第IV-1様式の短頸壺胴部に描かれたものである。南地区の第33次調査の井戸上層から出土した。左向きの鳥を表現したものと推定されるもので、緩やかな「S」字状に湾曲した細長い胴部に1本線の嘴と、交差した2本の脚が描かれている。

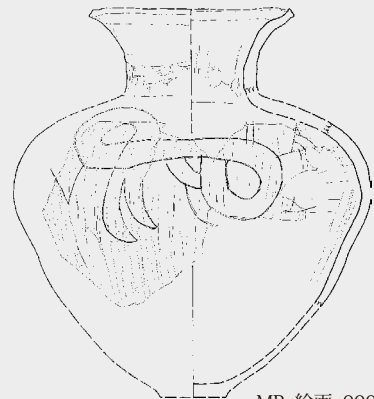
第33次調査
遺構：SK-120
層位：第2層
土色：灰粘
取上：土-219
No.：460
様式：大和第IV-1様式
残存長：16.0
残存幅：22.0



MP-絵画-0013

094 絵画土器 (龍)

094



MP- 絵画 -0004

094-1

本絵画土器は、大和第Ⅵ-2・3様式の広口壺胴部上半に描かれたものである。北西端の第19次調査の環濠から出土した。抽象化が進んだ左向きの龍で、「S」字状に表現された胴部には頭部の表現はみられない。胴部には三日月形の鱗表現と不明線刻が付加されている。

第19次調査	
遺構：	—
層位：	—
土色：	黒色土Ⅱ
取上：	—
No.：	107
様式：	大和第Ⅵ-2・3 様式
残存長：	11.6
残存幅：	19.6

095 絵画土器 (龍)

095



MP- 絵画 -0120

本絵画土器は、大和第Ⅵ-3様式の広口壺胴部上半に描かれたものである。北東端の第48次調査の環濠から出土した。抽象化が進んだ左向きの龍で、「S」字状に表現された胴部には頭部の表現はみられず、胴部の下側に三日月形の鱗表現が1つあるだけである。

第48次調査	
遺構：	SD-C-107
層位：	第1層
土色：	—
取上：	土-101
No.：	271
様式：	大和第Ⅵ-3 様式
高さ：	24.2
胴径：	20.0

## 096 絵画土器 (龍・記号)



MP- 絵画 -0150

本絵画土器は、大和第VI-3様式の小形長頸壺胴部に描かれたものである。南端の第33次調査の環濠から出土した。抽象化が進み記号と区別がつかない絵画で3つの意匠が並列的に描かれている。左端は頸胴部界から下方方向に半三日月形とその内部に曲線を描いたもので龍の鱗が象徴化され記号となったものと思われる。中央の絵画は胴部中央から下半にかけて描かれたもので、逆「S」字状の表現で龍の胴部を表した可能性がある。右端も胴部下半に描かれたもので木の葉状の表現である。これら意匠とは別に頸部には綾杉文が1周している。

第33次調査
遺構：SD-109
層位：第5層
土色：黒粘
取上：土-501
No.：275
様式：大和第VI-3様式
高さ：12.0
胴径：9.6

## 097 絵画土器 (龍)

本絵画土器は、大和第VI-3様式の長頸壺胴部に描かれたものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。抽象化が進み記号と区別がつかない絵画で、工具は先端が2本に分岐したもので描いている。大きな波線の上方に半三日月形を描いたもので、龍の胴部の一部と鱗を象徴的に表したものであろう。

第69次調査
遺構：SD-1109
層位：第5(下)層
土色：—
取上：土-7548
No.：721
様式：大和第VI-3様式
高さ：14.7
胴径：10.5



MP- 絵画 -0162

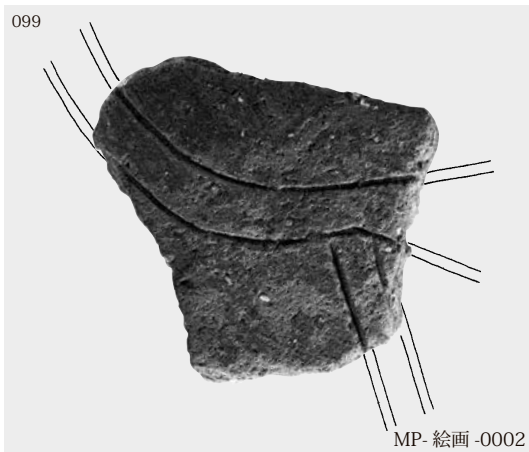
## 098 絵画土器 (龍?)

本絵画土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部下半に描かれたものである。西地区北部の第37次調査の井戸から出土した。抽象化が進み記号と区別がつかない絵画である。倒立させて描いている。くずれた三日月形を横方向に2つ重ねたような描き方で他の例から龍の胴部を表した可能性が高い。

第37次調査
遺構：SK-2121
層位：第7層
土色：黒灰粘
取上：土-705
No.：416
様式：大和第VI-3様式
残存高：12.9
残存胴径：20.0



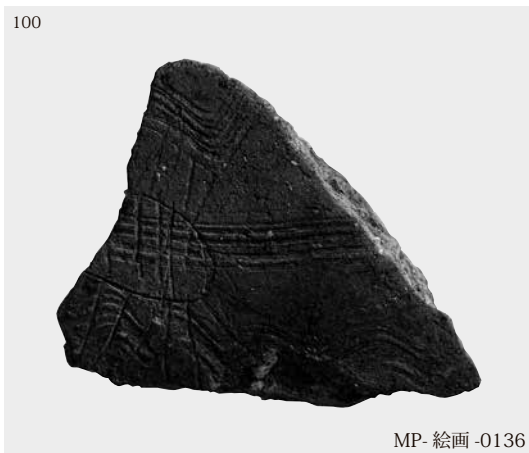
MP- 絵画 -0149



### 099 絵画土器 (龍)

本絵画土器は、大和第Ⅵ-3様式の壺胴部に描かれたものである。北西端の第13次調査の環濠から出土した。小片のため絵画残存部分が少ないが、龍と思われる湾曲した胴部が描かれている。

第13次調査
遺構：SD-04
層位：中層
土色：黒粘
取上：－
No.：138
様式：大和第Ⅵ-3様式
残存長：4.6
残存幅：4.8



### 100 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、大和第Ⅲ-3様式の壺胴部に描かれたものである。南端の第33次調査の環濠から出土した。絵画は意匠不明で、波状文と直線文の櫛描文様に重なるように描かれている。楕円を描いた後、その内部を縦線で充填するとともに楕円の上と下に縦線を不揃いに線刻したものである。何らかの動物を表しているかも知れない。

第33次調査
遺構：SD-108
層位：第1層
土色：黒褐色土
取上：－
No.：276
様式：大和第Ⅲ-3様式
残存長：5.7
残存幅：7.4



### 101 絵画土器 (不明・S字文)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の有段口縁壺の胴部上半に描かれたものである。北西端の第19次調査の環濠から出土した。絵画は先端を尖らせたものと、その左に斜線の下端が短線2本で繋がったものがある。これらの線刻は1つの意匠の可能性がある。このほか、口縁部には浮文による横方向の「S」字文を2つ連結させて貼付している。

101-1 第19次調査
遺構：SD-204
層位：第5層
土色：灰黒色粗砂
取上：G-501
No.：746
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：6.3
残存幅：6.6



### 102 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の短頸壺に描かれたものである。北西端の第13・19次調査の環濠から出土した。絵画は2重線で描かれたもので、逆「L」字形を2つ連続させた形をとるが、下端が欠損しているため、全体としては不明である。

第19次調査
遺構：SD-204
層位：第4(下)層
土色：黒粘
取上：土-4167
No.：673
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：7.5
残存幅：11.0

## 103 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、大和第IV様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。西地区中央部の第46次調査の区画溝から出土した。小片のため、絵画の全体像は不明であるが、縦方向の綾杉文の右側に羽状の線刻が取り付く。羽状の線刻は上下方への斜線で、横方向から下方へ垂れる。

第46次調査
遺構：SD-101
層位：第4層
土色：黒褐色粘質土
取上：—
No.：17
様式：大和第IV様式
残存長：5.7
残存幅：3.3

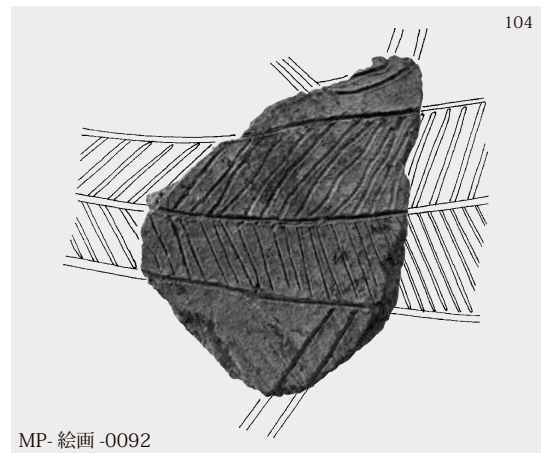


MP-絵画-0089

## 104 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺に描かれたものである。北地区の第59次調査の区画溝から出土した。絵画は横長の囲み線内を綾杉文で充填するもので、その下には2本の斜線、上にも2本の平行する線刻が見られ、鹿の胴部と前脚、角のようにみえる。仮に鹿を表現したとみなすと鹿の頸部に至る部分が若干太すぎるように思える。

第59次調査
遺構：SD-3102
層位：第1(下)層
土色：黒色土
取上：—
No.：645
時代：弥生時代中期
残存長：5.8
残存幅：4.6



MP-絵画-0092

## 105 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、大和第IV様式の壺に描かれたものである。北西端の第13次調査の環濠から出土した。小片のため、絵画の向きや全体は不明である。平行する直線の間を斜線で充填する。

第13次調査
遺構：SD-06C
層位：第5層
土色：粗砂
取上：—
No.：354
様式：大和第IV様式
残存長：4.8
残存幅：3.5

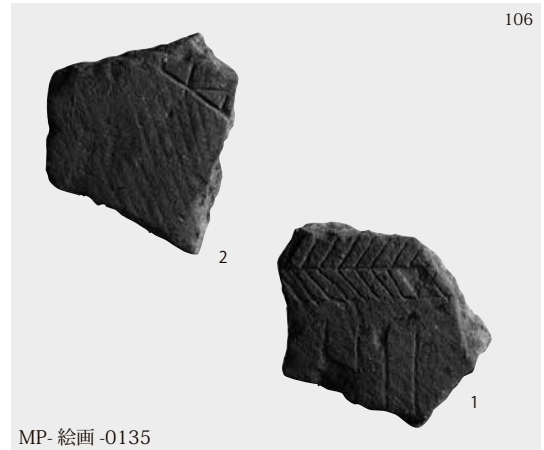


MP-絵画-0161

## 106 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、弥生時代中期の壺胴部に描かれたものである。西地区中央部の第22次調査の中世土坑等から出土したため、原位置は不明である。2片が残存する。第1破片は、横位の綾杉文の下に縦線を4本描くが、綾杉文とは接していない。建物ではなさそうである。第2破片は斜格文を充填しているようであるが、全体は不明である。

106-1
第22次調査
遺構：—
層位：第II層
土色：黒褐色土
取上：—
No.：16
時代：弥生時代中期
残存長：4.3
残存幅：4.4



MP-絵画-0135

107



MP- 絵画 -0147

### 107 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式と思われる大壺の胴部に描かれたものである。中央区の第98次調査の黒色砂質土層から出土した。絵画は大きく描かれた意匠の一部と思われ、その左端のみ残存している。絵画は横線の左端に楕円形状のものが吊り下げられ、横線の中央には先端が右方向を向いた三叉状の意匠となっている。

第98次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒色砂質土
取上：—
No.：20
様式：大和第Ⅳ様式？
残存長：10.7
残存幅：7.8

108



MP- 絵画 -0014

### 108 絵画土器 (不明)

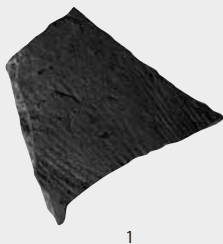
本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の大壺に描かれたものである。北地区西端の第37次調査の河跡と第53次調査の落ち込み状遺構から出土した。第1破片で上向きの木の葉状の表現が3つ以上並列的に描かれている。船の櫂にしては大きすぎることから別物であろう。第2破片は渦巻き表現であるが、ミガキによって一部消されている。

108-1

第37次調査
遺構：SX-2101
層位：第3層
土色：黒褐色土
取上：—
No.：256
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：10.3
残存幅：10.8

### 109 絵画土器 (不明)

109



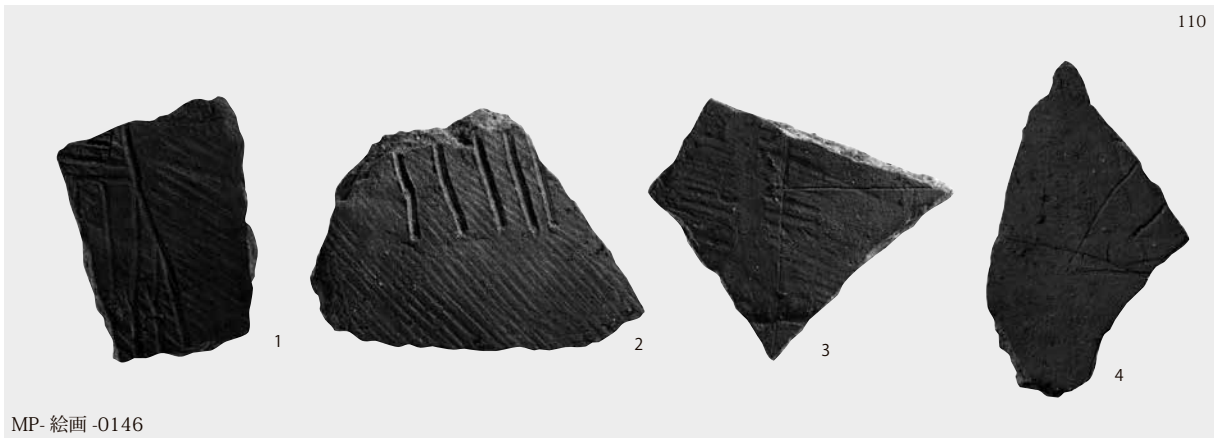
MP- 絵画 -0117

109-1 左

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の壺胴部に描かれたものである。西地区北部の第89次調査の区画溝などから出土した。絵画は3つの破片に絵画が残り、複数の画題で構成されていたと思われるが、ナデによって消されているため、よくわからない。これらの絵画は、最終的には消されてしまった絵画と思われる。大きな破片として残る第1破片では、主体となっているのは2重線で描かれた縦長の楕円形、あるいは「∩」形の周縁から放射状の弧条線が表現されているものである。その右側には右上がりの斜線に多数の短線が付加されたものや、斜格文を充填した円形が描かれている。第2破片にも微かな線刻がみられるが、消されてわからない。

第89次調査
遺構：SD-1114B
層位：第6層
土色：暗灰粘
取上：—
No.：483
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：12.9
残存幅：18.3

## 110 絵画土器（不明）



MP- 絵画 -0146

本絵画土器は、大和第IV様式の壺胴部に描かれたものである。西地区北部の第89次調査の区画溝などから出土した。複数の絵画が4つの破片に描かれているが、その位置関係や画題はわからない。第1・2破片は建物であろうか。太描きで力強いタッチの線刻であるが、第3・4破片では細描きもみられることから、薄い板状の工具によるものでその使い方が異なるために生じたものと考えられる。また、後者の2片は一部ナデによって絵画が消されていることから、絵画を描く行為に時間差があったことが推定できる。

110-1

第89次調査
遺構：SD-1114B
層位：第5層
土色：黒色粘砂
取上：—
No.：387
様式：大和第IV様式
残存長：6.9
残存幅：5.1

## 111 絵画土器（不明）



MP- 絵画 -0138

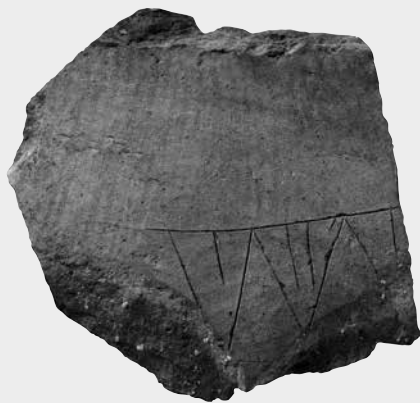
本絵画土器は、大和第IV様式の短頸壺胴部に描かれたものである。南地区の第61次調査の黒色粘砂層から出土した。外面にタタキを残す短頸壺と考えられる土器で、3片に線刻が残っている。第1・2破片は、内部をやや粗い斜格文で充填した大きな鋸歯文を描いている。第3破片は内部を細かい斜格文で充填した方形を呈する右端部分が残っている。小片のため意匠は不明である。いずれの線刻も極細の先端を有する工具で、絵画の工具としては例が少ない。

111-1

第61次調査
遺構：SD-102B
層位：第4層
土色：黒色粘砂
取上：—
No.：274
様式：大和第IV様式
残存長：8.8
残存幅：7.9



112



MP- 絵画 -0148

### 112 絵画土器 (鋸歯文)

本絵画土器は、大和第Ⅳ様式の短頸壺胴部上半に描かれたものである。西地区の第20次調査の中世大溝から出土したため、原位置は不明である。絵画は、2条の横線内に下向きの鋸歯文を3つ描くが、さらに連続するかはわからない。鋸歯文の内部は1乃至2本の縦線を挿入する。中央の鋸歯文の右上には描き直しの線刻がみられる。

第20次調査
遺構：中世大溝
層位：第4-c層
土色：暗灰粘
取上：－
No.：551
様式：大和第Ⅳ様式
残存長：9.4
残存幅：9.4

113



MP- 絵画 -0145

### 113 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、大和第Ⅴ様式の器台裾部に描かれたものである。南東端の第72次調査の環濠などから出土した。第2破片は縦線内を綾杉文で充填するものと少し間隔をあけて右に半円状を2重線で描きその内部を斜線で充填する、第1・3破片は細描きの曲線・直線を交えた線刻で描かれているが、ミガキにより一部絵画が消されている。

113-2

第72次調査
遺構：－
層位：－
土色：茶灰色土
取上：－
No.：2
様式：大和第Ⅴ様式
残存長：7.9
残存幅：10.6

### 114 絵画土器 (不明)

114



MP- 絵画 -0081

114-1

本絵画土器は、大和第Ⅴ様式の壺胴部に描かれたものである。南地区の第61次調査の井戸から出土した。4片が残存する。第1破片は対になる蕨手状の渦文2つの下側に三角文と渦文を表現している。第2の破片は中央の小さな楕円形部分から弧状線が垂下しその下に鋸歯文を描いたもので、鋸歯文部分は横方向のナデによって一部消されている。これら2片の特徴は、渦文の輪郭をヘラの刺突によって形づくるところで、この手法は建物絵画の棟飾りの渦文にみられる手法である。このほか、第3破片では横向きの綾杉文、第4破片では長さが異なる縦線が5本描かれている。

第61次調査
遺構：SK-106
層位：第3層
土色：黒色粘砂
取上：－
No.：471
様式：大和第Ⅴ様式
残存長：9.3
残存幅：7.9

## 115 絵画土器（不明）

本絵画土器は、弥生時代後期の壺胴部に描かれたものである。南地区の第63次調査の落ち込み状遺構から出土した。3片のうち1片に絵画が残存する。いずれも肩部に竹管文を巡らせている。この竹管文に重なるようにへら先が2本になった工具で線刻しており、右方向に流れるように羽状表現で表している。

第63次調査
遺構：落ち込みI
層位：第1層
土色：暗褐色粘質土
取上：—
No.：58
時代：弥生時代後期
残存長：6.0
残存幅：8.2



MP-絵画-0140

## 116 絵画土器（不明）

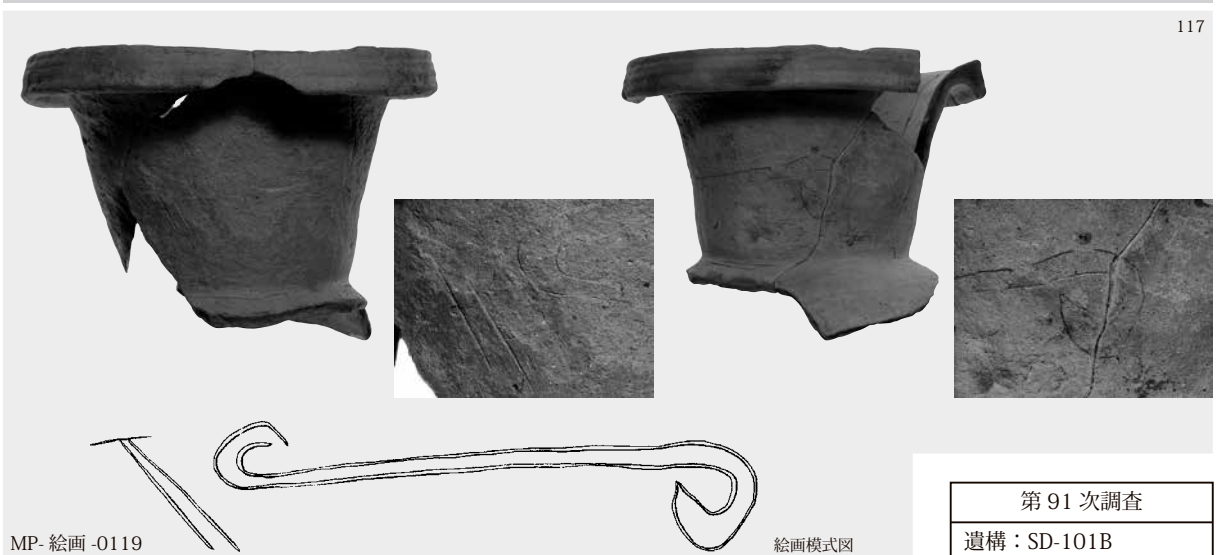
本絵画土器は、大和第V様式の短頸壺頸部に描かれたものである。南地区の第69次調査の黒褐色土層から出土した。不整形な輪郭線の外側に短線を7本以上放射状に表現したもので、意匠はわからない。

第69次調査
遺構：—
層位：—
土色：黒褐色土
取上：—
No.：1132
様式：大和第V様式
残存長：5.5
残存幅：7.3



MP-絵画-0153

## 117 絵画土器（S字文・不明）



MP-絵画-0119

絵画模式図

本絵画土器は、大和第V-2様式の広口壺頸部に描かれたものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。絵画は複数あり、横方向に長く伸ばした「S」字文とその左に2条の斜線・短い横線の組み合わせがある。この「S」字文は龍の可能性が有るだろう。

第91次調査
遺構：SD-101B
層位：第6(下)層
土色：黒灰色粘砂
取上：その2
No.：347
様式：大和第V-2様式
口径：14.6
残存高：11.2

### 118 絵画土器 (不明)

118



MP- 絵画 -0142

本絵画土器は、大和第Ⅳ-2様式の短頸壺に描かれたと思われるものである。南地区の第69次調査の区画溝などから出土した。絵画は3片が残存し、第1破片は弧状線に綾杉文を充填したもの、第2破片は放射状、第3破片は2重の弧状線に斜線を付加したものである。いずれも何を表現しているかわからない。

118-1

第69次調査
遺構：SD-1104
層位：第2層
土色：暗灰褐色粘質土
取上：—
No.：439
様式：大和第Ⅳ-2様式
残存長：6.0
残存幅：7.6

119



MP- 絵画 -0116

### 119 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、大和第Ⅴ様式の広口壺の頸部に描かれたものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。2つ以上の不明絵画で構成されている。左側の絵画は、3本の斜線が合わさったもので中央の線刻の下方が三叉状になっている。省略あるいは退化した絵画であろう。右側の線刻は、左上がりの斜線1本である。

第69次調査
遺構：SD-1109
層位：第5層
土色：—
取上：土-2544
No.：313
様式：大和第Ⅴ様式
口径：29.3
残存高：12.9

120



MP- 絵画 -0144

### 120 絵画土器 (不明)

本絵画土器は、弥生時代後期の壺に描かれたものである。南地区の第69次調査の区画溝から出土した。小片のため、全体像は不明である。2重の弧状線の内側に短い斜線がつくものである。

第69次調査
遺構：SD-1103
層位：第1層
土色：黒褐色土
取上：—
No.：383
時代：弥生時代後期
残存長：4.0
残存幅：4.0

## 121 絵画土器（不明）

本絵画土器は、大和第Ⅴ様式の壺胴部に描かれたものである。南地区の第63次調査の落ち込み状遺構から出土した。絵画は複数からなっており、胴部上端には波状線、中央左側には2段になった逆「U」字形あるいはヒレ状と表現すれば良いような線刻、その右側には下方から右上方へ蕨手文状の太描きの線刻がある。

第63次調査
遺構：落ち込みⅠ
層位：第2層
土色：灰褐粘
取上：－
No：86
様式：大和第Ⅴ様式
残存長：9.8
残存幅：12.1



MP- 絵画-0139

## 122 絵画土器（不明）

本絵画土器は、弥生時代後期の壺胴部に描かれたものである。中央区の第53次調査の黒色土層から出土した。絵画は、3段の横帯を斜格文で充填するもので、最下段は2本線、左端の区画線は横帯より上下に伸びている。

第53次調査
遺構：－
層位：－
土色：黒色土
取上：－
No：22
時代：弥生時代後期
残存長：5.5
残存幅：12.3



MP- 絵画-0055

## 123 絵画土器（不明）

本絵画土器は、大和第Ⅵ様式の長頸壺の頸部に描かれたものである。南地区の第69次調査の区画溝などから出土した。第1破片は、鹿の角状に分岐する直線で構成されるが、直線の向きと大きさから鹿の角ではなからう。第2破片は、左上がりの2本の斜線の間を斜格文を充填するものである。いずれも線刻は細く鋭利である。

123-2

第69次調査
遺構：SD-1104
層位：第2層
土色：－
取上：土-266
No：288
様式：大和第Ⅵ様式
残存長：8.4
残存幅：7.7



MP- 絵画-0141

## 124 絵画土器（不明）

本絵画土器は、大和第Ⅵ-3様式の台付鉢に描かれたものである。南地区の第69次調査の黒褐色土層から出土した。鉢部外面の4ヶ所に放射状に描かれている。土器表面の状態が不良で、線刻も極めて細い。線刻の一部は消されている可能性がある。「E」字形を横にしたような線刻と弧帯文風の部分を省略したような線刻である。

第69次調査
遺構：－
層位：－
土色：黒褐色土
取上：－
No：114
様式：大和第Ⅵ-3様式
口径：29.3
残存高：12.9



MP- 絵画-0115

001



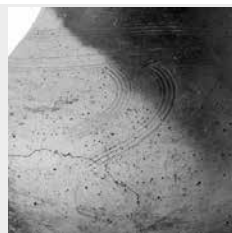
MP- 記号 -0106

### 001 記号土器 (曲線：F-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第Ⅰ-2様式の広口壺の胴部上半に浮文により表したものである。西地区中央部の第20次調査の土坑から出土した。壺の頸胴部で、頸胴部界には段を、胴部下半はへら描直線文を1条巡らす。記号は、逆「U」字形の粘土紐を貼付したもので、周囲は粗雑なミガキによって仕上げられている。

第20次調査
遺構：SK-215
層位：第2(下)層
土色：灰黒粘
取上：土-1200
No.：705
様式：大和第Ⅰ-2様式
残存長：20.9
残存幅：23.2

002



反対面

MP- 記号 -0072

### 002 記号土器 (曲線：K-D<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第Ⅱ-2様式の広口長頸壺の胴部に櫛描きにより表したものである。中央区の第53次調査の落ち込み状遺構から出土した。口縁部を欠損する。4条1単位の櫛描直線文を頸部に5帯、胴部に2帯巡らす。記号は前述櫛描原体で、最下段の櫛描文から下方へ描く。対置方向に逆「C」字形の記号を2つと3つ重ねる。

第53次調査
遺構：SR-101A
層位：第4(上)層
土色：—
取上：土-402
No.：319
様式：大和第Ⅱ-2様式
残存高：29.1
胴径：21.1

003



MP- 記号 -0102

### 003 記号土器 (直線：G-B'<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第Ⅱ-3様式の器台の口縁部内面に後刻したものである。西地区北部の第37次調査の井戸から出土した。広口長頸壺の胴部下半が欠損した後、破面を研磨し転用したものである。口縁端部には櫛描波状文、頸胴部には直線文を巡らす。記号は石器などで、口縁部内面やや頸部側に「X」字形を太く刻んでいる。

第37次調査
遺構：SK-2116
層位：第4層
土色：—
取上：土-401
No.：1091
様式：大和第Ⅱ-3様式
高さ：22.6
復元口径：29.3

004



MP- 記号 -0103

### 004 記号土器 (直線：G-B'<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第Ⅱ-3様式の細頸壺の頸部に後刻したものである。西地区北部の第37次調査の井戸から出土した。壺の口縁部から頸部の破片である。頸部には櫛描直線文4帯を巡らす。記号は石器などで、上から2段目の櫛描文上に重ねて「X」字形に小さく刻むが、目立たない。

第37次調査
遺構：SK-2116
層位：第4層
土色：植物層
取上：—
No.：1085
様式：大和第Ⅱ-3様式
口径：13.2
残存高：12.0

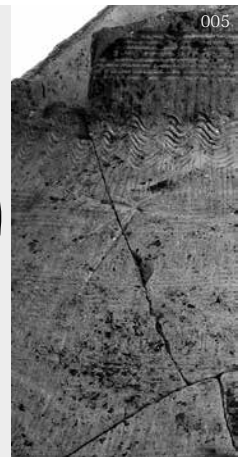
005 記号土器 (直線: G-B<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第三-3様式の細頸壺の胴部上半に後刻したものである。西地区北部の第37次調査の土坑から出土した。口頸部と胴部の一部を欠損する。頸胴部には櫛描直線文、頸胴部界に波状文を巡らす。煤の付着がある。記号は石器などで、胴部最上段の直線文上に重ねて右上がり三叉形を小さく刻むが、ほとんど目立たない。

第37次調査
遺構: SK-2114
層位: 第4層
土色: 黒粘
取上: -
No.: 282
様式: 大和第三-3様式
残存高: 32.2
胴径: 25.0



MP-記号-0104

006 記号土器 (直線: G-B<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第四-1様式の高杯の坏部に後刻したものである。南地区の第33次調査の黒色粘質土層から出土した。坏部と脚部の一部を欠損するが、ほぼ全形がわかる。口縁部には1条の凹線文を巡らす。器面の保存状態は悪い。記号は石器などで、坏部外面中央に下向きの三叉形を刻むが、ほとんど目立たない。

第33次調査
遺構: -
層位: 第IV(上)層
土色: 黒色粘質土
取上: -
No.: 630
様式: 大和第四-1様式
口径: 15.7
高さ: 16.9



MP-記号-0101

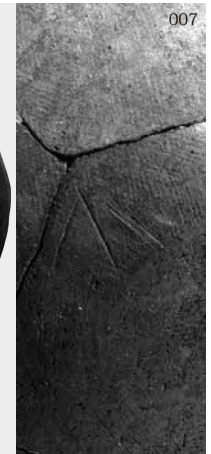
007 記号土器 (直線: G-B<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第四-1様式の壺の胴部中央に後刻したものである。南地区の第61次調査の壺棺本体である。壺の口頸部と胴部の一部を欠損する。頸胴部界にへら描きの刺突文を巡らす。胴部上半は細条のタタキ後ハケ、下半はケズリを施す。記号は石器などで、ほぼ上向きの三叉形を刻む。右端の線刻は浅く、複数の線刻が重なる。

第61次調査
遺構: SX-101
層位: 第1層
土色: -
取上: 土-101
No.: 490
様式: 大和第四-1様式
残存高: 37.0
胴径: 30.0



MP-記号-0098

008 記号土器 (曲線: F-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第四-1様式の有段口縁壺の胴部上半に浮文により表したものである。北地区の第48次調査の土器集積遺構から出土した。壺の口縁部から胴部上半の破片で、口縁部に4条の凹線文、頸胴部界にはハケ原体による刺突文を巡らす。記号は「C」字形に粘土紐を貼付するが、強く押捺するため平たくなり、目立たない。

第48次調査
遺構: SX-1102
層位: -
土色: -
取上: -
No.: 85
様式: 大和第四-1様式
口径: 19.9
残存高: 19.3



MP-記号-0071



009



MP-記号-0002

### 009 記号土器 (直線: H-B''<sub>1</sub>+H-B''<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第Ⅳ-1様式の高杯の脚裾部に線刻したものである。西地区北部の第13次調査の井戸から出土した。完形の高杯で、口縁部には3条の凹線文、脚裾部には2孔一対の小円透孔を3方に配置する。記号は逆「V」字形を2つ並列させ、裾が開いた「M」字形のような形態になっている。

第13次調査
遺構: SK-07
層位: 第1層
土色: 黒粘
取上: 土-106
No.: 529
様式: 大和第Ⅳ-1様式
口径: 12.0
高さ: 12.3

010



MP-記号-0051

### 010 記号土器 (直線: H-A<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第Ⅵ-3様式の広口壺胴部上半に線刻したものである。北東端の第24次調査の環濠から出土した。ほぼ完形の壺で、胴部下半には煤が付着する。外面はハケ調整で仕上げる。記号は、胴部上端から下方へ縦線1本を刻んだものである。

第24次調査
遺構: SD-107
層位: 第3層
土色: 黒粘
取上: 土-326
No.: 170
様式: 大和第Ⅵ-3様式
高さ: 20.7
胴径: 21.0

011



MP-記号-0050

### 011 記号土器 (直線: H-A<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第Ⅵ-1様式の短頸壺の頸胴部に線刻したものである。南端の第33次調査の環濠から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、頸部から胴部上半にかけて縦線2本を深く大きく刻んだものである。

第69次調査
遺構: SD-1109
層位: 第5層
土色: ー
取上: 土-1505
No.: 313
様式: 大和第Ⅵ-1様式
高さ: 18.8
胴径: 15.0

012



MP-記号-0015

### 012 記号土器 (直線: H-A<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第Ⅵ-2様式の長頸壺頸部に線刻したものである。南端の第33次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、口縁部直下から頸部下端までやや斜めの縦線2本を太く大きく刻んだものである。

第33次調査
遺構: SK-125
層位: 第3層
土色: ー
取上: 土-350
No.: 493
様式: 大和第Ⅵ-2様式
高さ: 20.3
胴径: 11.9

013 記号土器 (直線：H-A<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南地区の第33次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整を施した後、記号を刻む。記号は、胴部上端から底部近くまで縦線2本を大きく刻んだものである。

第33次調査
遺構：SK-125
層位：第3層
土色：—
取上：土-355
No：493
様式：大和第VI-2様式
高さ：22.2
胴径：11.0



MP-記号-0014

014 記号土器 (直線：H-A<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の長頸壺胴部上半に線刻したものである。西地区中央部の第14次調査の井戸から出土した。完形の壺である。外面は、記号線刻後にミガキ調整で仕上げる。記号は胴部に縦線2本を刻んだものである。

第14次調査
遺構：SK-106
層位：下層
土色：黒粘
取上：土-d
No：37
様式：大和第VI-3様式
高さ：19.3
胴径：12.4



MP-記号-0004

015 記号土器 (直線：H-A<sub>3</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。西端の第62次調査の環濠から出土した。完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に短い縦線3本を刻んだものである。

第62次調査
遺構：SD-101
層位：第2層
土色：—
取上：土-223
No：106
様式：大和第VI-2様式
高さ：24.4
胴径：14.0



MP-記号-0074

016 記号土器 (直線：H-A<sub>4</sub>)

本記号土器は、大和第V-1様式の広口壺頸部に線刻したものである。南東端の第47次調査の環濠から出土した。口縁部と胴部一部欠損、胴部の器面に剝落がみられるが、ほぼ完形の壺である。胴部下半に煤の付着がみられる。外面はハケ調整後粗雑なミガキ調整をおこなう。記号は、頸部に縦線4本をやや鋭利なヘラで線刻する。

第47次調査
遺構：SD-2101
層位：第8層
土色：—
取上：土-872
No：389
様式：大和第V-1様式
高さ：31.4
胴径：22.8



MP-記号-0025



017



MP-記号-0083

### 017 記号土器 (直線：H-A<sub>4</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に線刻したものである。西地区中央部の第74次調査の井戸から出土した。完形の壺である。外面はナデ調整で仕上げる。記号は胴部上端に、短い縦線4本を線刻する。

第74次調査
遺構：SK-119
層位：第3層
土色：—
取上：土-329
No.：662
様式：大和第VI-3様式
高さ：17.0
胴径：14.2

018



MP-記号-0084



### 018 記号土器 (直線：H-A<sub>4</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南東端の第76次調査の環濠から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に細描きで短い縦線を4本刻んだものである。

第76次調査
遺構：SD-1106
層位：第2層
土色：—
取上：土-206
No.：104
様式：大和第VI-3様式
高さ：16.4
胴径：11.6

019



MP-記号-0053



### 019 記号土器 (直線：H-A<sub>5</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に線刻したものである。西地区中央部の第74次調査の井戸から出土した。完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に細描きで縦線5本を浅く刻んだものである。

第74次調査
遺構：SK-119
層位：第5層
土色：—
取上：土-504
No.：691
様式：大和第VI-3様式
高さ：17.6
胴径：15.0

020



MP-記号-0036



### 020 記号土器 (直線：H-A'<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺頸部に線刻したものである。南地区の第33次調査の井戸から出土した。口縁部・胴部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、頸部下位にやや右下がりの太めの横線2本を刻んだものである。

第33次調査
遺構：SK-125
層位：第3層
土色：—
取上：土-330
No.：420
様式：大和第VI-2様式
高さ：30.3
胴径：16.5

021 記号土器 (直線: H-A'<sub>3</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺頸部に線刻したものである。南端の第33次調査の環濠から出土した。口頸部の破片である。外面はハケ調整で仕上げる。記号は、頸部中央にやや太めの横線3本を刻んだものである。

第33次調査
遺構: SD-109
層位: 第5(下)層
土色: -
取上: 土-5376
No.: 341
様式: 大和第VI-2様式
口径: 12.6
残存高: 11.7



MP-記号-0010

022 記号土器 (直線の組合せ: H-A''<sub>4</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。口縁部を欠損するが、ほぼ完形の壺で、胴部中央に穿孔がみられる。頸胴部界に刺突文を巡らす。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に横線1本と縦線4本を組み合わせたものである。

第69次調査
遺構: SD-1109
層位: 第5層
土色: -
取上: 土-580
No.: 313
様式: 大和第VI-1様式
残存高: 20.0
胴径: 14.5



MP-記号-0049

023 記号土器 (直線の組合せ: H-A''<sub>6</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺胴部に線刻したものである。西地区北部の第79次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面全体はナデ調整、胴部中央から下半はミガキ調整で仕上げる。記号は胴部上半に大きく線刻され、横線1本と縦線6本を組み合わせたものである。

第79次調査
遺構: SK-120
層位: 第5層
土色: -
取上: 土-503
No.: 527
様式: 大和第VI-1様式
高さ: 28.2
胴径: 17.3



MP-記号-0056

024 記号土器 (直線の組合せ: H-A''<sub>6</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。北西端の第13次調査の環濠から出土した。口縁部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。頸胴部に煤の付着がみられる。外面はハケ調整で仕上げる。記号は、胴部上半に横線1本と縦線6本を組み合わせたものである。

第13次調査
遺構: SD-04
層位: 中層
土色: 黒粘
取上: 土-06
No.: 144
様式: 大和第VI-2様式
残存高: 18.4
胴径: 13.7



MP-記号-0001



### 025 記号土器 (直線の組合せ: H-A<sub>3</sub>+H-A'<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸部胴部に線刻したものである。南地区の第33次調査の井戸から出土した。完形の壺(胴部下半の器面一部剥落)である。外面はハケ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に横線2本と縦線3本を組み合わせたものである。

第33次調査
遺構: SK-125
層位: 第3層
土色: -
取上: 土-356
No.: 493
様式: 大和第VI-2様式
高さ: 24.7
胴径: 13.1



### 026 記号土器 (直線の組合せ: H-A'<sub>2</sub>+A<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に線刻したものである。南地区の第63次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺で、胴部下半に煤の付着がみられる。外面はミガキ調整で仕上げる。使用による摩滅痕が底部にみられる。記号は、胴部上半に縦線1本とやや左下がりの横線2本を組み合わせたものである。

第63次調査
遺構: SK-106
層位: 第2層
土色: -
取上: 土-207
No.: 181
様式: 大和第VI-3様式
高さ: 19.9
胴径: 19.5



### 027 記号土器 (直線の組合せ: H-B''<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-1様式の長頸壺胴部に線刻したものである。西地区中央部の第74次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はハケ後、ミガキ調整で仕上げる。記号は胴部上端に「V」字状の記号を浅く描く。

第74次調査
遺構: SK-118
層位: 第3層
土色: -
取上: 土-301
No.: 529
様式: 大和第V-1様式
高さ: 34.5
胴径: 21.6



### 028 記号土器 (直線: H-B''<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、胴部中央に上向きに三叉形を大きく線刻する。また、記号の左上部分の頸胴部界の凸帯にも6つの不明瞭な刻目を入れる。

第69次調査
遺構: SD-1109
層位: 第5(下)層
土色: -
取上: 土-6562
No.: 548
様式: 大和第V-2様式
高さ: 28.9
胴径: 15.5

029 記号土器 (直線: H-B<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。口縁部・胴底部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、胴部上端にやや雑な上向きの三叉形を線刻する。

第69次調査
遺構: SD-1109
層位: 第5(下)層
土色: -
取上: 土-6508
No.: 548
様式: 大和第VI-1様式
残存高: 22.0
胴径: 15.0



MP-記号-0044

030 記号土器 (直線: H-B<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南端の第33次調査の環濠から出土した。口縁部・胴部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に上向きの三叉形を線刻する。

第33次調査
遺構: SD-109
層位: 第5(下)層
土色: 黒粘
取上: -
No.: 354
様式: 大和第VI-2様式
高さ: 20.8
胴径: 15.0



MP-記号-0017

031 記号土器 (直線の組合せ: H-B<sub>3</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の長頸壺の胴部に線刻したものである。南地区の第63次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上半に上向きの三叉形に斜線1本を付加したものである。

第63次調査
遺構: SK-105
層位: 第2層
土色: -
取上: 土-202
No.: 211
様式: 大和第VI-3様式
高さ: 21.1
胴径: 12.0



MP-記号-0091

032 記号土器 (直線: H-B<sub>7</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺頸部にヘラ描きしたものである。南地区の第33次調査の井戸から出土した。口頸部と胴部の一部のみ残存する。外面は記号線刻後にミガキ調整で仕上げる。記号は太描きで、頸部中央に縦方向のジグザグ状線を線刻する。

第33次調査
遺構: SK-133
層位: 第2(下)層
土色: -
取上: 土-205
No.: 508
様式: 大和第VI-2様式
口径: 11.9
復元高: 18.3



MP-記号-0009

033



MP-記号-0059

### 033 記号土器 (直線：H-B<sub>N</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺の胴部に線刻したものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。胴部の一部と底部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。胴部下半に穿孔がみられる。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上半に左下がりのランダムな斜線を9本程度線刻する。

第69次調査
遺構：SD-1109
層位：第5(下)層
土色：—
取上：土-6502
No.：548
様式：大和第VI-1様式
残存高：21.9
胴径：13.8

034



MP-記号-0057

### 034 記号土器 (直線：H-B''<sub>6N</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の短頸壺の胴部に線刻したものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。口頸部と底部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はタタキ成形後、胴下半をミガキ調整で仕上げる。胴部に煤の付着がある。記号は、胴部上半に横方向にジグザグ状に線刻するが、浅くほとんど目立たない。

第69次調査
遺構：SD-1109
層位：第6層
土色：—
取上：土-643
No.：848
様式：大和第V-2様式
残存高：30.9
胴径：21.1

035



MP-記号-0027

### 035 記号土器 (曲線：H-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺胴部に線刻したものである。西地区北部の第79次調査の井戸から出土した。口縁部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げるが、使用による摩滅痕が胴部中央から底部にみられる。胴部上半に小動物爪圧痕がある。記号は、胴部上端に「U」字形を太く線刻する。

第79次調査
遺構：SK-120
層位：第6層
土色：—
取上：土-601
No.：535
様式：大和第VI-1様式
残存高：29.6
胴径：17.1

036



MP-記号-0040

### 036 記号土器 (曲線：H-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南地区の第33次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に2度描きによる「U」字形を線刻する。

第33次調査
遺構：SK-133
層位：第3層
土色：—
取上：土-302
No.：33
様式：大和第VI-2様式
高さ：19.4
胴径：12.0

037 記号土器 (曲線：H-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に線刻したものである。南地区の第33次調査の井戸から出土した。ほぼ完形(口縁一部欠損)の壺である。外面はハケ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に「U」字形を線刻する。

第33次調査
遺構：SK-114
層位：第5層
土色：—
取上：土-504
No：476
様式：大和第VI-3様式
高さ：20.5
胴径：21.1



MP-記号-0011

038 記号土器 (曲線：H-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の長頸壺胴部に線刻したものである。西地区中央部の第14次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、胴部上半に逆「U」字形を大きく線刻する。

第14次調査
遺構：SK-106
層位：下層
土色：黒粘
取上：土-21
No：38
様式：大和第VI-3様式
高さ：20.1
胴径：11.1



MP-記号-0022

039 記号土器 (曲線：F-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺の胴部に浮文により表したものである。南地区の第63次調査の井戸から出土した。完形の壺である。外面はハケ後ナゲ調整で仕上げるが、煤が厚く付着する。記号は胴部上半に、平坦な粘土紐を逆「U」字形に貼付するが、右端のみ残存する。

第63次調査
遺構：SK-106
層位：第2層
土色：—
取上：土-210
No：181
様式：大和第VI-3様式
高さ：21.4
胴径：18.7



MP-記号-0097

040 記号土器 (曲線：F-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-4様式の広口壺胴部に浮文により表したものである。北東端の第34次調査の環濠から出土した。口縁部欠損、胴部下半に器面剥落がみられるが、ほぼ完形の盆地東南部産の壺である。外面はナゲ調整で仕上げる。記号は、胴部上半中央に逆「U」字形の粘土紐を貼付する。

第34次調査
遺構：SD-102
層位：第3層
土色：灰粘
取上：—
No：58
様式：大和第VI-4様式
残存高：20.7
胴径：20.5



MP-記号-0019

041



MP- 記号 -0088

### 041 記号土器 (F-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-4様式の広口壺胴部に浮文により表したものである。北東端の第34次調査の環濠から出土した。底部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。胴部中央に穿孔がみられる。外面はナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上半に逆「U」字形の粘土紐を貼付する。

第34次調査
遺構：SD-103
層位：第1層
土色：黒色粘質土
取上：—
No.：65
様式：大和第VI-4様式
復元高：14.2
胴径：13.7

042



MP- 記号 -0038

### 042 記号土器 (曲線：K-C<sub>N</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺頸部に櫛描きしたものである。南地区の第33次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損し、胴部中央の一部に器面剥落があるが、ほぼ完形の壺である。外面はナデ調整で仕上げる。記号は、頸部中央に櫛描波状文を1/3周ほど施文する。

第33次調査
遺構：SK-125
層位：第3層
土色：黒粘
取上：土-344
No.：438
様式：大和第VI-2様式
高さ：22.6
胴径：14.2

043



MP- 記号 -0081

### 043 記号土器 (曲線：K-C<sub>N</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の長頸壺胴部に櫛描きしたものである。南地区の第69次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に櫛描波状文を1/3周ほど施文する。

第69次調査
遺構：SK-1128
層位：第2層
土色：—
取上：土-209
No.：1840
様式：大和第VI-3様式
高さ：16.4
胴径：11.5

044



MP- 記号 -0045

### 044 記号土器 (曲線：H-D<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。口縁部をわずかに欠損するが、ほぼ完形の壺である。記号は、胴部上端に「ノ」字形を小さく線刻し、その後ミガキ調整で仕上げる。

第69次調査
遺構：SD-1109
層位：第6層
土色：—
取上：土-620
No.：848
様式：大和第V-2様式
高さ：23.7
胴径：14.3

045 記号土器 (曲線：H-D<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に線刻したものである。西地区中央部の第14次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。胴部下半から底部には使用による摩滅がみられる。記号は、胴部上端に逆「ノ」字形を深く線刻する。

第14次調査
遺構：SK-101
層位：最下層
土色：黒粘
取上：土-03
No. : 3
様式：大和第VI-3様式
高さ：22.1
胴径：18.4



MP-記号-0005

046 記号土器 (曲線：H-C<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の小形の短頸壺胴部に線刻したものである。西端の第62次調査の環濠から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はハケ調整で仕上げる。記号は、胴部上半に逆「C」字形を2つ重ねたような線刻である。

第62次調査
遺構：SD-101
層位：第2層
土色：—
取上：土-242
No. : 106
様式：大和第VI-3様式
高さ：12.9
胴径：10.4



MP-記号-0078

047 記号土器 (曲線：H-D<sub>3</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に線刻したものである。南地区の第49次調査の井戸から出土した。完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に逆「ノ」字形を3つ重ねる。

第49次調査
遺構：SK-111
層位：第6層
土色：—
取上：土-601
No. : 143
様式：大和第VI-3様式
高さ：19.0
胴径：16.3



MP-記号-0024

048 記号土器 (曲線：H-D''<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の長頸壺頸部に線刻したものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。口頸部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。壺全体に煤が付着する。記号は、頸部中央に右端が収束しない上向きの三日月形を線刻する。

第69次調査
遺構：SD-1109
層位：第6層
土色：—
取上：土-602
No. : 848
様式：大和第V-2様式
高さ：26.8
胴径：14.2



MP-記号-0046



049



MP- 記号 -0089

### 049 記号土器 (曲線：H-D<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。北東端の第34次調査の環濠から出土した。胴部上半に一部器面の剝落がみられるが、完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は胴部上半に、右端が収束しない下向きの三日月形を線刻する。

第34次調査
遺構：SD-103
層位：第2層
土色：黒粘
取上：－
No.：77
様式：大和第VI-2様式
高さ：24.2
胴径：13.8

050



MP- 記号 -0003

### 050 記号土器 (曲線：H-C<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第V-1様式の長頸壺頸部に線刻したものである。北西端の第13次調査の環濠から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、頸部中央に「し」字形を2重に線刻する。

第13次調査
遺構：SD-06B
層位：第4層
土色：灰黒粘
取上：土-401
No.：335
様式：大和第V-1様式
高さ：26.6
胴径：15.5

051



MP- 記号 -0062

### 051 記号土器 (曲線：K-F<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南地区の第69次調査の区画溝から出土した。胴部下半の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、櫛状工具で胴部上半に逆「し」字形を2重に線刻する。

第69次調査
遺構：SD-1102
層位：第2(下)層
土色：－
取上：土-1252
No.：1250
様式：大和第VI-1様式
高さ：25.0
胴径：14.6

052



MP- 記号 -0023

### 052 記号土器 (曲線：H-C<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に線刻したものである。西地区北部の第37次調査の井戸から出土した。胴部中央の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。胴部上半ハケ後、「し」字形を2重に小さく線刻する。記号を除いた部分はミガキ調整で仕上げる。また、口縁端部に2つの刻目を施す。

第37次調査
遺構：SK-2121
層位：第7層
土色：黒灰粘
取上：土-703
No.：416
様式：大和第VI-3様式
高さ：25.9
胴径：23.9

053 記号土器 (曲線：H-C<sub>4</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の小形長頸壺胴部に線刻したものである。西地区中央部の第14次調査の井戸から出土した。完形の壺である。外面はハケ調整で仕上げる。記号は、胴部下半に大きく円形を4方に線刻するが、円形の下側が収束していないため、逆「U」字形ともみられるものである。

第14次調査
遺構：SK-106
層位：中層
土色：黒粘
取上：土-32
No.：49
様式：大和第VI-3様式
高さ：14.6
胴径：10.3



MP-記号-0021

054 記号土器 (曲線：T-G<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の長頸壺の胴部に印刻したものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。ほぼ完形の壺で、外面はハケ後ミガキ調整で仕上げる。記号は対置するように円形の竹管文1つずつを胴部上半に押捺する。

第91次調査
遺構：SD-101B
層位：第6(下)層
土色：—
取上：土-2687
No.：361
様式：大和第V-2様式
高さ：20.0
胴径：12.8



MP-記号-0116

055 記号土器 (曲線：S-G<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に印刻したものである。西地区中央部の第74次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はハケ調整で仕上げる。記号は胴部上端に、指頭の押捺による円形のくぼみ2つを並列させる。

第74次調査
遺構：SK-119
層位：第4層
土色：—
取上：土-401
No.：684
様式：大和第VI-3様式
高さ：23.4
胴径：18.1



MP-記号-0054

056 記号土器 (曲線：T-G<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の長頸壺の胴部に印刻したものである。西地区北部の第93次調査の井戸から出土した。口縁部を欠くが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。胴部下半から底部は使用による摩滅がみられる。記号は、胴部上半に小さめの円形竹管文2つを並列に押捺する。

第93次調査
遺構：SK-1120
層位：第8層
土色：—
取上：土-802
No.：306
様式：大和第V-2様式
残存高：27.6
胴径：19.3



MP-記号-0119

057



MP-記号-0029

### 057 記号土器 (曲線:T-G<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の長頸壺胴部に印刻したものである。西地区中央部の第74次調査の井戸から出土した。完形の壺である。口縁部から胴部上半はハケ、胴部下半はナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に円形竹管文を2つ並列に押捺する。

第74次調査
遺構：SK-119
層位：第6層
土色：—
取上：土-604
No.：708
様式：大和第VI-3様式
高さ：20.9
胴径：11.1

058



MP-記号-0052

### 058 記号土器 (曲線:T-G<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に印刻したものである。西地区中央部の第74次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上端に円形竹管文を2つ並列に押捺する。

第74次調査
遺構：SK-119
層位：第6層
土色：—
取上：土-602
No.：980
様式：大和第VI-3様式
高さ：20.4
胴径：17.6

059



MP-記号-0108

### 059 記号土器 (曲線:T-G<sub>3</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺の頸胴部に印刻したものである。北地区北半の第37次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。胴部下半から底部は使用による摩滅がみられる。記号は円形竹管文を頸部下端に1つ、胴部上端に2つを並列押捺するが、ミガキ調整によって一部が消えている。

第37次調査
遺構：SK-2122
層位：第13層
土色：—
取上：土-1301
No.：944
様式：大和第VI-1様式
高さ：27.5
胴径：16.0

060



MP-記号-0064

### 060 記号土器 (曲線:T-G<sub>4</sub>+T-G<sub>4</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に印刻したものである。西地区中央部の第14次調査の井戸から出土した。口縁部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上半に円形竹管文4つを並列に押捺する。また、同様の記号を反対面にも押捺する。

第14次調査
遺構：SK-101
層位：中層
土色：黒粘
取上：土-05
No.：17
様式：大和第VI-3様式
残存高：16.7
胴径：16.3

061 記号土器 (曲線：T-G'''<sub>5</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に印刻したものである。南地区の第63次調査の井戸から出土した。口縁部・胴部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。胴部下半に煤が、底部内面に炭化物が付着する。記号は胴部上端に、円形竹管文を上下2段に3つと2つ並列に押捺する。

第63次調査
遺構：SK-106
層位：第2層
土色：—
取上：土-208
No.：181
様式：大和第VI-3様式
高さ：21.9
胴径：19.5



MP-記号-0096

062 記号土器 (曲線：T-G'<sub>3</sub>+T-G<sub>3</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺の頸部と胴部に印刻したものである。西地区北部の第79次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面は、記号部分を避けてミガキ調整で仕上げる。記号は、小さめの円形竹管文を頸部中央に縦3つ、胴部上端に横3つ押捺する。

第79次調査
遺構：SK-120
層位：第6層
土色：—
取上：土-603
No.：535
様式：大和第VI-1様式
高さ：23.5
胴径：13.7



MP-記号-0026

063 記号土器 (曲線：T-G'<sub>3</sub>+T-G'<sub>3</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺の頸部に印刻したものである。西地区北部の第79次調査の井戸から出土した。胴部外面に一部剥落があるが、ほぼ完形の壺である。外面は、記号部分を避けてミガキ調整で仕上げる。記号は、頸部中央に縦3つの円形竹管文を2列に配置する。

第79次調査
遺構：SK-120
層位：第5層
土色：—
取上：土-502
No.：527
様式：大和第VI-1様式
高さ：27.5
胴径：13.4



MP-記号-0055

064 記号土器 (曲線：T-G'<sub>5</sub>+T-G'<sub>5</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺の頸部に印刻したものである。南地区の第69次調査の井戸から出土した。胴部下半を欠損する。外面はハケ後ミガキ調整で仕上げ、その後、頸部下半に縦5つの円形竹管文を2列に配置する。

第69次調査
遺構：SK-1103
層位：第4層
土色：—
取上：土-444
No.：1489
様式：大和第VI-2様式
残存高：20.1
胴径：14.5



MP-記号-0080

065



MP-記号-0020

### 065 記号土器 (曲線：F-G<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-1様式の短頸壺の胴部に浮文により表したものである。西地区北部の第37次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。底部は使用による摩滅、煤の付着、胴部中央の穿孔がみられる。記号は、ハケ後円形の粘土粒1つを胴部上端に貼付し、その後ミガキ調整で仕上げる。

第37次調査
遺構：SK-2103
層位：第6層
土色：灰粘
取上：土-601
No.：274
様式：大和第V-1様式
高さ：28.8
胴径：20.3

066



MP-記号-0087

### 066 記号土器 (曲線：F-G<sub>1</sub>+S-J<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-1様式の短頸壺の胴部に浮文により表したものである。南地区の第76次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はタタキ成形後、胴部上端をナデ、胴部下半をケズリ調整で仕上げる。記号は、円形の粘土粒1つを胴部上端に貼付し、その中央を刺突する。

第76次調査
遺構：SK-1108
層位：第3層
土色：—
取上：土-302
No.：411
様式：大和第V-1様式
高さ：29.1
胴径：19.0

067



MP-記号-0117

### 067 記号土器 (曲線：F-G<sub>2</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の短頸壺の胴部に浮文により表したものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。完形の壺で、胴部外面はナデ調整で仕上げる。記号は胴部上端に円形の扁平な粘土粒2つを、少し間隔を空けて並列に貼付する。

第91次調査
遺構：SD-101B
層位：第6(下)層
土色：—
取上：土-2688
No.：361
様式：大和第V-2様式
高さ：21.4
胴径：15.7

068



MP-記号-0094

### 068 記号土器 (曲線：F-G<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺の胴部に浮文により表したものである。南地区の第63次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面はハケ後ナデ調整で仕上げるが、煤が付着する。胴部上半中央にはヘラ描きによる直線文が1周する。記号は、円形の粘土粒1つを胴部上端に貼付する。

第63次調査
遺構：SK-106
層位：第2層
土色：—
取上：土-206
No.：181
様式：大和第VI-3様式
高さ：21.8
胴径：17.7

069 記号土器 (曲線：F-G<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺の胴部に浮文により表したものである。東端の第54次調査の河跡から出土した。完形の壺である。外面はハケ調整で仕上げる。胴部下半に煤の付着がある。記号は胴部上端に、円形の扁平な粘土粒1つを貼付する。

第54次調査
遺構：SR-102A
層位：第3層
土色：—
取上：土-301
No.：11
様式：大和第VI-3様式
高さ：24.9
胴径：19.9



MP-記号-0032

070 記号土器 (点：H-J<sub>5</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺口縁部に刻んだものである。西地区北部の第37次調査の区画溝から出土した。完形の壺である。外面胴部上半はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、口縁端部にヘラ押捺による刻目を5つ付ける。

第37次調査
遺構：SD-2101
層位：第4層
土色：—
取上：土-402
No.：42
様式：大和第VI-2様式
高さ：24.5
胴径：14.7



MP-記号-0107

071 記号土器 (点：S-J<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺の胴部に刻んだものである。西地区北部の第37次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形の壺である。胴部上半はハケ調整で仕上げる。底部は使用による摩滅がみられる。記号は、頸胴部界に近い胴部上端にヘラによる刺突文を7つ付ける。

第37次調査
遺構：SK-2122
層位：第25層
土色：—
取上：土-2503
No.：1010
様式：大和第VI-1様式
高さ：28.0
胴径：15.2



MP-記号-0109

072 記号土器 (点：S-J<sub>4</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺の胴部に刻んだものである。北地区の第48次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形の壺である。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、胴部上端にヘラ先による刺突文を4つ付けるが、目立たない。

第48次調査
遺構：SK-1114
層位：第3層
土色：—
取上：—
No.：408
様式：大和第VI-2様式
高さ：26.0
胴径：16.2



MP-記号-0110



**073 記号土器 (直線・曲線の組合せ: H-D'<sub>1</sub>+H-B''<sub>2</sub>)**

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺の頸部に線刻されたものである。南端の第33次調査の環濠から出土した。底部と胴部の一部を欠損する。胴部上端に櫛描波状文を巡らす。頸部はミガキ調整後、記号を描く。頸部中央の対面2ヶ所に、三日月形を半分にした形の記号に三叉形の記号が突き抜けるように細描きされている。

第33次調査
遺構: SD-109
層位: 第4(下)層
土色: ー
取上: 土-401
No.: 253
様式: 大和第VI-1様式
復元高: 29.1
胴径: 17.0



**074 記号土器 (直線・曲線の組合せ: H-B''<sub>2</sub>+T-G'''<sub>3</sub>)**

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺頸部に線刻、胴部に印刻したものである。南地区の第33次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。外面頸部はハケ、胴部はナデ調整で仕上げる。記号は頸部下端に下向きの三叉形、その下の胴部上端に円形竹管文3つを2(上)・1(下)の2段に押捺する。

第33次調査
遺構: SK-125
層位: 第6層
土色: 黒粘ソフト
取上: 土-603
No.: 506
様式: 大和第VI-2様式
高さ: 27.0
胴径: 16.5



**075 記号土器 (直線・曲線の組合せ: T-B''<sub>2</sub>)**

本記号土器は、大和第VI-1様式の壺の胴部に線刻・印刻したものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。胴部の約半分が残存する。胴部上半の外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は円形の竹管文を横方向に不連続に押捺するとともに、竹管文間に6方向に放射する線を組合せる。

第69次調査
遺構: SD-1109
層位: 第6層
土色: ー
取上: 土-613
No.: 848
様式: 大和第VI-1様式
残存高: 16.2
胴径: 16.9



**076 記号土器 (直線・曲線の組合せ: H-D'<sub>1</sub>+H-B''<sub>1</sub>)**

本記号土器は、大和第VI-3様式の長頸壺の胴部に線刻したものである。南端の第33次調査の環濠から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。胴部に煤の付着がみられる。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は胴部中央に曲線・直線の組合せで、「介」字状に線刻する。

第33次調査
遺構: SD-109
層位: 第5層
土色: 黒粘
取上: 土-505
No.: 275
様式: 大和第VI-3様式
高さ: 17.3
胴径: 11.0

077 記号土器 (直線・曲線の組合せ：H-C<sub>1</sub>+H-A<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口長頸壺胴部に線刻したものである。南地区の第63次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。胴部下半に煤の付着がみられる。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は、胴部上半に「U」字形とその中央に縦線1本を挿入するものである。

第63次調査
遺構：SK-106
層位：第2層
土色：—
取上：土-204
No：181
様式：大和第VI-3様式
高さ：32.4
胴径：17.8



MP-記号-0093

078 記号土器 (直線・曲線の組合せ：H-E'<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に線刻したものである。南地区の第63次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺で、頸胴部界と胴部中央に穿孔がある。胴部下半に煤の付着がみられる。外面はミガキ調整で仕上げる。記号は胴部上半に、「U」字形と「U」の上部分を塞ぐような横線1本を組み合わせたものである。

第63次調査
遺構：SK-106
層位：第2層
土色：—
取上：土-203
No：181
様式：大和第VI-3様式
高さ：24.1
胴径：19.6



MP-記号-0092

079 記号土器 (直線・曲線の組合せ：H-C<sub>1</sub>+H-A'<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の長頸壺頸部に線刻したものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。ほぼ完形の壺である。外面はナデ後ミガキ調整で仕上げる。記号は、頸部中央にやや歪な横長の逆「U」字形を描き、その下端を横線1本で塞ぐ。また、同様の記号を反対面にも描く。

第91次調査
遺構：SD-101B
層位：第6(下)層
土色：—
取上：土-2683
No：361
様式：大和第V-2様式
高さ：21.4
胴径：15.8



反対面

MP-記号-0115

080 記号土器 (直線・曲線の組合せ：H-B''<sub>3</sub>+H-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺の胴部に線刻したものである。西端の第62次調査の環濠から出土した。ほぼ完形の壺(胴部下半小欠)である。外面はナデ調整で仕上げる。記号は胴部上半に逆「V」字形を3つ並列させたものの下に「U」字形を連結させたものである。

第62次調査
遺構：SD-101
層位：第2層
土色：—
取上：土-211
No：106
様式：大和第VI-2様式
高さ：23.4
胴径：15.8



MP-記号-0073



081



MP- 記号-0114

### 081 記号土器 (直線・曲線の組合せ: H-C<sub>1</sub>+H-B<sub>5</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。口頸部の一部を欠くが、全容のわかる壺である。外面はナデ調整で仕上げる。記号は、胴部上半に横長の逆「U」字形を描き、その内部に5本の斜線を充填する。

第91次調査
遺構: SD-101B
層位: 第6(下)層
土色: ー
取上: 土-2670
No.: 361
様式: 大和第V-2様式
高さ: 17.6
胴径: 13.3

082



MP- 記号-0120

### 082 記号土器 (直線・曲線の組合せ: H-C<sub>2</sub>+H-B<sub>8</sub>)

本記号土器は、大和第V-1様式の小形壺の胴部に線刻したものである。南東端の第40次調査の環濠から出土した。完形の壺で、外面はナデ調整で仕上げる。記号は胴部上端から下端の左下方向に細い三日月状を描き、その円弧外側に放射状の斜線8本を描く。

第40次調査
遺構: SD-101
層位: 第7層
土色: ー
取上: 土-702
No.: 273
様式: 大和第V-1様式
高さ: 7.9
胴径: 7.5

083



MP- 記号-0061

### 083 記号土器 (曲線の組合せ: F-G<sub>1</sub>+F-C<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-1様式の短頸壺の胴部に浮文により表したものである。南地区の第65次調査の井戸から出土した。頸部から胴部の破片である。外面はナデ調整で仕上げる。記号は円形の平坦な粘土粒1つとその右に「U」字形の粘土紐を組合せて、胴部上端に貼付する。

第65次調査
遺構: SK-134
層位: 第2層
土色: ー
取上: 土-217
No.: 646
様式: 大和第V-1様式
残存長: 9.8
残存幅: 14.3

084



MP- 記号-0007

### 084 記号土器 (直線・曲線の組合せ: H-G<sub>1</sub>+H-A<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺胴部に線刻したものである。南地区の第33次調査の井戸から出土した。口縁部を小欠するが、ほぼ完形の壺である。外面はナデ調整で仕上げる。記号は太描きで、胴部上半に縦方向の楕円形の中に縦線1本を挿入するものである。

第33次調査
遺構: SK-133
層位: 第3層
土色: ー
取上: 土-303
No.: 510
様式: 大和第VI-2様式
高さ: 21.1
胴径: 11.9

085 記号土器 (直線・曲線の組合せ: H-G<sub>1</sub>'<sub>1</sub>+H-A<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の長頸壺頸部に線刻したものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。ほぼ完形の壺である。記号は頸部下端に雫状を描き、その内部に縦線1本を充填するが、ミガキが及ばなかったため残存したようである。この記号の左上にも同様な記号2つの線刻があるが、ミガキによって消されている。

第91次調査
遺構: SD-101B
層位: 第6層
土色: -
取上: 土-672
No.: 298
様式: 大和第V-2様式
高さ: 27.6
胴径: 15.8



MP-記号-0112

086 記号土器 (直線・曲線の組合せ: H-D<sub>1</sub>+R-不明)

本記号土器は、大和第VI-1様式の長頸壺の胴部に線刻・赤彩したものである。南端の第69次調査の環濠から出土した。口縁部・底部の一部を欠損する。胴部上半の外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は胴部上端に、ヘラで横方向の「ノ」字形(左)、赤彩で「H」字形(右)に描くものである。

第69次調査
遺構: SD-1109
層位: 第5(下)層
土色: -
取上: 土-7555
No.: 721
様式: 大和第VI-1様式
高さ: 20.0
胴径: 11.9



MP-記号-0048

087 記号土器 (直線の組合せ: H-A<sub>4</sub>+R-A<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第VI-2様式の長頸壺の胴部に線刻・赤彩したものである。北東端の第34次調査の環濠から出土した。口頸部の一部を欠損するが、ほぼ全形のわかる壺である。全体に煤の付着がみられる。胴部はミガキ調整で仕上げる。記号は胴部上端に、ヘラで短い縦線4本を、その右に赤彩で縦線1本を組合せたものである。

第34次調査
遺構: SD-103
層位: 第2層
土色: 黒粘
取上: -
No.: 120
様式: 大和第VI-2様式
高さ: 22.5
胴径: 13.7



MP-記号-0090

088 記号土器 (直線・曲線の組合せ: H-B<sub>1</sub>'<sub>1</sub>+H-B<sub>1</sub>'<sub>1</sub>+T-G<sub>4</sub>)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺に印刻・線刻したものである。西地区中央部の第14次調査の井戸から出土した。口縁部の一部を欠損する。記号は、円形竹管文を口縁部内面に6つ以上、胴部上端の3ヶ所に4つ(左)・1つ(中)・2つ(右)を並列で押捺、頸部にはヘラ描きで山形文2つに斜線をつないだものが描かれている。

第14次調査
遺構: SK-102
層位: 最下層
土色: 黒粘
取上: 土-05
No.: 24
様式: 大和第VI-3様式
高さ: 22.4
胴径: 20.0



MP-記号-0100

反対面の竹管文

089 記号土器 (直線・曲線の組合せ：H-E<sub>1</sub>+R-A<sub>1</sub>)

089



MP-記号-0066

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺の胴部に線刻・赤彩したものである。西地区中央部の第14次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺で、底部は使用による摩滅がみられる。胴部上半はナデ調整で仕上げる。記号は胴部上端の3分割のうちの2方向に、ヘラで逆「L」字形(左)、赤彩で縦線1本(右)を組合せたものである。

第14次調査
遺構：SK-106
層位：下層
土色：黒粘
取上：土-i
No. : 37
様式：大和第VI-3様式
高さ：19.3
胴径：17.5

090 記号土器 (直線・曲線の組合せ：R-A'<sub>1</sub>+H-A<sub>1</sub>+H-C<sub>1</sub>+T-G<sub>2</sub>+H- 不明)

090



MP-記号-0079

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺の胴部に赤彩・線刻・押捺したものである。西端の第62次調査の環濠から出土した。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。胴部上半はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は、3つの手法で胴部上端の4ヶ所と底部付近に付けられている。左から横線の赤彩、逆「U」字形のヘラ描き、並列する2個の円形竹管文状のヘラ描き、崩れた逆「S」字状のヘラ描き(抽象化した龍?)である。底部付近の記号は縦線1本を描く。

第62次調査
遺構：SD-101
層位：第1(下)層
土色：-
取上：土-1154
No. : 94
様式：大和第VI-3様式
高さ：15.8
胴径：12.8

## 091 記号土器 (直線・曲線の組合せ：H-不明)

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺胴部に線刻したものである。南地区の第65次調査の方形周溝墓の北周溝から出土した。口縁部・胴部の一部を欠損する。外面はタタキ後ハケ調整で仕上げる。記号は胴部上半に、左から変形した逆「U」字形の中央に縦線、逆「L」字形のような鉤状、「U」字形の中央に縦線の記号を大きく並列させる。

第65次調査
遺構：SD-101N
層位：第1層
土色：—
取上：土-108
No：103
様式：大和第VI-3様式
高さ：16.1
胴径：13.6



MP-記号-0099

092 記号土器 (直線と曲線の組合せ：S-J<sub>5</sub>・H-B<sub>2</sub>+B<sub>1</sub>)

本記号土器は、大和第V-2様式の長頸壺胴部に印刻・線刻したものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。口頸部・胴部下端の各一部を欠く。外面はナデ調整で仕上げる。記号は胴部上端にヘラによる刺突文5つを付け、その下に左下がりの斜線2本を描き、その逆方向の斜線1本を交差させる。

第91次調査
遺構：SD-101B
層位：第6(下)層
土色：—
取上：土-1674
No：298
様式：大和第V-2様式
復元高：27.3
胴径：17.7



MP-記号-0113

093 記号土器 (直線・曲線の組合せ：H-C<sub>2</sub>+A<sub>6</sub>+不明+不明)

MP-記号-0105

本記号土器は、大和第VI-3様式の広口壺の胴部に線刻したものである。北東端の第24次調査の環濠から出土した。口縁部・胴部の一部を欠損するが、ほぼ完形の壺である。胴部上半はハケ後ナデ調整で仕上げる。記号は胴部上半の約半面に細描きのヘラで6記号(うち3記号は組合せ)が記されているが、そのうち3つの記号の一部が消されている。記号は2本の弧線、縦線6本、「R」字状のもの、渦文を変形させたようなもの(渦の両側に横線4本と弧線・直線を組合せる)である。

第24次調査
遺構：SD-107
層位：第3層
土色：黒粘
取上：—
No：116
様式：大和第VI-3様式
高さ：19.8
胴径：16.0

001



MP-文様-0012

### 001 土器文様 (木葉文)

本文様(彩文)は、大和第 I-1 様式の広口壺蓋の外面に彩色で描かれたものである。西地区の第 82 次調査の土坑から出土した。裾部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。笠形の蓋で、天井部には穿孔による孔をもつ。外面には天井部の孔から 3 方向に有軸の木葉文を平塗りで表現する。また、裾部には内向する鋸歯文らしき彩色がある。

第 82 次調査
遺構：SK-217
層位：第 2 層
土色：灰黒色粘砂
取上：－
No.：270
様式：大和第 I-1 様式
高さ：3.6
裾径：9.7

002



MP-文様-0054

### 002 土器文様 (木葉文)

本文様(彩文)は、大和第 I-1 様式の広口壺の蓋外面に描かれたものである。西地区の第 82 次調査の土坑から出土した。壺蓋の 1/4 程度を残す破片である。外面に有軸の木葉文を平塗りで表現する。

第 82 次調査
遺構：SK-206
層位：第 3 層
土色：灰黒粘
取上：－
No.：279
様式：大和第 I-1 様式
残存高：2.4
残存幅：6.1

003



MP-文様-0024

### 003 土器文様 (木葉文)

本文様(彩文)は、大和第 I-1 様式の広口壺の胴部中央に彩色で表現されたものである。西地区中央部の第 38 次調査の土坑から出土した。胴部の小片である。黒色物塗布の器面に赤彩による上下 2 本の文様帯の区画線を設け、木葉文の単位となる縦線を引く。その後、上下対称の弧形を塗りつぶして木葉形とする。

第 38 次調査
遺構：SK-207
層位：第 1 層
土色：灰色砂
取上：－
No.：151
様式：大和第 I-1 様式
残存長：6.9
残存幅：7.2

004



MP-文様-0035

### 004 土器文様 (木葉文?)

本文様(彩文)は、大和第 I-1 様式のやや大形の広口壺の胴部中央に彩色に表現されたものである。西地区北部の第 37 次調査の河跡から出土した。胴部の小片である。黒色物塗布の器面に赤彩で平塗りしている。左辺と下辺を塗り残し区画線とし、その内部に木葉状に見える塗り残しがあるが、全体は不明である。

第 37 次調査
遺構：SX-4201
層位：第 2 層
土色：灰黒色砂質土
取上：－
No.：847
様式：大和第 I-1 様式
残存長：7.8
残存幅：6.1

## 005 土器文様 (木葉文)

本文様は、大和第 I-1 様式の広口壺蓋の外面にへら描きで描かれたものである。北端の第 17 次調査の河跡から出土した。笠形の蓋で裾部が欠損する。天井部に 2 重、裾部に 2 重? のへら描同心円文を描き、その間に 4 方向の有軸木葉文を描く。木葉文は 3 条の軸に 3~4 条の弧線で構成される。裾部に重弧文(半裁の木葉文)を充填する。

第 17 次調査
遺構：SX-01
層位：—
土色：黒色粘砂
取上：—
No. : 14
様式：大和第 I-1 様式
残存高：3.1
残存長：7.5



MP-文様-0008

## 006 土器文様 (木葉文)

本文様は、大和第 I-1 様式の広口壺蓋の外面にへら描きで描かれたものである。中央区の第 53 次調査の土坑から出土した。ほぼ完形である。天井部に 2 重、裾部に 3 重のへら描きの同心円文を描き、その間の 4 方向に有軸の木葉文を描く。ただし、木葉文の両端は収束しておらず、十字文とみなすこともできる。

第 53 次調査
遺構：SX-201
層位：—
土色：灰黒粘
取上：—
No. : 431
様式：大和第 I-1 様式
残存高：4.2
裾 径：12.2



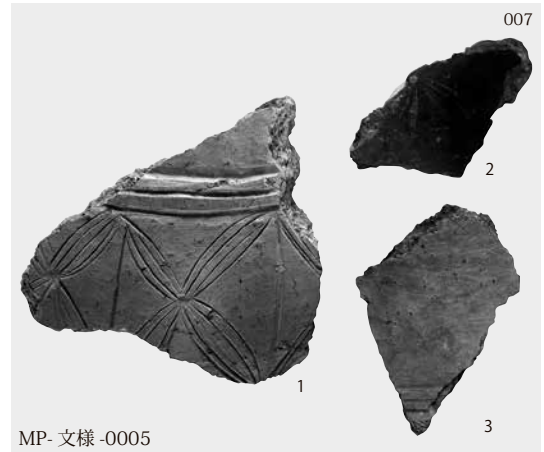
MP-文様-0028

## 007 土器文様 (木葉文)

本文様は、大和第 I-1 様式の広口壺の胴部中央にへら描きされたものである。西地区の第 14 次調査の土坑から出土した。胴部の 3 小破片が残る。段を有する壺で、2 条のへら描直線文間に無軸の木葉文を描く。木葉文の交点には珠文が付けられている。

007-1

第 14 次調査
遺構：SK-201
層位：下層
土色：—
取上：—
No. : 66
様式：大和第 I-1 様式
残存長：5.9
残存幅：6.1



MP-文様-0005

## 008 土器文様 (木葉文)

本文様は、大和第 I-1 様式の小形の広口壺胴部中央にへら描きされたものである。南地区の第 44 次調査の暗黄灰色粘質土層から出土した。胴部の小破片で、2 条の太いへら描直線文下に無軸の木葉文を描く。

第 44 次調査
遺構：—
層位：—
土色：暗黄灰色粘質土
取上：その 1
No. : 367
様式：大和第 I-1 様式
残存長：4.1
残存幅：5.2



MP-文様-0047

009



MP-文様-0082

### 009 土器文様 (木葉文)

本文様は、大和第Ⅰ-1様式の広口壺胴部中央にヘラ描きされたものである。西地区北部の第37次調査の暗黄灰色粘質土層から出土した。胴部の破片で、3条のヘラ描直線文下に有軸の木葉文を描く。木葉文の線刻は、浅く弱い。

第37次調査
遺構：—
層位：—
土色：暗黄灰色粘質土
取上：—
No.：731
様式：大和第Ⅰ-1様式
残存長：5.6
残存幅：9.4

010



MP-文様-0052

### 010 土器文様 (重弧文)

本文様は、大和第Ⅰ-2様式の小形の広口壺胴部中央にヘラ描きされたものである。西地区中央部の第20次調査の土坑から出土した。口縁部と胴部の一部を欠損する。ヘラミガキ後に直線文を頸部に3条、胴部に5条、胴部の直線文下に上向きの重弧文(弧線3)を描くが、線刻は浅く弱い。外面には黒褐色物の塗布がみられる。

第20次調査
遺構：SK-217
層位：第2層
土色：暗青灰色粘質土
取上：—
No.：671
様式：大和第Ⅰ-2様式
残存高：10.3
残存幅：11.4

011



MP-文様-0068

### 011 土器文様 (山形文)

本文様は、大和第Ⅰ-1様式の広口壺胴部にヘラ描きされたものである。西地区中央部の第19次調査の土坑から出土した。口縁部と胴部の一部が残存する。口頸部と頸胴部界に段をもち、胴部上端には2条のヘラ描直線文を入れる。頸部に2本を1単位として山形文を右から左へと描く。外面には黒褐色物の塗布がみられる。

第19次調査
遺構：SK-1103
層位：第6層
土色：黒灰粘
取上：土-602
No.：868
様式：大和第Ⅰ-1様式
口径：14.5
残存高：12.3

012



MP-文様-0088

### 012 土器文様 (羽状文)

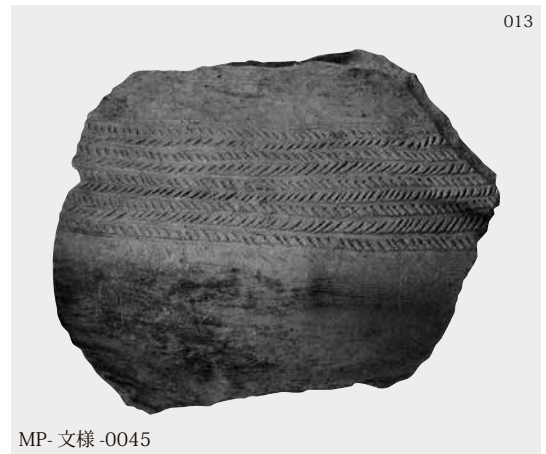
本文様は、大和第Ⅰ様式の広口壺胴部にヘラ描きされたものである。北地区の第26次調査の黒褐色土層から出土した。胴部の小破片である。頸胴部界に段をもち、3条のヘラ描直線文間に4本を1単位として羽状文を2段に重ね、これを互いに向かい合わせにして全体を構成するようである。

第26次調査
遺構：—
層位：第Ⅲ層
土色：黒褐色土
取上：—
No.：90
様式：大和第Ⅰ様式
残存長：5.6
残存幅：5.4

## 013 土器文様（綾杉文）

本文様は、大和第Ⅱ-1様式の広口壺胴部にヘラ描きされたものである。西地区南部の第96次調査の区画溝から出土した。胴部の小破片である。胴部に10条のヘラ描直線文を引き、その直線文間を互に向かい合わせになるように櫛状工具による刺突で綾杉文とするものである。

第96次調査
遺構：SD-101
層位：第6層
土色：黒色粘砂（植物混）
取上：－
No：102
様式：大和第Ⅱ-1様式
残存長：10.5
残存幅：13.9



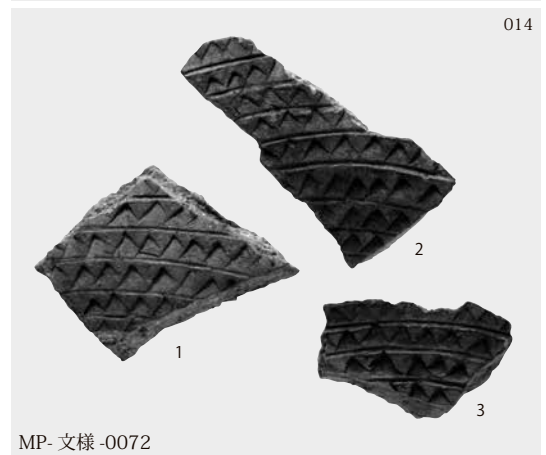
MP-文様-0045

013

## 014 土器文様（三角刺突文）

本文様は、大和第Ⅱ様式の広口長頸壺口縁部内面にヘラの刺突によってつけられたものである。西地区中央部の第14・22次調査の中世大溝や土坑などから出土した。口縁部の3小破片が残存する。口縁部内面に約1cm間隔にヘラ描直線文を巡らせ、その直線文間に上向きの三角刺突文を9段以上押捺する。

014-2
第22次調査
遺構：中世大溝
層位：－
土色：黒灰色砂質土
取上：－
No：178
様式：大和第Ⅱ様式
残存長：7.3
残存幅：8.8



MP-文様-0072

014

## 015 土器文様（放射状文 + 円形刺突文）

本文様は、大和第Ⅰ-1様式の壺蓋にヘラ描きと刺突によってつけられたものである。遺跡北端の第25次調査の溝から出土した。完形品である。扁平な円板状で、中央の摘み部は細長く突出させ、紐孔を2孔あける。3～5本を一単位とした直線文を中央から7方向に放射状に引き、その間に8～12段の円形刺突文を挿入する。

第25次調査
遺構：SD-201
層位：第3層
土色：灰褐色砂質土
取上：－
No：7
様式：大和第Ⅰ-1様式
高さ：2.9
裾径：10.6



MP-文様-0015

015

## 016 土器文様（工字文）

本文様は、大和第Ⅰ-2様式の鉢にヘラ描きされたものである。西地区中央部の第20次調査の木器貯蔵穴から出土した。口縁部と胴部を半欠する。10条のヘラ描直線文の施文後、上下2段（4条一単位）、違って4方向に縦の区画線を入れ工字文とするものである。外面には黒褐色物が塗布され、直線文内部に赤彩が残る。

第20次調査
遺構：SK-215
層位：第2層
土色：灰黒粘
取上：－
No：681
様式：大和第Ⅰ-2様式
復元口径：16.0
残存高：8.4



MP-文様-0011

016



017



MP-文様-0090

### 017 土器文様 (工字文)

本文様は、大和第Ⅱ-2様式の広口長頸壺にヘラ描きされたものである。南地区の第33次調査の区画溝から出土した。頸部の破片で、口縁部は欠損後、破面を研磨している。頸部には18条のヘラ描直線文を巡らせた後、4条一単位の縦の区画線を各2段、4方向に置いて工字文とするものである。外面には黒褐色物が塗布される。

第33次調査
遺構：SD-202
層位：第5層
土色：灰黒粘
取上：—
No.：1057
様式：大和第Ⅱ-2様式
残存高：24.4
残存幅：27.1

018



MP-文様-0013

### 018 土器文様 (流水文)

本文様は、大和第Ⅱ-2様式の鉢に櫛描きで描かれたものである。北地区の第23次調査の土坑から出土した。口縁部から底部の約半分を欠損する。胴部が直線的な鉢で、底部は外側に突出し端部に刻目を入れる。口縁部から底部まで櫛描直線文を9帯巡らした後、上下2帯を4方向1帯ずつずらして連結させる縦型流水文とする。

第23次調査
遺構：SK-123
層位：第4層
土色：炭灰層
取上：土-401
No.：340
様式：大和第Ⅱ-2様式
復元口径：18.0
高さ：13.1

019



MP-文様-0044

### 019 土器文様 (流水文)

本文様は、大和第Ⅲ様式の壺蓋に櫛描きで描かれたものである。南地区の第76次調査の区画溝の最上層から出土した。裾部の一部が欠損する。笠形の蓋で、小さな摘み部がつく。2孔一対の紐孔を裾部に有する。2段の横型流水文で、流水文は3帯の櫛描文を2区画で横型としている。下段の流水文は2帯の櫛描文しか描かれていない。

第76次調査
遺構：—
層位：東壁Sec.第Ⅳ層
土色：—
取上：—
No.：435
様式：大和第Ⅲ様式
高さ：3.0
裾径：9.8

020



MP-文様-0029

### 020 土器文様 (流水文)

本文様は、大和第Ⅲ-1様式の水差形土器に櫛描きで描かれたものである。南地区の第61次調査の井戸から出土した。完形品(胴部下半に剝離痕)である。頸部から胴部上端にかけて簾状文3帯、胴部中央に3分割された縦型流水文を描き、その残部に方画文を充填する。底部には使用による摩滅痕がみられる。

第61次調査
遺構：SK-142
層位：第4層
土色：黒灰粘(砂混)
取上：土-401
No.：1578
様式：大和第Ⅲ-1様式
高さ：13.2
胴径：14.0

## 021 土器文様 (流水文)

本文様は、大和第三-3様式の小形の水差形土器に櫛描きで描かれたものである。西地区北部の第37次調査の井戸から出土した。把手を欠損するが、ほぼ完形である。外面に煤が付着する。口縁部には櫛描刺突文、頸胴部界には直線文と簾状文を巡らす。胴部には3方向に割り付けられた「工」状の横型流水文を描く。

第37次調査
遺構：SK-2130
層位：第10層
土色：黒灰粘
取上：土-1002
No：946
様式：大和第三-3様式
高さ：9.7
胴径：9.0



MP-文様-0021

021

## 022 土器文様 (流水文)



MP-文様-0009



022

本文様は、大和第三-3様式の細頸壺に櫛描きで描かれたものである。北西端の第19次調査の環濠から出土した。口縁部・頸部・胴部の一部と底部を欠損する。口縁部には2段の櫛描刺突文、頸部に直線文、頸胴部界に簾状文を巡らす。胴部には3段にわたって横型流水文を描く。

第19次調査
遺構：SD-204
層位：第5-a層
土色：黒粘
取上：—
No：806
様式：大和第三-3様式
復元高：37.8
復元胴径：26.3

## 023 土器文様 (流水文)

本文様は、大和第三-3様式の広口壺に櫛描きで描かれたものである。中央区の第50次調査の区画溝から出土した。口縁部・頸部・胴部の一部を欠損する。口縁部上面には櫛描扇形文、端部に波状文、頸部に直線文を巡らす。胴部には2段の横型流水文と最下段に扇形文を描く。流水文は、4区画に割り付けられている。

第50次調査
遺構：SD-106
層位：第3層
土色：黒灰色砂質土
取上：—
No：297
様式：大和第三-3様式
高さ：18.0
胴径：16.7

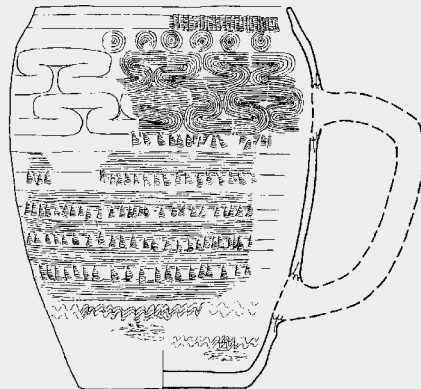


MP-文様-0031

023

## 024 土器文様（流水文）

024



MP-文様-0016

本文様は、大和第Ⅲ-3様式の把手付鉢に櫛描きで描かれたものである。南地区の第33次調査の木器貯蔵穴から出土した。口縁部と胴部の一部、把手を欠損する。本鉢の形態は、口縁部の内湾や縦長の胴部の形態からこの時期の大形細頸壺の口頸部を模倣したものと考えられる。文様は、口縁部上端から櫛描簾状文、円形文、横型流水文を描き、さらにその下は5帯の直線文間に扇形文、最下段に波状文を巡らすものである。流水文は2段で、回転の間隔は6cm程度と短く、割り付けは不明である。

第33次調査
遺構：SK-124
層位：第7層
土色：灰黒粘
取上：—
No.：793
様式：大和第Ⅲ-3様式
高さ：22.0
胴径：17.6

025



MP-文様-0051

## 025 土器文様（扇形文）

本文様は、大和第Ⅲ-1様式の壺蓋の外面に櫛描きで描かれたものである。北地区の第51次調査の区画溝から出土した。ほぼ完形(裾部小欠)の蓋である。扁平な笠形で、天井部は小さな平坦面を有する。黒褐色を呈し、2孔一対の紐孔を有する。櫛描きの扇形文は、天井部の中心部から2段に描き、内側は7、外側は12を割り付ける。

第51次調査
遺構：SD-103
層位：第4層
土色：植物層
取上：その1
No.：88
様式：大和第Ⅲ-1様式
高さ：2.1
裾径：8.4

026



MP-文様-0010

## 026 土器文様（鋸歯文）

本文様は、大和第Ⅲ-3様式の壺蓋にへら描きされたものである。南地区の第76次調査の土坑から出土した。裾部が欠損する。笠形の蓋で、摘み部は高台状に突出させ、刻目を入れる。3条のへら描直線文間に2段の内向する鋸歯文を描く。上段に8、下段に14の鋸歯文を描き、最終的にその内部を右下がりの斜線で充填する。

第76次調査
遺構：SK-1115
層位：第1層
土色：灰黒粘(炭灰)
取上：—
No.：343
様式：大和第Ⅲ-3様式
残存高：4.4
残存裾径：10.2

## 027 土器文様 (鋸歯文)

本文様は、大和第三-3様式の台付鉢の脚台にヘラ描きされたものである。北地区の第51次調査の区画溝から出土した。脚台部のみ残存する。鋭利なヘラ状工具により裾部に細長い三角状の切れ込みを入れ鋸歯文風とする。また、その上部のヘラ描直線文間には内向する鋸歯文13を巡らす。鋸歯文の内部は右下がりの斜線を充填する。

第51次調査
遺構：SD-103
層位：第3層
土色：黒粘
取上：土-305
No.：58
様式：大和第三-3様式
残存高：6.8
裾径：10.5



MP-文様-0027

## 028 土器文様 (鋸歯文)

本文様は、大和第四-1様式の高坏脚部にヘラ描きされたものである。北西端の第13次調査の環濠から出土した。脚部のみ残存する。脚柱部の上・中・下段に3条のヘラ描直線文を巡らせ、その間の4方向に長方形の透孔をいれる。裾部にはヘラによる刺突文を巡らす。その上部には斜格文を充填した鋸歯文12と斜格文帯を描く。

第13次調査
遺構：SD-06C
層位：第6層
土色：砂質土
取上：土-629
No.：346
様式：大和第四-1様式
残存高：14.8
裾径：17.2



MP-文様-0004

## 029 土器文様 (双頭渦文)



MP-文様-0026



029

本文様は、大和第四-1様式の短頸壺胴部に印刻されたものである。北地区の第48次調査の土器溜まりから出土した。口頸部と胴部の一部を欠損する。頸胴部界にはハケ状工具による刺突文、胴部上半は双頭渦文を刻んだタタキ板による成形、その後ハケ調整によって胴部中央部はその一部が消されている。また、胴部下半はケズリによって仕上げられている。双頭渦文は2～3段の重複があり、単位の把握は困難であるが、1つの渦巻きの直径は3.2cmほどである。したがって、タタキ原体の幅はその倍の7cmほどであろう。

第48次調査
遺構：SX-1102
層位：—
土色：—
取上：—
No.：85
様式：大和第四-1様式
残存高：31.0
胴径：25.3

030 土器文様 (渦文)

030



MP-文様-0020

本文様は、大和第Ⅳ-2様式の短頸壺胴部に印刻されたものである。南地区の第52次調査の河跡から出土した。頸部と胴部の一部が残存する。頸部界にはハケ状工具による刺突文を巡らす。胴部上半はハケ調整、下半はケズリによって仕上げる。逆「S」字状の両端に渦をもつ文様を一単位として刻んだ原体を胴部上端では縦方向に、その下位では横方向に3段ほど印刻するものである。ただし、横方向の印刻はハケによって消され、軸部分のみとなりほとんど見えない。

第52次調査
遺構：SX-101
層位：第1(下)層
土色：茶灰色粘質土
取上：—
No.：14
様式：大和第Ⅳ-2様式
残存高：37.8
残存胴径：26.3

031



MP-文様-0065

031 土器文様 (双頭渦文)

本文様は、大和第Ⅳ-2様式の短頸壺胴部に印刻されたものである。南地区の第65次調査の土坑から出土した。胴部片のみ残存する。胴部上半に双頭渦文を2～3段重複させながら印刻するもので、単位の把握は困難であるが、1つの渦巻き径は3.5cmほどである。したがって、タタキ原体の幅はその倍の8cmほどであろう。

031-1

第65次調査
遺構：SK-109
層位：第1(下)層
土色：暗灰褐色土
取上：—
No.：373
様式：大和第Ⅳ-2様式
残存長：10.2
残存幅：8.2

032



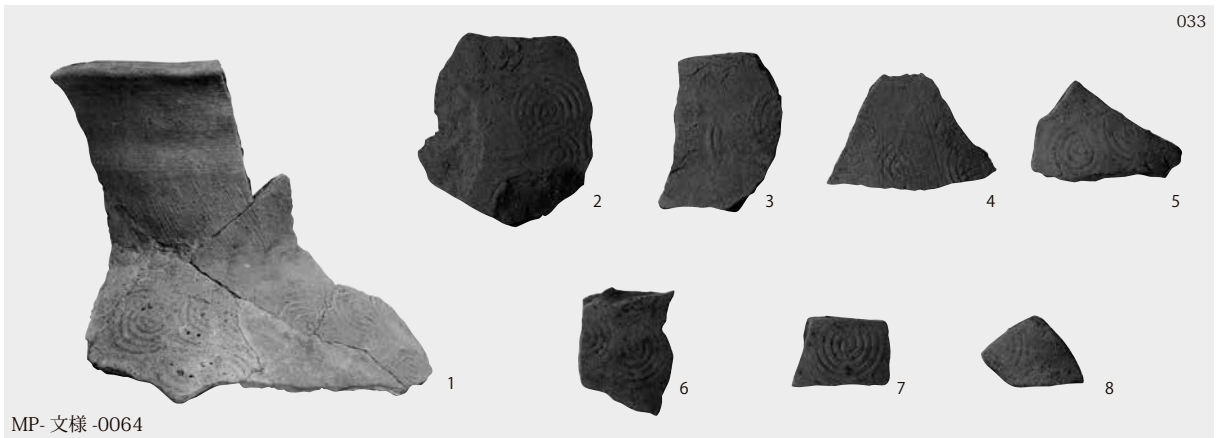
MP-文様-0049

032 土器文様 (渦文)

本文様は、大和第Ⅴ様式の短頸壺胴部に印刻されたものである。南地区の第76次調査の環濠などから出土した。胴部片のみ残存する。胴部上端に円形竹管文を巡らす。その下に右斜めを向く渦巻文1つを一単位として刻んだ原体を印刻して巡らすものである。

第76次調査
遺構：SD-1107
層位：—
土色：灰黒粘
取上：—
No.：221
様式：大和第Ⅴ様式
残存長：7.5
残存幅：11.0

## 033 土器文様（双頭渦文）



MP-文様-0064

033

本文様は、大和第IV-2様式の短頸壺胴部に印刻されたものである。南地区の第33次調査の井戸、第69次調査の区画溝などから出土した。頸胴部界にはハケ状工具による刺突文を巡らす。胴部下半はケズリによって仕上げる。双頭渦文は、胴部上半に2～3段右回りに印刻されているが、ハケ調整によって一部消されている。

033-1

第33次調査
遺構：SK-159
層位：第2層
土色：炭灰層
取上：—
No.：743
様式：大和第IV-2様式
残存高：12.6
残存幅：14.5

## 034 土器文様（方画文）



MP-文様-0042

034

本文様は、大和第IV様式の壺と思われる胴部に印刻されたものである。北西端の第19次調査の環濠から出土した。胴部下半が残存する。胴部の上半はタタキがハケ調整によって消されており明確でないが、下半は方画文タタキが残っている。重複により方画文の全体が不明であるが、おおよそ4×5cmで9つの長方形の囲みで構成されている。

第19次調査
遺構：SD-204
層位：第5層
土色：灰黒色粗砂
取上：G-503
No.：748
様式：大和第IV様式
残存高：21.2
残存幅：13.1

035



MP-文様-0048

### 035 土器文様（鉤状文）

本文様は、大和第Ⅴ様式の有孔鉢に印刻されたものである。南地区の第69次調査の環濠から出土した。完形品である。有孔鉢の胴部上半に印刻された鉤状文で、左上がりの並行タタキ後に縦方向に鉤状文タタキをおこなうが、鉤部分はわずかに円弧が残る程度で全体像と単位はおさえられない。鉢上半と下半では胎土である粘土が異なる。

第69次調査
遺構：SD-1109
層位：第5(下)層
土色：—
取上：土-7510
No.：721
様式：大和第Ⅴ様式
口径：13.5
高さ：10.6

036



MP-文様-0014

### 036 土器文様（綾杉文）

本文様は、大和第Ⅴ様式の器台胴部にヘラ描きされたものである。北西端の第13次調査の環濠から出土した。胴部下半の破片である。胴部中央と裾部に疑凹線文を巡らせ、その間の4方に長方形の透孔を入れる。この透孔間に縦方向の綾杉文を3帯挿入する。綾杉文はまず羽状に描いた後、中軸線を描く。線刻部にはわずかに赤彩が残る。

第13次調査
遺構：SD-06
層位：崩壊土
土色：—
取上：—
No.：308
様式：大和第Ⅴ様式
残存長：10.4
残存幅：10.6

037



MP-文様-0022

### 037 土器文様（山形文・簾状文）

本文様は、大和第Ⅴ様式の高坏に櫛描きされたものである。西地区北部の第37次調査の河跡から出土した。坏部の一部を欠くが、ほぼ完形である。脚裾部には櫛描きの山形文と直線文、坏部には2帯の山形文の間に簾状文を巡らす。また、脚端部と口縁端部には刻目を入れる。坏部内面にはミガキ(暗文)を放射状に入れる。

第37次調査
遺構：SX-2101
層位：第8層
土色：灰黒色粘砂
取上：—
No.：305
様式：大和第Ⅴ様式
高さ：12.5
胴径：12.4

038



MP-文様-0043

### 038 土器文様（山形文・簾状文）

本文様は、大和第Ⅴ様式の高坏に櫛描きされたものである。北東端の第24次調査の環濠から出土した。「ハ」字状に拡がる脚部の破片である。脚裾部には櫛描きの2帯の簾状文の間に山形文を巡らす。文様の上には、2孔一対の円形透孔を2段並べる。

第24次調査
遺構：SD-107
層位：第4層
土色：植物層
取上：—
No.：189
様式：大和第Ⅴ様式
残存長：11.0
残存幅：15.2

## 039 土器文様 (半円文・直線文)

本文様は、大和第VI-3様式の細頸壺に印刻・櫛描きされたものである。西地区中央部の第14次調査の井戸から出土した。半円文は半裁竹管状工具により印刻され、頸部下端から口縁部へ半円文と直線文を交互に入れる。上段の2つの半円文は上下に逆方向の半円文を重ねることで逆「S」字状を呈す。また、消された半円文もみられる。

第14次調査
遺構：SK-102
層位：下層
土色：黒粘
取上：土-05
No.：27
様式：大和第VI-3様式
高さ：19.2
胴径：14.4



MP-文様-0023

## 040 土器文様 (弧帯文)



MP-特殊-0106

本文様は、大和第V様式の高坏に櫛描きされたものである。北西端の第13次調査の環濠から出土した。坏部の一部を欠くが、ほぼ完形である。「ハ」字状に拡がる脚部に浅い楕円形の坏部がつく。坏部の長軸側には互いに向き合うように長方形の突出を作り、その下を三角形の透孔風にする。その突出部分に弧帯文風の櫛描文が描かれている。また、この文様を除く外面部分と坏部内面の側面には赤色塗彩がされている。脚部には、四方に円形透孔を縦方向に4つあける。脚部にも赤色塗彩が残る。

第13次調査
遺構：SD-02
層位：砂層
土色：—
取上：土-3
No.：72
様式：大和第V様式
高さ：17.8
坏径：18.5×15.3

## 041 土器文様 (弧帯文)

本文様は、大和第VI-3様式の壺にへら描きされたものである。西地区の第14次調査の井戸から出土した。ナデ調整で仕上げられた壺胴部中央の破片である。弧帯文は明瞭な線刻で、胴部の一部に描かれたと思われる。「S」字状の文様を縦方向に描き、上方の曲線の右側や交点部分に撥状の線刻をいれるものである。

第14次調査
遺構：SK-106
層位：上層
土色：黒粘
取上：—
No.：53
様式：大和第VI-3様式
残存長：7.7
残存幅：11.4



MP-文様-0007



042 土器文様 (弧帯文)

042



MP-文様-0041

本文様は、大和第VI-3様式の小形台付長頸壺にヘラ描きされたものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。ナデ調整で仕上げられた壺で、口縁部と脚台部の一部を欠損する。胴部の全面に細線で文様を描く。弧帯文は、逆「S」字状・「S」字状の文様を横方向に連続的に組み合わせたものである。

第91次調査
遺構：SD-101B
層位：第6(下)層
土色：黒灰色粘砂
取上：—
No.：346
様式：大和第VI-3様式
復元高：10.4
胴径：7.0

043



MP-文様-0002

043 土器文様 (弧帯文)

本文様は、大和第VI-3様式の  
小形長頸壺にヘラ描きされたものである。南東端の第91次調査の環濠から出土した。口縁部の一部が欠損する。弧帯文は壺胴部の一部に描かれ、その主体となる逆「S」字状文様は3本一単位で、下側の曲線は底部近くで、表現できていない。この曲線に組み合う曲線は頸部から底部方向に描かれている。

第91次調査
遺構：SD-103
層位：第2(下)層
土色：—
取上：G-261
No.：185
様式：大和第VI-3様式
高さ：9.2
胴径：7.5

044



MP-文様-0040

044 土器文様 (弧帯文)

本文様は、大和第VI-3様式の壺にヘラ描きされたものである。南東端の第40・86次調査の環濠から出土した。ナデ調整で仕上げられた壺で、壺胴部中央の2破片が残存する。文様は部分的で明瞭に描かれている。弧帯文の全体は不明であるが、3～5本を一単位とする曲線が組み合わせられている。第1破片は楕円形状、第2破片は撥状の文様となっている。

044-1

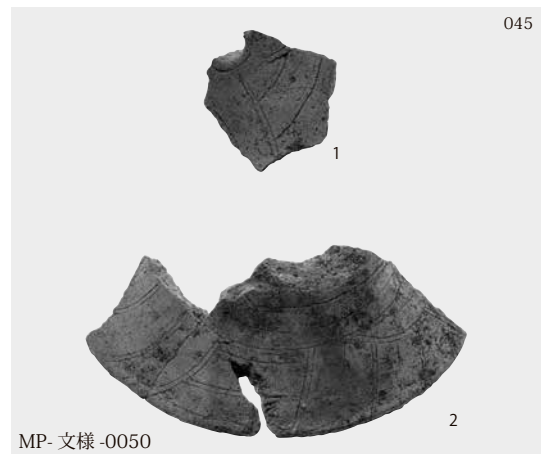
第40次調査
遺構：SD-101
層位：第4(上)層
土色：灰褐色砂質土
取上：—
No.：179
様式：大和第VI-3様式
残存長：9.7
残存幅：10.6

## 045 土器文様 (弧帯文)

本文様は、大和第VI-3様式の器台にへら描きされたものである。西地区の第99次調査の環濠から出土した。胴部中央から裾部の破片が残存する。文様は細線で全周し、基本的には2本一単位で描かれるが、その2本線で構成された文様間には1本線が挿入される。弧帯文は、左斜め方向と横方向の弧線が組み合うように描かれている。

045-2

第99次調査
遺構：SD-8101
層位：第1層
土色：黒褐色粘質土
取上：その1
No：65
様式：大和第VI-3様式
残存高：4.8
復元裾径：16.0



MP-文様-0050

## 046 土器文様 (ヒレ形文等)



MP-文様-0067

本文様は、大和第VI-3様式の小形長頸壺にへら描きされたものである。西地区の第74次調査の井戸から出土した。ほぼ完形の壺である。文様は明瞭な細線で、口頸部では上から波状文・斜格文と鋸歯文・弧帯文風文様とヒレ形文・斜線文を全周させている。弧帯文風文様は全体の2/3を占め、2本一単位で波状に描きその上下に渦文を挿入するものである。残りの1/3にはヒレ形文を上の方山形文から、あるいは下の斜線文から互に向き合うように描いている。胴部の文様は、胴部中央を界に上下に柵をつくるように描かれている。2本一単位で、上端の横線を引いた後、12方向に垂下させる縦線、そして胴部中央の横線、底部近くの横線を引いている。これら文様が描かれる前にも何らかの文様などが描かれていたようで、胴部上端や底部近くにナデによって消されなかったわずかな線刻がある。

第74次調査

遺構：SK-119
層位：第1層
土色：—
取上：土-150
No：616
様式：大和第VI-3様式
高さ：13.0
胴径：10.2

## 047 土器文様 (ヒレ形文)

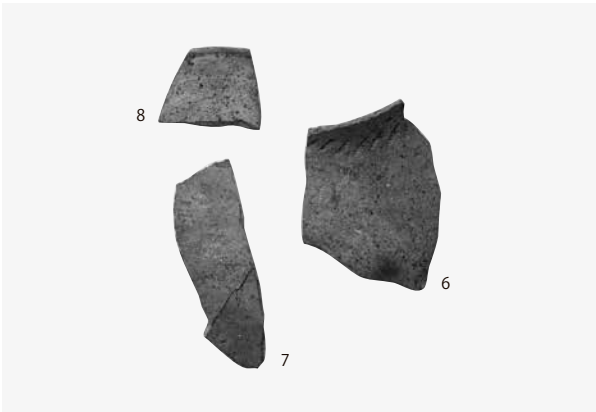
本文様は、大和第VI-3様式の長頸壺の口頸部にへら描きされたものである。北地区の第59次調査の黒褐色土層から出土した。口頸部の一部のみ残存する。文様は頸部を全周させるように描かれたと思われ、明瞭な線刻である。1条の直線文を描き、その直線と重なるように三日月形の上半部分のようなヒレ形文を連続的に描いている。

第59次調査

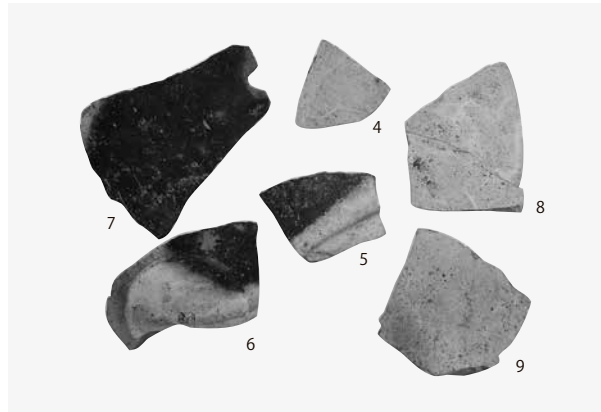
遺構：—
層位：—
土色：黒褐色土
取上：その1
No：52
様式：大和第VI-3様式
残存長：5.0
残存幅：6.6



MP-文様-0066



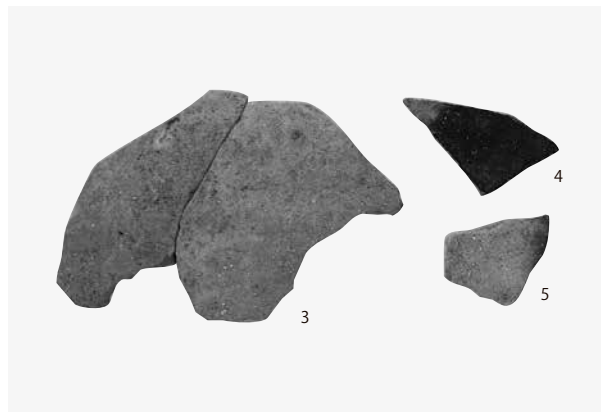
絵画002(MP-絵画-0086)残片



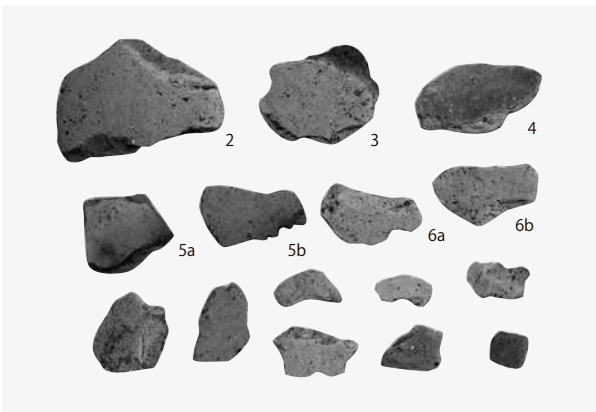
絵画008(MP-絵画-0069)残片



絵画009(MP-絵画-0076)残片



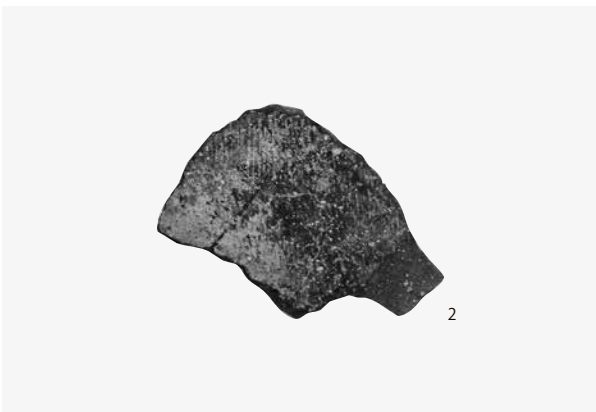
絵画014(MP-絵画-0087)残片



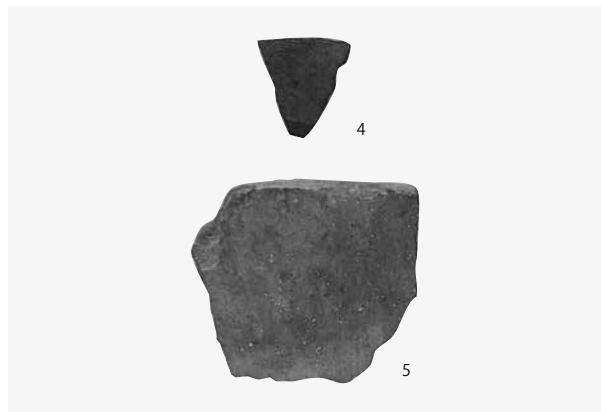
絵画015(MP-絵画-0021)残片



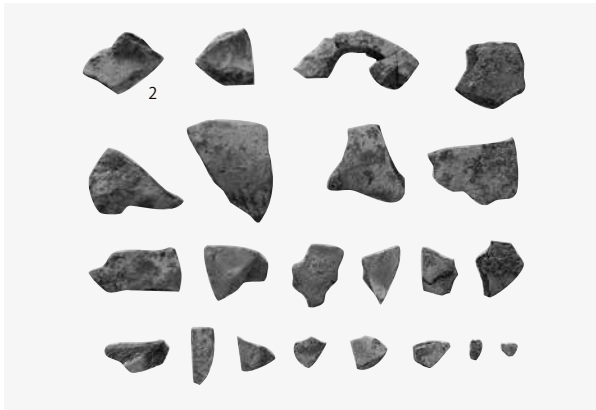
絵画016(MP-絵画-0088)残片



絵画019(MP-絵画-0065)残片



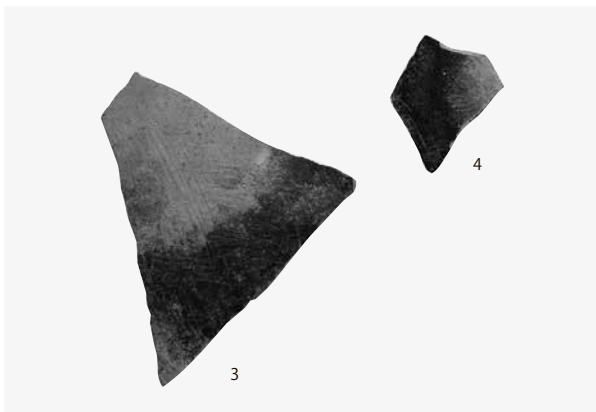
絵画022(MP-絵画-0026)残片



絵画024(MP-絵画-0012)残片



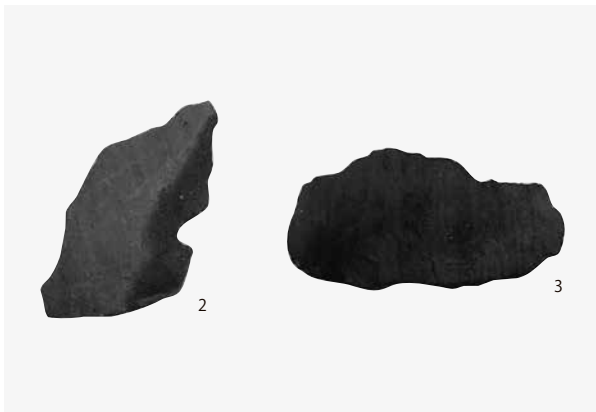
絵画048(MP-絵画-0010)残片



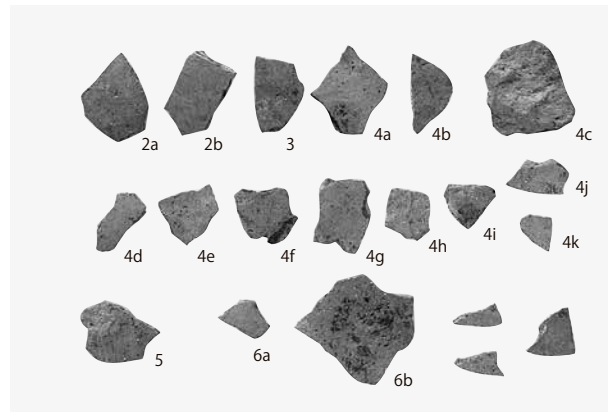
絵画050(MP-絵画-0003)残片



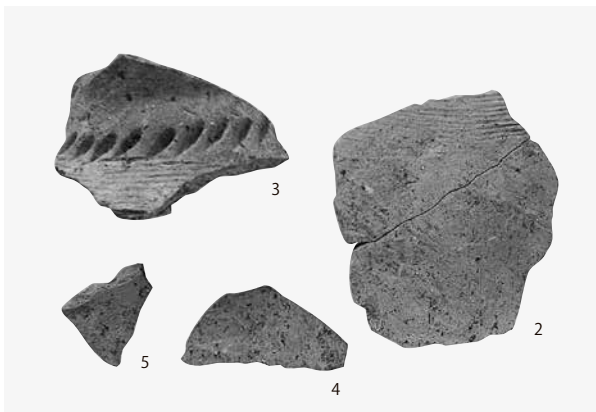
絵画066(MP-絵画-0082)残片



絵画085(MP-絵画-0101)残片



絵画089(MP-絵画-0020)残片



絵画090(MP-絵画-0022)残片



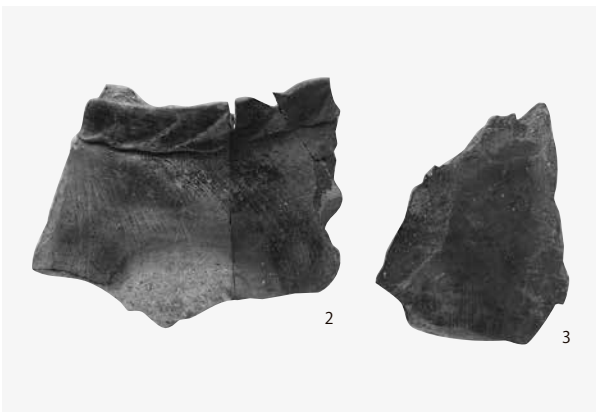
絵画094(MP-絵画-0004)残片



絵画095(MP-絵画-0120)残片



絵画101(MP-絵画-0154)残片



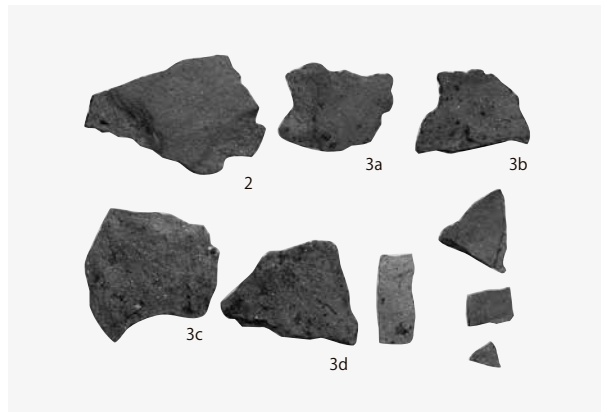
絵画102(MP-絵画-0131)残片



絵画115(MP-絵画-0140)残片



絵画119(MP-絵画-0116)残片



記号008(MP-記号-0071)残片

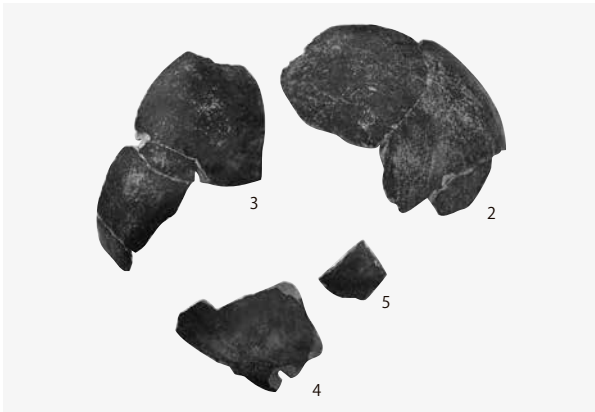


記号020(MP-記号-0036)残片



記号081(MP-記号-0114)残片

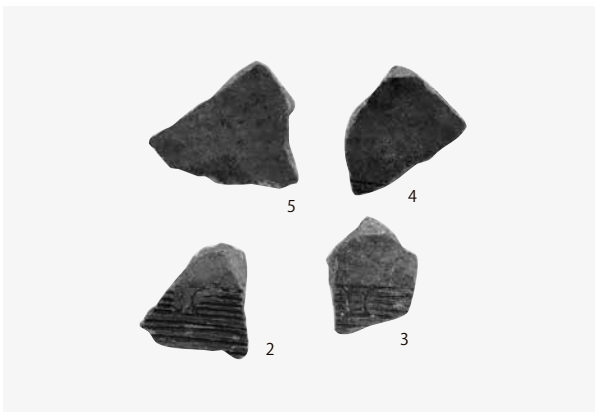
1. 遺物図版



文様011(MP-文様-0068)残片



文様016(MP-文様-0011)残片



文様017(MP-文様-0090)残片



文様030(MP-文様-0020)残片



文様038(MP-文様-0043)残片

絵画土器 一覧表

掲載番号	管理番号 (Mコード)	調査 次数	遺構名	層位	土色	取上	No	様式/ 時期	法量	備考	掲載 ページ				
絵画001	MP-絵画-0008	8	—	—	暗褐色包含層	—	—	IV-1	高※80.6、胴径※54.0、 厚1.6		20				
		8	大溝	上層	—	—	—								
		8	SD-01	—	暗黒褐色土	—	—								
		8	大溝	第2層	暗青灰色粘土	—	—								
		8	—	包含層	—	—	—								
		22	—	第Ⅰ層	黒色土	—	4								
		22	—	第Ⅱ層	黒褐色土	—	10								
		22	—	第Ⅱ層	黒褐色土	—	11								
		22	中世大溝	第1層	暗褐色土	—	30								
		22	中世大溝	第3層	灰粘	—	49								
		22	中世大溝	第3層	灰粘	—	52								
		22	中世大溝	第3層	灰粘	—	57								
		22	中世大溝	第4層	灰白色粗砂	—	63								
		22	中世大溝	第1~3層	—	—	104								
		22	SK-101	第1(下)層	黒色粘質土	土・124	180								
		38	SD-51	—	—	—	—								
		絵画002	MP-絵画-0086-1	80	SD-101	第6層	黒灰色粘砂					—	185	IV-1	長(29.5)、幅(27.0)、 厚0.8
80	SD-101B			第9層	黒灰粘	—	226								
80	SD-101B			第10層	黒粘	—	230								
80	SD-101B			第10層	黒粘	—	231								
MP-絵画-0086-2	80		—	—	黒褐色粘質土	—	29	長(6.8)、幅(8.7)、厚0.7							
	80		SD-101	第5層	暗灰褐粘	—	180								
MP-絵画-0086-3	80		SD-101B	第9層	黒灰粘	—	226	長(8.3)、幅(9.8)、厚0.7							
	80		SD-101C	第12層	黒粘	—	330								
MP-絵画-0086-4	80		SD-101	第6層	黒灰色粘砂	—	176	長(5.6)、幅(5.4)、厚0.8							
MP-絵画-0086-5	80		SD-101	第7層	暗灰色粘砂	—	150	長(7.8)、幅(8.7)、厚0.8							
MP-絵画-0086-6	80		SD-101	第5層	暗灰褐粘	—	136	長(12.7)、幅(10.0)、 厚0.8							
MP-絵画-0086-7	80		SD-101	第5層	暗灰褐粘	—	180	長(14.5)、幅(6.5)、 厚0.7							
	80		SD-101	第7層	暗灰色粘砂	—	150								
MP-絵画-0086-8	80		SD-101	第5層	暗灰褐粘	—	160	長(5.8)、幅(7.2)、厚0.8							
絵画003	MP-絵画-0061-1		59	SD-1102	第2層	—	土・2298	391	Ⅲ-4	長(11.5)、幅(17.9)、 厚1.0		21			
			59	SD-1102	第2層	—	土・3207	391							
			59	SD-1102	第2層	黒色粘質土	その1	395							
		59	SD-1102	第2層	—	土・2299	391								
	MP-絵画-0061-2	59	SD-1102	第2層	—	土・1213	375	長(10.0)、幅(8.0)、 厚0.8							
		59	SD-1102	第1層	黒色粘質土	—	327								
59	SD-1102	第1層	黒色粘質土	—	334										
絵画004	MP-絵画-0073-1	63	SD-103B	第2層(下)	灰黒粘	—	249	V-1	長(7.5)、幅(12.9)、 厚1.1		21				
		63	SD-103B	第2層	灰黒粘	—	225								
	MP-絵画-0073-2	63	SD-103A	第1層(下)	黒褐色粘質土	—	205					長(9.9)、幅(6.2)、厚1.2			
MP-絵画-0073-3	63	SD-103B	第1層(下)	黒褐色粘質土	—	138	長(5.5)、幅(7.9)、厚0.9								
絵画005	MP-絵画-0070	73	SD-103	第3層	黒灰粘	—	135	IV-1	高(13.8)、幅(11.0)、 厚0.9		22				
絵画006	MP-絵画-0078-1	62	SD-101	第4-b層	暗黄灰色土	—	128	IV-1	長(9.2)、幅(8.2)、厚0.8		22				
	MP-絵画-0078-2	62	SD-101	第4層	灰黒粘	—	125					長(10.5)、幅(9.8)、 厚1.0			
絵画007	MP-絵画-0079-1	63	SD-103B	第1(下)層	黒褐色粘質土	—	136	IV・V	長(5.7)、幅(5.3)、厚0.5		23				
	MP-絵画-0079-2	63	SD-103B	第3層	黒灰粘	—	263					長(4.3)、幅(4.5)、厚0.5			
絵画008	MP-絵画-0069-1	72	SD-107	第3層	灰黒粘	—	241	V-1	長(10.8)、幅(9.3)、 厚0.8		23				
	MP-絵画-0069-2	76	SD-1107	第2(下)層	灰黒色粘質土	—	489					長(10.1)、幅(10.4)、 厚0.9			
	MP-絵画-0069-3	76	SD-1107	第2(下)層	灰黒色粘質土	—	214					長(9.0)、幅(6.2)、厚0.9			
	MP-絵画-0069-4	72	SD-107	第3層	灰黒粘	—	226					長(11.2)、幅(9.5)、 厚1.1			
	MP-絵画-0069-5	72	SD-107	第3層	灰黒粘	—	189					長(7.2)、幅(8.6)、厚1.3			
	MP-絵画-0069-6	72	SD-107	第3層	灰黒粘	—	235					長(7.3)、幅(10.7)、 厚1.4			
		76	SD-1107	第1-c層	黒褐色粘質土	—	213								
	MP-絵画-0069-7	76	SD-1107	第2(下)層	灰黒色粘質土	—	214					長(13.2)、幅(12.4)、 厚1.2			
		72	SD-107	第3層	灰黒粘	—	189								
	MP-絵画-0069-8	76	SD-107	第3層	灰黒粘	—	226					長(10.1)、幅(10.3)、 厚1.1			
76		SD-107	第3層	灰黒粘	—	235	長(5.8)、幅(6.3)、厚0.9								

## 2. 遺物一覽表

掲載番号	管理番号 (Mコード)	調査 回数	遺構名	層位	土色	取上	No	様式/ 時期	法量	備考	掲載 ページ		
絵画009	MP-絵画-0076-1	72	SD-107	第3層	灰黒粘	—	241	V-1	長(15.2)、幅(11.0)、 厚0.6		24		
		72	SD-107	第3層	灰黒粘	—	237						
	MP-絵画-0076-2	72	SD-107	第3層	灰黒粘	—	225		長(6.9)、幅(8.7)、厚0.8				
		72	—	—	黒褐色土	—	25						
MP-絵画-0076-3	72	SD-107	第3層	灰黒粘	—	225	長(6.3)、幅(5.0)、厚0.5						
絵画010	MP-絵画-0074	69	SD-1104	第3層	暗灰粘	—	1727	IV	長(6.8)、幅(5.3)、厚0.9			24	
絵画011	MP-絵画-0098	3	SD-02	—	—	—	—	中期	長(7.4)、幅(8.8)、厚0.5			24	
絵画012	MP-絵画-0097-1	3	—	砂層(灰褐色)	—	—	—	IV	長(5.5)、幅(6.4)、厚0.7			25	
	MP-絵画-0097-2	61	SK-131	第2層	—	写-202	1038		長(10.1)、幅(8.0)、 厚0.7				
	MP-絵画-0097-3	61	—	—	黒褐色土	—	253		長(5.4)、幅(5.4)、厚0.8				
絵画013	MP-絵画-0075-1	69	SD-1125	第5層	暗灰粘	—	1697	IV-2	長(17.1)、幅(12.0)、 厚0.7				25
		69	SD-1125	第3(下)層	暗灰粘	—	1805						
	MP-絵画-0075-2	69	—	—	黒褐色土II	—	1775		長(9.3)、幅(8.1)、厚0.5				
絵画014	MP-絵画-0087-1	84	SD-52	—	灰褐色粘質土	—	66	IV-2?	長(18.9)、幅(20.1)、 厚0.7				26
		89	SD-1114B	第5層	黒色粘砂	—	387						
		93	SD-2067	第1層	暗灰色粘質土	—	14						
		93	—	—	黒褐色粘質土	—	27						
	MP-絵画-0087-2	93	SD-1114	第1層	暗褐色粘質土	—	318		長(8.0)、幅(6.4)、厚0.8				
	MP-絵画-0087-3	93	SD-1114	第1層	暗褐色粘質土	—	318		長(12.6)、幅(17.9)、 厚0.9				
		93	—	—	黒褐色粘質土	—	20						
	MP-絵画-0087-4	93	SD-1114	第1層	暗褐色粘質土	—	318		長(4.2)、幅(8.3)、厚0.7				
MP-絵画-0087-5	93	—	—	黒褐色粘質土	—	20	長(4.9)、幅(5.3)、厚0.8						
絵画015	MP-絵画-0021-1	49	SD-103	第2層	—	土-236	162	V-1	高(14.1)、幅(30.1)、 厚0.8		他に未接合細片 8点あり	26	
		49	SD-103	第2層	—	土-235	162						
		49	SD-103	第2層	黒粘	—	168						
		49	SD-103	第2層	黒粘	—	169						
		49	SD-103	第2層	黒粘	—	172						
		49	SD-103	第2層	—	土-291	185						
		49	SD-103	第2層	—	土-280	185						
		49	SD-103	第2層	—	土-295	185						
		49	SD-103	第2層	—	土-290	185						
		49	SD-103	第2層	黒粘	—	186						
	MP-絵画-0021-2	49	SD-103	第2層	黒粘	—	172		長(5.2)、幅(6.4)、厚0.4				
	MP-絵画-0021-3	49	—	—	黒色粘質土	—	49		長(4.3)、幅(4.5)、厚0.3				
	MP-絵画-0021-4	49	SD-103	第2層	黒粘	—	169		長(2.8)、幅(5.1)、 厚(0.4)				
	MP-絵画-0021-5	49	SD-103	第2層	黒粘	土-287	185		長(3.1)、幅(3.5)、 厚0.3	他に未接合片 1点あり			
MP-絵画-0021-6	49	SD-103	第2層	黒粘	—	172	長(2.3)、幅(4.1)、 厚(0.3)	他に未接合片 1点あり					
絵画016	MP-絵画-0088-1	91	SD-102	第2層	暗灰粘	—	156	V	長(19.8)、幅(14.9)、 厚1.0	接合するが、 現在は個別に 管理	27		
		91	SD-101B	第6(下)層	黒灰色粘砂	その1	327						
		91	SD-101B	第6(下)層	黒灰色粘砂	その4	355						
		91	SK-103	—	黒色粘砂	—	536						
	MP-絵画-0088-2	91	SD-101B	第6(下)層	黒灰色粘砂	その4	355						
		91	SK-103	—	黒色粘砂	—	536						
		91	SE-01	第2層	黒色粘質土 (灰粘混)	—	540						
	MP-絵画-0088-3	91	SD-101B	第6(下)層	黒灰色粘砂	その2	343						
		91	SE-01	第2層	黒色粘質土 (灰粘混)	—	540						
		91	SK-103	—	黒色粘砂	—	536						
91		SD-101B	第6(下)層	黒灰色粘砂	その4	355							
91	—	—	黒褐色粘質土 (シルト質)	—	17								
絵画017	MP-絵画-0015-1	47	SD-2105	第0層	暗灰褐色砂質土	その1	273	IV-1	長(8.0)、幅(10.1)、 厚1.2		27		
	MP-絵画-0015-2	47	SD-2117	第1層	暗褐色土	—	327		長(6.9)、幅(8.0)、厚0.9				
	MP-絵画-0015-3	77	SD-4110	第2層	暗灰褐色砂質土	—	260		長(6.9)、幅(4.6)、厚1.0				
絵画018	MP-絵画-0077-1	91	SD-101B	第5層	明褐色砂質土	—	213	IV	長(5.2)、幅(7.7)、厚0.8		28		
	MP-絵画-0077-2	83	SD-1110	第2-b層	灰色シルト	—	223		長(7.4)、幅(5.1)、厚0.8				
絵画019	MP-絵画-0065-1	61	SD-103B	第5層	暗褐色砂質土	—	681	IV-1	長(15.7)、幅(18.6)、 厚0.9		28		
		61	SD-102B	第6-b層	灰黒色砂質土	—	773						
		61	—	—	灰黄色粗砂	—	104						
MP-絵画-0065-2	61	—	—	灰黄色粗砂	—	104	長(7.2)、幅(9.7)、厚0.8						
絵画020	MP-絵画-0091	59	Pit-1109	—	—	—	1211	中期	長(5.6)、幅(5.2)、厚0.8			28	
絵画021	MP-絵画-0032-1	58	SD-51	第3(下)層	暗灰色粗砂	—	74	IV	長(9.0)、幅(11.3)、 厚1.0			29	
	MP-絵画-0032-2	58	SD-51	第8層	灰黒粘	—	158		長(9.4)、幅(7.6)、厚1.0				











掲載番号	管理番号 (Mコード)	調査 回数	遺構名	層位	土色	取上	No	様式/ 時期	法量	備考	掲載 ページ
記号018	MP-記号-0084	76	SD-1106	第2層	—	土-206	104	VI-3	口径10.3、高16.4、 胴径11.6		62
記号019	MP-記号-0053	74	SK-119	第5層	—	土-504	691	VI-3	口径10.5、高17.6、 胴径15.0	井戸供献土器	62
記号020	MP-記号-0036	33	SK-125	第3層	—	土-330	420	VI-2	口径10.5、高30.3、 胴径16.5	井戸供献土器、 他に未接合細片 17点あり	62
		33	SK-125	第3層	—	—	484				
記号021	MP-記号-0010	33	SD-109	第5(下)層	—	土-5376	341	VI-2	口径12.6、高(11.7)、 厚0.7		63
記号022	MP-記号-0049	69	SD-1109	第5層	—	土-580	313	VI-1	高(20.0)、胴径14.5、 底径3.8		63
記号023	MP-記号-0056	79	SK-120	第5層	—	土-503	527	VI-1	口径13.2、高28.2、 胴径17.3	井戸供献土器	63
記号024	MP-記号-0001	13	SD-04	中層	黒粘	土-06	144	VI-2	高(18.4)、胴径13.7、 底径5.7		63
記号025	MP-記号-0012	33	SK-125	第3層	—	土-356	493	VI-2	口径10.4、高24.7、 胴径13.1	井戸供献土器	64
記号026	MP-記号-0095	63	SK-106	第2層	—	土-207	181	VI-3	口径12.7、高19.9、 胴径19.5	井戸供献土器	64
記号027	MP-記号-0118	74	SK-118	第3層	—	土-301	529	V-1	口径16.9、高34.5、 胴径21.6	井戸供献土器	64
記号028	MP-記号-0043	69	SD-1109	第5(下)層	—	土-6562	548	V-2	口径10.3、高28.9、 胴径15.5		64
記号029	MP-記号-0044	69	SD-1109	第5(下)層	—	土-6508	548	VI-1	高(22.0)、胴径15.0、 厚0.5		65
記号030	MP-記号-0017	33	SD-109	第5(下)層	黒粘	—	354	VI-2	口径12.5、高20.8、 胴径15.0		65
記号031	MP-記号-0091	63	SK-105	第2層	—	土-202	211	VI-3	口径10.4、高21.1、 胴径12.0	井戸供献土器	65
記号032	MP-記号-0009	33	SK-133	第2(下)層	—	土-205	508	VI-2	口径11.9、高※18.3、 厚0.7	井戸供献土器	65
記号033	MP-記号-0059	69	SD-1109	第5(下)層	—	土-6502	548	VI-1	口径11.0、高(21.9)、 胴径13.8		66
記号034	MP-記号-0057	69	SD-1109	第6層	—	土-643	848	V-2	高(30.9)、胴径21.1、 底径7.1		66
記号035	MP-記号-0027	79	SK-120	第6層	—	土-601	535	VI-1	高(29.6)、胴径17.1、 厚0.6	井戸供献土器	66
記号036	MP-記号-0040	33	SK-133	第3層	黒粘	土-302	510	VI-2	口径10.7、高19.4、 胴径12.0	井戸供献土器	66
記号037	MP-記号-0011	33	SK-114	第5層	—	土-504	476	VI-3	口径12.9、高20.5、 胴径21.1	井戸供献土器	67
記号038	MP-記号-0022	14	SK-106	下層	黒粘	土-21	38	VI-3	口径10.7、高20.1、 胴径11.1	井戸供献土器	67
記号039	MP-記号-0097	63	SK-106	第2層	—	土-210	181	VI-3	口径10.7、高21.4、 胴径18.7	井戸供献土器	67
記号040	MP-記号-0019	34	SD-102	第3層	灰粘	—	56	VI-4	高(20.7)、胴径20.5、 底径3.2		67
記号041	MP-記号-0088	34	SD-103	第1層	黒色粘質土	—	65	VI-4	口径10.7、高※14.2、 胴径13.7		68
記号042	MP-記号-0038	33	SK-125	第3層	黒粘	土-344	493	VI-2	口径9.7、高22.6、 胴径14.2	井戸供献土器	68
記号043	MP-記号-0081	69	SK-1128	第2層	—	土-209	1840	VI-3	口径9.9、高16.4、 胴径11.5	井戸供献土器	68
記号044	MP-記号-0045	69	SD-1109	第6層	—	土-620	848	V-2	口径11.9、高23.7、 胴径14.3		68
記号045	MP-記号-0005	14	SK-101	最下層	黒粘	土-03	3	VI-3	口径11.3、高22.1、 胴径18.4	井戸供献土器	69
記号046	MP-記号-0078	62	SD-101	第2層	—	土-242	106	VI-3	口径8.6、高12.9、 胴径10.4		69
記号047	MP-記号-0024	49	SK-111	第6層	—	土-601	143	VI-3	口径11.1、高19.0、 胴径16.3	井戸供献土器	69
記号048	MP-記号-0046	69	SD-1109	第6層	—	土-602	848	V-2	口径10.5、高26.8、 胴径14.2		69
記号049	MP-記号-0089	34	SD-103	第2層	黒粘	—	77	VI-2	口径10.9、高24.2、 胴径13.8		70
記号050	MP-記号-0003	13	SD-06B	第4層	灰黒粘	土-401	335	V-1	口径12.4、高26.6、 胴径15.5		70
記号051	MP-記号-0062	69	SD-1102	第2(下)層	—	土-1252	1250	VI-1	口径10.2、高25.0、 胴径14.6		70
記号052	MP-記号-0023	37	SK-2121	第7層	黒灰粘	土-703	416	VI-3	口径14.0、高25.9、 胴径23.9	井戸供献土器	70
記号053	MP-記号-0021	14	SK-106	中層	黒粘	土-32	49	VI-3	口径8.9、高14.6、 胴径10.3	井戸供献土器	71
記号054	MP-記号-0116	91	SD-101B	第6(下)層	—	土-2687	361	V-2	口径10.2、高20.0、 胴径12.8		71
記号055	MP-記号-0054	74	SK-119	第4層	—	土-401	684	VI-3	口径13.0、高23.4、 胴径18.1	井戸供献土器	71
記号056	MP-記号-0119	93	SK-1120	第8層	—	土-802	306	V-2	高(27.6)、胴径19.3、 厚0.7	井戸供献土器	71
記号057	MP-記号-0029	74	SK-119	第6層	—	土-604	980	VI-3	口径9.5、高20.9、 胴径11.1	井戸供献土器	72









**【論文】**

久野邦雄「唐古・鍵遺跡出土の絵画土器について」『考古学雑誌』第66巻第1号 日本考古学会 1980

**【報告書】**

田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡 I 一範囲確認調査一 遺構・主要遺物編』田原本町埋蔵文化財調査報告書 第5集 2009

田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡 I 一範囲確認調査一 写真図版編』田原本町埋蔵文化財調査報告書第5集 2009

田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡 I 一範囲確認調査一 特殊遺物・考察編』田原本町埋蔵文化財調査報告書 第5集 2009

**【概報】**

田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『昭和52年度 唐古・鍵遺跡発掘調査概報』1978

田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『昭和54年度 唐古・鍵遺跡第6・7・8・9次発掘調査概報』1980

田原本町教育委員会「昭和57年度 唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要1』1983

田原本町教育委員会「昭和58年度 唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報 黒田大塚古墳第1次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要2』1984

田原本町教育委員会「昭和59年度 唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報 黒田大塚古墳第2次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要3』1986

田原本町教育委員会「昭和60年度 唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要4』1986

田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要6』1987

田原本町教育委員会「昭和61年度 唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要7』1987

田原本町教育委員会「昭和62・63年度 唐古・鍵遺跡第32・33次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要11』1989

田原本町教育委員会「平成4年度 唐古・鍵遺跡第52次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要13』1993

田原本町教育委員会「平成8年度 唐古・鍵遺跡第61次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要16』1997

**【年報】**

田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報1 1988・1989年度』1990

田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報2 1990年度』1991

### 3. 文献（発掘調査関係）

- 田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 3 平成 3 年度』1992  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 4 1992・1993 年度』1994  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 5 1994・1995 年度』1996  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 6 1996 年度』1997  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 7 1997 年度』1998  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 8 1998 年度』1999  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 9 1999 年度』2000  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 10 2000 年度』2001  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 11 2001 年度』2002  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 12 2002 年度』2003  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 13 2003 年度』2004  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 14 2004 年度』2006  
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報 21 2011 年度』2013

#### 【図録等】

- 飯田恒男『大和唐古石器時代遺物図集』1929  
田原本町『唐古・鍵遺跡発掘調査 50 周年記念 唐古・鍵ムラの弥生人』1986  
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『唐古・鍵弥生遺跡調査 50 年史』『奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・特別陳列解説』1986  
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・田原本町教育委員会『平成 8 年度春季特別展 弥生の風景 唐古・鍵遺跡の発掘調査 60 年』1996  
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館「唐古・鍵遺跡」『橿原考古学研究所 50 周年記念特別展 石舞台から藤ノ木古墳』1988  
田原本町教育委員会『唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録』2004  
田原本町教育委員会『たわらもと 2005 発掘速報展』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.1 2005  
田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡と周辺の弥生遺跡』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.2 2005  
田原本町教育委員会『ヤマト王権はいかにして始まったか～弥生の王都 唐古・鍵～』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.6 2007  
田原本町教育委員会『弥生デザイン』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.8 2008  
田原本町教育委員会『弥生グラフィティ』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.10 2009  
田原本町教育委員会『消えた古墳』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.12 2011  
田原本町教育委員会『弥生エッセンス～その技と美～』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.13 2011  
田原本町教育委員会『村を守る一乱世の考古学一』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.14 2012  
田原本町教育委員会『弥生遺産』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.16 2013  
田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡 Vol.1 概説編』田原本の遺跡 1 1999  
田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡 Vol.2 土器編』田原本の遺跡 2 1998

## 附

- 田原本町教育委員会『2000年の時間を超えて 唐古・鍵遺跡 Vol.3 概説編 2』田原本の遺跡 3 2000
- 田原本町教育委員会『弥生の絵画～唐古・鍵遺跡と清水風遺跡の土器絵画～』田原本の遺跡 4 2006
- 田原本町教育委員会『弥生の王都 唐古・鍵』田原本の遺跡 6 2013
- 田原本町教育委員会『ミュージアムコレクション Vol.1』2007
- 田原本町教育委員会『ミュージアムコレクション Vol.2』2009
- 田原本町教育委員会『ミュージアムコレクション Vol.3』2010

唐古・鍵遺跡

考古資料目録Ⅰ

—土器編1（絵画・記号・文様）—

平成27年3月31日

編集・発行／田原本町教育委員会  
奈良県磯城郡田原本町大字阪手348-1

印刷・製本／株式会社明新社  
奈良県奈良市南京終町3-464